

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第83輯

# 男 里 遺 跡

都市計画道路樽井男里線建設に伴う発掘調査報告書

1 9 9 4

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第83輯

# 男 里 遺 跡

都市計画道路樽井男里線建設に伴う発掘調査報告書

1 9 9 4

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



調査区遠景



93年度 02-O X 出土黒色土器

## 序 文

関西新空港の開港を本年9月にひかえた泉州地域は、府下の中でも都市整備がことに近年活発になされてまいりました。このたび、そうした事業のひとつである都市計画道路樽井男里線の建設にともない埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

国際化への窓口を大きく開けつつある泉州の地において、あきらかな姿をあらわした古の人々の生活のあとを眼前にすると、悠久の時間とともに人々の暮らしは営まれてきたのだということが改めて思い返され、現代がそうした先人たちの築いた歴史の上に成り立っていることを再認識させられます。

私たちのまわりには、埋蔵文化財をはじめいろいろな歴史遺産が思いもかけず身近なところに存在していることがあります。そうした歴史遺産を保護し、後世に伝えていくことは21世紀を目前にした私たちの重要な役割であるといえるでしょう。

発掘調査にあたりましては関係者諸氏、諸機関に多大なご助力とご指導を賜り、深く感謝いたしております。今後もさらに文化財の保護等につきましてご理解とご協力をいただきますようお願い申し上げます。

平成6年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会  
理事長 岩井 幹郎

## 例 言

1. 本書は都市計画道路樽井男里線建設予定地内に所存する男里遺跡の発掘調査報告書である。
2. 事業名は「天神の森遺跡・男里遺跡」であるが、調査地は周知の遺跡である男里遺跡内に該当することから、本書の標題を『男里遺跡』とする。
3. 調査は、大阪府岸和田土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
4. 発掘調査は1992年7月20日～翌年1月29日および1993年7月26日～同年12月24日の2次にわたり実施した。担当者は、城野博文（1992年度）ならびに三木弘（1993年度）である。  
また、整理作業および報告書作成については1994年1～3月に行なった。
5. 発掘調査に先立ち、1991年および1992年に事業予定地内の試掘調査を実施した。担当者は、岡一彦（91-24天神の森試掘その2）ならびに田中一廣（92-23幡代遺跡他試掘〈天神の森試掘その3〉）である。
6. 本書は三木が編集し、三木および城野が分担執筆した。なお、文責は本文目次に記した。また、2次にわたって実施した試掘調査の成果については、第3章第4節に掲載した。その文責については各文末に記した。
7. 第12図（黒褐色粘土層分布図）作成にあたっては、泉南市教育委員会から資料の提供を受けた。

8. 自然科学分析については川崎地質株式会社に委託し、成果を附章として掲載した。
9. 遺構写真については各担当者が撮影を行なったが、遺物については小倉勝、加茂幸彦の撮影によった。
10. 発掘調査から報告書作成にいたるまで、下記の諸機関からご協力、ご指導を賜りました。記して感謝します。  
大阪府岸和田土木事務所、同尾崎出張所、泉南市教育委員会

## 凡 例

1. 遺構名は（財）大阪府埋蔵文化財協会の発掘調査規程にしたがって付した。
2. 遺物は挿図中に通し番号を付け、本文中の遺物番号は挿図と図版とが一致するようにした。
3. 本書の遺構実測図や文中にもちいた方位および座標値は国家座標系に基づいている。標高はすべて東京湾標準潮位（T.P.）、国家座標の単位はmである。なお実測図ではX（南北軸），Y（東西軸）の表示は省略した。
4. 土色の記述は、小山正忠・竹原秀雄編者『新版標準土色帖7版』（1987）によった。
5. 本書の実測図は、遺構については1/40（大型遺構については1/80）、遺物については1/3（小型品については1/2）を基本としているが、状況により変更したものもある。

# 本文目次

第1章 調査経過	1
第1節 調査にいたる経緯 (三木)	1
第2節 調査経過 (三木)	2
第3節 調査方法 (三木)	4
第2章 男里遺跡をとりまく環境	6
第1節 遺跡の地理的環境 (城野)	6
第2節 男里遺跡と周辺の遺跡 (城野)	7
第3章 調査の成果	12
第1節 調査区の基本層序 (三木)	12
第2節 1992年度の調査成果 (城野)	14
第3節 1993年度の調査成果 (三木)	28
第4節 試掘調査の成果 (田中・岡)	72
第4章 まとめ	79
第1節 平安時代における遺物廃棄の一例 (三木)	79
第2節 男里遺跡調査区の土地利用の変遷について (三木)	88
附 章 男里遺跡における花粉分析およびプラント・オパール分析 (川崎地質)	91





# 第1章 調査経過

## 第1節 調査にいたる経緯

男里川の東岸に位置する男里遺跡は泉南市男里・馬場・樽井ほかに所在する縄文～近世にかけての複合遺跡である。南北1,300m、東西900mほどの比較的大きな範囲であるが、調査地はその北東隅近くに当たっている。

樽井海岸沖に建設されるりんくうタウンから府道堺阪南線までをむすぶ都市計画道路樽井男里線の建設計画を受けて、計画路線が男里遺跡を縦断し、また天神ノ森遺跡と隣接していることから、大阪府教育委員会は大阪府土木部および岸和田土木事務所とその取り扱いについて協議を重ね、路線内の遺跡の有無および周知の遺跡の実態について詳細な資料を得るため、(財)大阪府埋蔵文化財協会に岸和田土木事務所から試掘調査の依頼がなされた。

(財)大阪府埋蔵文化財協会では1991年4～7月と1992年10～11月の2回にわたり試掘調査を実施し、大阪府教育委員会等にその結果を報告した。

それに基づき、大阪府教育委員会では周知の遺跡内部分の発掘調査の必要を認め、その旨を岸和田土木事務所に通知した。

岸和田土木事務所では(財)大阪府埋蔵文化財協会に発掘調査の委託を行い、大阪府教育委員会の指導のもとに、(財)大阪府埋蔵文化財協会によって男里遺跡の発掘調査が実施されることとなった。

なお府道堺阪南線以南の主要地方道泉佐野岩出線の発掘調査と区分するため、事業名を「天神の森遺跡・男里遺跡」と仮称した。

調査は建設工事の進捗状況や事業予定地内の建物の撤去などを考慮し、2次期わたって実施した。

まず1992年度は、府道堺阪南線から北西方向に延長110mまでの範囲で、調査対象面積は4,500m<sup>2</sup>である。

1993年度は前年度の続きから市道までの延長100mの範囲で、調査対象面積は4,000m<sup>2</sup>を測った。

## 第2節 調査経過

### 1992年度

1992年7月20日から調査を開始した。調査区内にある農業用水路を確保しつつ、調査を進めた。

試掘調査の結果に基づき、盛土・旧耕作土を重機で除去したのち、遺構検出を行い、近世の耕作痕を捉えることができた。この第1面目の調査は9月下旬に終了した。

それより以下の層については、人力掘削を行い、中世の耕作痕が残る第2面目の調査が終了したのが11月中旬であった。この間の出土遺物については、発掘調査規程の通り4mグリッドで取り上げを行なった。

第2面目から地山面までの堆積層からは、遺物の出土は認められなかったが、層厚が0.2～0.3mあり、人力掘削は年を越した。地山面でのヘリコプターによる航空測量を実施し、調査が終了したのは1月29日であった。なお調査面積は約3,970㎡である。

### 1993年度

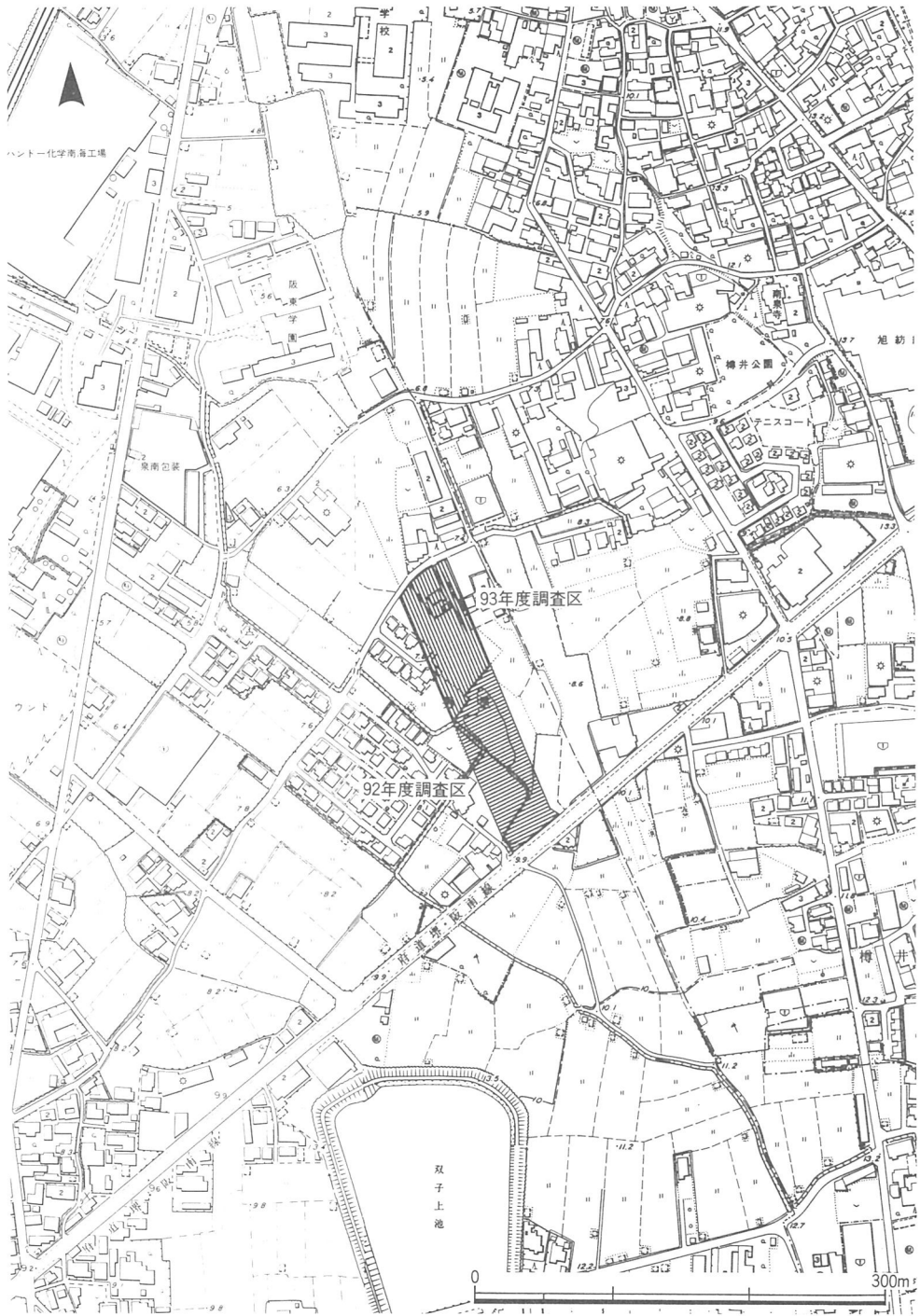
1993年度7月26日から調査を開始した。当初は農業用水路を確保しつつ、いちどに調査を行なう予定であったが、撤去の遅れた家屋が1軒調査地内に残っていたため、その家地と家屋解体工事のための車両進入路をひとまず除いて調査を始めた。

1992年度の調査結果をふまえ、盛土および旧耕作土を重機により除去したのち、古代・中世の遺構検出が可能な面まで人力掘削を行なった。

試掘調査において02-OXの存在が確認されていたが、さらに04-OBをはじめとして予測を超えた多くの遺構が検出された。また、02-OXについてはとくに遺物の出土状況の把握に重点をおいた調査を行なった。9月末に第1回目の空測を実施し、その後トレンチを設定して地山面における遺構の存否を確認して、10月初旬に当初予定の65%の範囲の調査をいったん終了した。

調査地内に残っていた家屋が10月末に解体・撤去されたので、11月初旬より残りの部分の調査を再開した。

267-OBなどの発見はあったが、先行部分の調査によって遺跡の状況が把握できていたので、調査は比較的順調に進んだ。また車両進入路下に延びていた04-OBの東側梁行も捉えることができた。12月中旬に空測を実施し、その後トレンチ調査を行なったのち、12月24日にすべての調査を終了した。なお調査面積は約3,700㎡である。



第1図 調査区位置

### 第3節 調査方法

前述したように、1992年度と1993年度の2年度にわたり、男里遺跡の発掘調査を実施した。両年の調査区は接続しているが、調査の年度や担当者が異なることから、各調査区それぞれに遺構・遺物番号を付していった。したがって両調査区で遺構番号の重複がみられる。

ただし、ともに（財）大阪府埋蔵文化財協会の「発掘調査規程」にしたがって調査を実施しており、遺構・遺物番号の付し方やグリッド設定の方法などについては両調査区で共通している。

この男里遺跡は国土座標第Ⅳ座標系に基づき表示され、大阪府発行新版（1984年建設省国土地理院承認）2,500分の1地形図の大B-2-11に位置している。

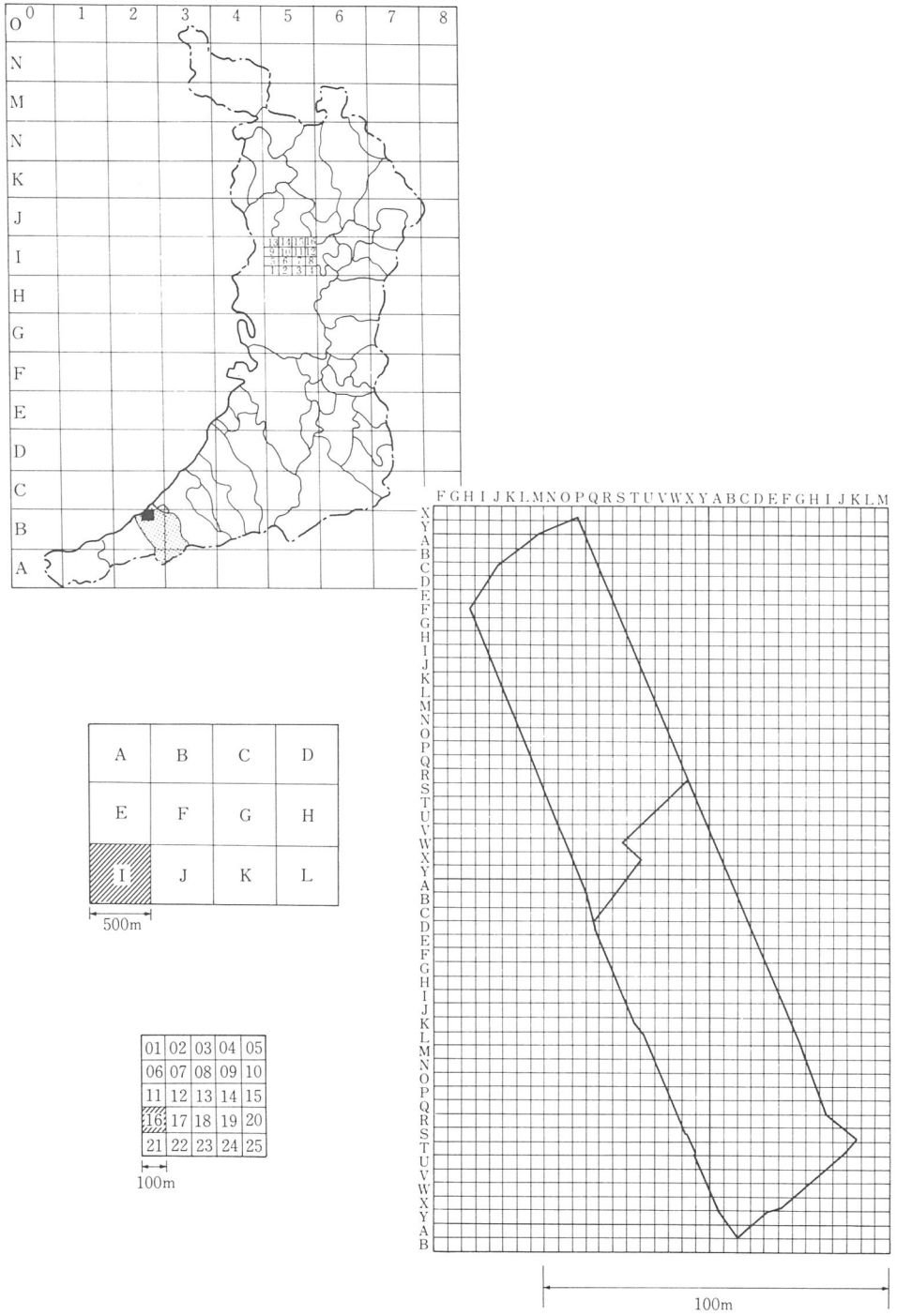
この地図区画をさらに12等分して1辺500mの方形区画をつくる。この区画にはAからLまでの呼称を与える。ついでこの1辺500mの区画をさらに25等分し、1辺100mの方形区画に細分する。この25等分された区画には01から25までの番号を付与する。そしてこの1辺100mの方形区画を縦・横25分割の625等分にすると、1辺4mの方形区画を得ることができる。

この1辺4mの方形区画には南北方向（縦軸）を先に、東西方向（横軸）を後にしたアルファベット（A～Y）記号2文字が呼称番号として与えられる。これより地区割の最小単位である1辺4mの方形区画は、5桁の記号で2,500分の1地形図のどこに位置しているかが求められるのである。

この1辺4mの方形区画を最大グリッドとして、包含層の遺物を取り上げたが、1993年度調査区の02-OXなど遺物の出土状況の把握が必要な遺構については微細図（1/10図）やドット図（1/20図）の作成を行なった。

遺構については、発見した順に01番から番号を与え、調査規定に基づく遺構種類別の記号を番号の末に加えた。

遺構の平面図については航空測量を実施し、1992年度調査については1/20図化、1993年度については1/20・1/50図化の併用を基本としているが、その他の図面などは必要によって調査時に適宜作成している。



第2図 地区割図

## 第2章 男里遺跡をとりまく環境

### 第1節 遺跡の地理的環境

男里遺跡の所在する泉南市は大阪府の南部地域に位置し、東側は樫井川を界して泉南郡田尻町、泉佐野市と接し、西側は男里川を境界として阪南市と接する。南端は基盤山地である和泉山脈を挟んで和歌山県那賀郡と接し、北方には大阪湾が開けている。

市域の地形分類を大別すると、樫井川、男里川の両河川の周囲には旧河道を中心として、それぞれ氾濫原や自然堤防、沖積段丘面などが拡がり、両河川の間には基盤山地から脈生する丘陵部や洪積段丘面が発達している。洪積段丘面は標高約10m～50mにわたって発達しており、その高さによって低位、中位、高位に分けられる。近年、高位部や丘陵部はゴルフ場や住宅団地として開発が進んでおり、地形の変形が著しい。また中位部から低位部の段丘面が最も広大であり、市街の中心部を含む。



第3図 男里遺跡周辺の地形分類図

男里川流域の地形は、現在の河道よりも東方にある旧河道を中心に、氾濫原及び谷底低地、自然堤防、沖積段丘面などに分けられる。特に沖積段丘面は南東の長山丘陵と南方の高田山丘陵に挟まれた開析谷の間に非常によく発達しており、海岸近くにまで及ぶ。

男里遺跡は男里川の右岸に立地しており、遺跡の中央部にある双子池をはさんで南北に伸びる旧河道や、男里川の支流である金能寺川の両岸から続く沖積段丘面、氾濫原、自然堤防などで構成される。

調査地点は男里遺跡の北縁部に位置しており、双子池から北東方向へ約200m隔てた所である。地形分類では氾濫原及び谷底低部、沖積段丘面にあたる。

## 第2節 男里遺跡と周辺の遺跡

泉南地域の遺跡分布図を概観すると、樫井川と男里川の周囲に遺跡が集中している様子が窺える。本書で取りあげる男里遺跡が立地する男里川の右岸には、支流である金能寺川の氾濫原上にある六尾遺跡を南端として、男里川の河口近くに位置する天神ノ森遺跡、キレト遺跡まで、多くの遺跡が周知されている。そのなかでも、男里遺跡は最大の規模を誇り、その範囲は南北約1.3km、東西約0.9kmにおよぶ。

現在、市域の最古の例として金能寺川左岸の独立丘陵上に広がる滑瀬遺跡で検出された旧石器時代のナイフ形石器がある。これは旧石器時代後期には丘陵部において生活が営まれていた証となろうか。しかし他には例示されるものが無く、その全容については不明といわざるをえない。

縄文時代には草創期に、滑瀬遺跡、岡田西遺跡、玉田山古墳群、蓮池遺跡からそれぞれ有舌尖頭器が、また海営宮池遺跡からは木葉形尖頭器が採取されている。また、前期ではフキアゲ山東遺跡から北白川下層Ⅰ a 式の土器片が検出されている。しかし全て遺構を伴わないものであるため、具体的な知見を述べることは難しい。なお滑瀬遺跡や岡中西遺跡においても横型石匙が検出されている。後期から晩期では、男里遺跡から滋賀里Ⅲ～Ⅳ式に属する土器群が検出されるが、明確なことは不明である。近隣でも幡代南遺跡などからわずかな検出例がある<sup>①</sup>だけであり、未だ男里川流域の縄文時代の様相は明らかにはなっていない。周辺に遺構や遺物の分布が非常に希薄であることから、当地ではあまり開発の進んでいなかったことが想像されるのみである。しかし市域の東縁を流れる樫井川の周辺では三軒屋遺跡や船岡山遺跡、岡田東遺跡をはじめ縄文時代後期から晩期にかけて多くの遺



第 4 図 周辺の遺跡分布図



1	中開遺跡	41	下村遺跡	81	童子畑北遺跡
2	末廣遺跡	42	下村2号墳	82	童子畑遺跡
3	安松遺跡	43	新家オドリ山遺跡	83	楠畑北遺跡
4	長滝遺跡	44	新家遺跡	84	キレト遺跡
5	禪興寺跡	45	向井山遺跡	85	天神ノ森遺跡
6	羽倉崎東遺跡	46	狐池遺跡	86	高田遺跡
7	羽倉崎遺跡	47	上村遺跡	87	戎畑遺跡
8	羽倉崎上町遺跡	48	池尻遺跡	88	男里北遺跡
9	船岡山遺跡	49	引谷池窯跡	89	男里遺跡
10	岡本廃寺	50	上野中道遺跡	90	光平寺跡
11	船岡山南遺跡	51	芋堀遺跡	91	男里東遺跡
12	道ノ池遺跡	52	石ヶ原遺跡	92	長山遺跡
13	岡ノ崎遺跡	53	高倉山東遺跡	93	山ノ宮遺跡
14	中菖蒲遺跡	54	川原遺跡	94	前田池遺跡
15	岸ノ下遺跡	55	岡田遺跡	95	幡代遺跡
16	諸目遺跡	56	氏の松遺跡	96	平野寺(長楽寺)跡
17	城ノ塚古墳	57	座頭池遺跡	97	幡代南遺跡
18	ダイジョウ寺跡	58	岡田西遺跡	98	奥ノ池遺跡
19	三軒屋遺跡	59	中小路西遺跡	99	林昌寺銅鐸出土地
20	吉見藩陣屋跡	60	中小路北遺跡	100	林昌寺跡
21	田尻遺跡	61	岡田東遺跡	101	林昌寺瓦窯跡
22	夫婦池遺跡	62	中小路遺跡	102	岡中遺跡
23	榎井西遺跡	63	新伝寺遺跡	103	岡中西遺跡
24	藤波遺跡	64	本田池遺跡	104	高田山古墳群
25	榎井城跡	65	坊主池遺跡	105	雨山遺跡
26	新家オドリ山東遺跡	66	中小路南遺跡	106	雨山南遺跡
27	新家古墳群	67	北野遺跡	107	山中溪遺跡
28	新家オドリ山南遺跡	68	大苗代遺跡	108	馬川遺跡
29	フキアゲ山東遺跡	69	仏性寺跡	109	向出遺跡
30	兎田遺跡	70	一丘神社遺跡	110	高田西遺跡
31	フキアゲ山東遺跡	71	海会寺跡	111	高田南遺跡
32	フキアゲ山1号墳	72	厩戸王子跡	112	和泉鳥取遺跡
33	フキアゲ山2号墳	73	海宮宮池遺跡	113	向山遺跡
34	兎田古墳群	74	市場遺跡	114	自然田遺跡
35	岩の前遺跡	75	上代石塚遺跡	115	井関遺跡
36	中の川遺跡	76	信之池遺跡	116	寺田山遺跡
37	高野遺跡	77	滑瀬遺跡	117	玉田山古墳群
38	昭和池遺跡	78	六尾遺跡	118	玉田山遺跡
39	下村北遺跡	79	六尾南遺跡	119	玉田山須恵器窯跡
40	下村1号墳	80	金熊寺遺跡		

表1 周辺の遺跡一覧表

跡が確認されていることから、今後男里川流域においても縄文時代に属する遺構や遺物が検出される可能性は高いものと思われる。

続く弥生時代には遺跡は増加、拡大の傾向を見せる。前期では三軒屋遺跡や船岡山遺跡など樫井川流域の遺跡が縄文時代から継続して認められる。これらの遺跡からは弥生時代を通じて遺構や遺物が検出されるのに対して、男里遺跡では前期の遺構は検出されていない。しかし中期には双子池周辺を中心にして、南東方向に向かって大規模な集落が展開される。最近の調査では複数の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出され、それに近接した地点<sup>②</sup>では数基の木棺墓群が確認されている<sup>③</sup>。

その他、地域には中期に属する方形周溝墓が検出された向井山遺跡をはじめ、中期末から後期初頭の十数棟の竪穴住居が検出され、高地性集落とされる滑瀬遺跡、また滑瀬遺跡の北西約800mの林昌寺の裏山（経塚山）から扁平鈕式の袈裟襷紋銅鐸が出土している。ほかに中期後半から後期にかけての高地性集落である新家オドリ山遺跡などがある。総じて弥生時代の泉南地域は三軒屋遺跡を中心とした樫井川流域のグループと、男里遺跡を中心として男里川流域に展開するグループに大別される。三軒屋遺跡と男里遺跡はともに沖積段丘面上に広がる拠点的な性格の集落と考えられるが、各々の水系ごとに高地性集落や低位段丘面上の集落が認められることは非常に興味深いものがある。

古墳時代、この地域には前期古墳が認められず、古墳時代中期から後期にかけて樫井川支流、新家川の右岸にフキアゲ山古墳群が5世紀末葉に築造された後、新家古墳群、兎田古墳群などが5～6世紀代にかけて築造される。また近年の調査では三軒屋遺跡から5世紀後半の築造となる数基の埋没古墳が検出されており、注目を集める。しかし、ほとんどの古墳群が樫井川の周辺に立地しており、男里川の流域では高田山古墳群と玉田山古墳群を数えるのみで、樫井川の流域とは様相を異にする。しかしいずれの古墳群も小規模な群集墳でしかなく、地域の政治的基盤の弱さを物語っている。現在、岸和田市や泉南郡岬町には大規模な前方後円墳が認められるが、それらを築造しえた勢力の狭間で、当地には安定した勢力が育まれなかったのではなからうか。

また古墳時代の遺跡としては、男里川の河口付近の洪積段丘低位面に立地する天神ノ森遺跡があげられる。現在、天神ノ森遺跡はほとんどが神社境内に含まれているが、戦前に倒木の下より須恵器の大甕が発見されたことに端を発する。発見された須恵器は6世紀初頭から6世紀前半に比定されるが、同遺跡内では他に遺跡や遺物の検出が知られず、特異な様相を示す遺跡である。また天神ノ森遺跡は神武紀の「雄水門」と考えられている。

白鳳期になると、この地域には禅興寺と海会寺が建立される。禅興寺については不明な点が多いが、奈良期に数回の堂塔建立が考えられている。海会寺は樫井川の左岸、洪積段丘中位面に建てられた法隆寺式の伽藍を持つ寺院であり、伽藍の東側からは同時期の大規模に集落跡も検出されており、建立氏族の集落であると考えられている。

これらの古代寺院を比較した場合、比較的前代からの勢力が窺える地点に建立される禅興寺に対して、海会寺の場合は、前代の勢力の認められないところに突如として建立される。海会寺を建立した勢力の性格を示すものであろうか。

一方、男里遺跡では遺跡の中央付近から倉庫と考えられる奈良時代の掘立柱建物が検出されている。同様の掘立柱建物遺跡は湊遺跡でも検出されているが、その他の遺跡では断片的に遺物が検出されるのみにとどまっております、当地の奈良時代の様相は判然としません。またこの頃から地域で広大な範囲を占める洪積段丘中位面が耕作地として用いられ始めたことが付加される。

奈良時代から中世にかけて、この地域は河内国から分国されて和泉監が設置され、和泉国となる。市域には呼喚郷が置かれ駅家や牧の整備が進む。また平安時代以降、戦国時代まで当地は信達荘と称され、摂関家、近衛家、根来大伝法院などの支配を受ける。現在、男里遺跡の南部から幡代遺跡にかけては条里型の地割りが明瞭に残っており、今回の調査地点の付近でも、坪名が小字化している地点も認められる。これらの条里型地割りは古代から中世にかけて社会が大きな変革を遂げる過程で整備されたものと考えられるものである。また中世には、遺構や遺物が市域の非常に広範囲から認められるようになり、中世以降の開発規模の著しい拡大が窺える。支配体制の変化に伴い集落域や生産域の拡大が図られたのであろう。中世期に形成される集落域や耕作域は、近世以降もその範囲に大きな変化が認められず、現在の集落付近に中世集落の存在が考えられている。

また、大きな変革の続いた平安～中世期には多くの寺院が建立され、市域では瓦類が検出される遺跡が増加する。鎌倉新仏教に代表されるような庶民の信仰心の現れであろう。

以上、男里遺跡を中心に当地の歴史を綴ってきた。しかし、未だ不明瞭な部分は数多くあり、今後の調査研究が期待される。

- ① 1992年度 (財)大阪府埋蔵文化財協会による試掘調査。
- ② 1993年度 (財)大阪府埋蔵文化財協会による発掘調査。
- ③ 1983年度 大阪府教育委員会による発掘調査。

# 第3章 調査の成果

## 第1節 調査区の基本層序

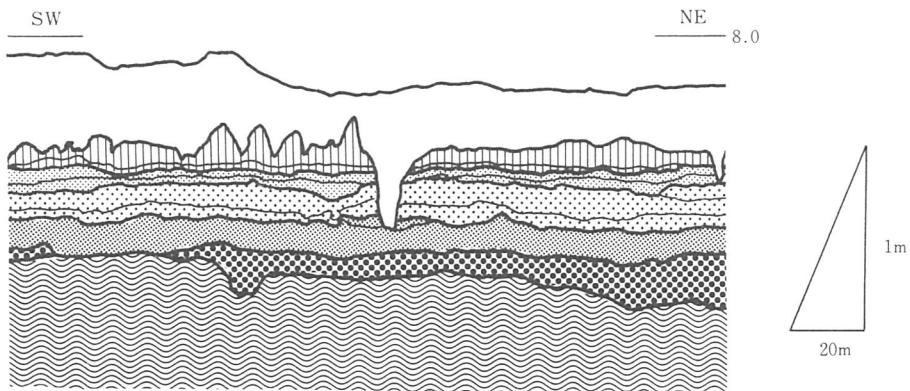
調査区は和泉山脈から広がった沖積段丘の下位にあたる氾濫原に位置しているが、この付近では山脈から海岸まで3.8kmほどの距離しかないため、北西方向に地形が下降している。こうした状況は僅か200mほどの長さの調査区内においても認められる。ただし、地区全体を通じてほぼ共通した層序を観察することができた。

盛土を除くと、6層に大別することができる。以下にそれを示すと、

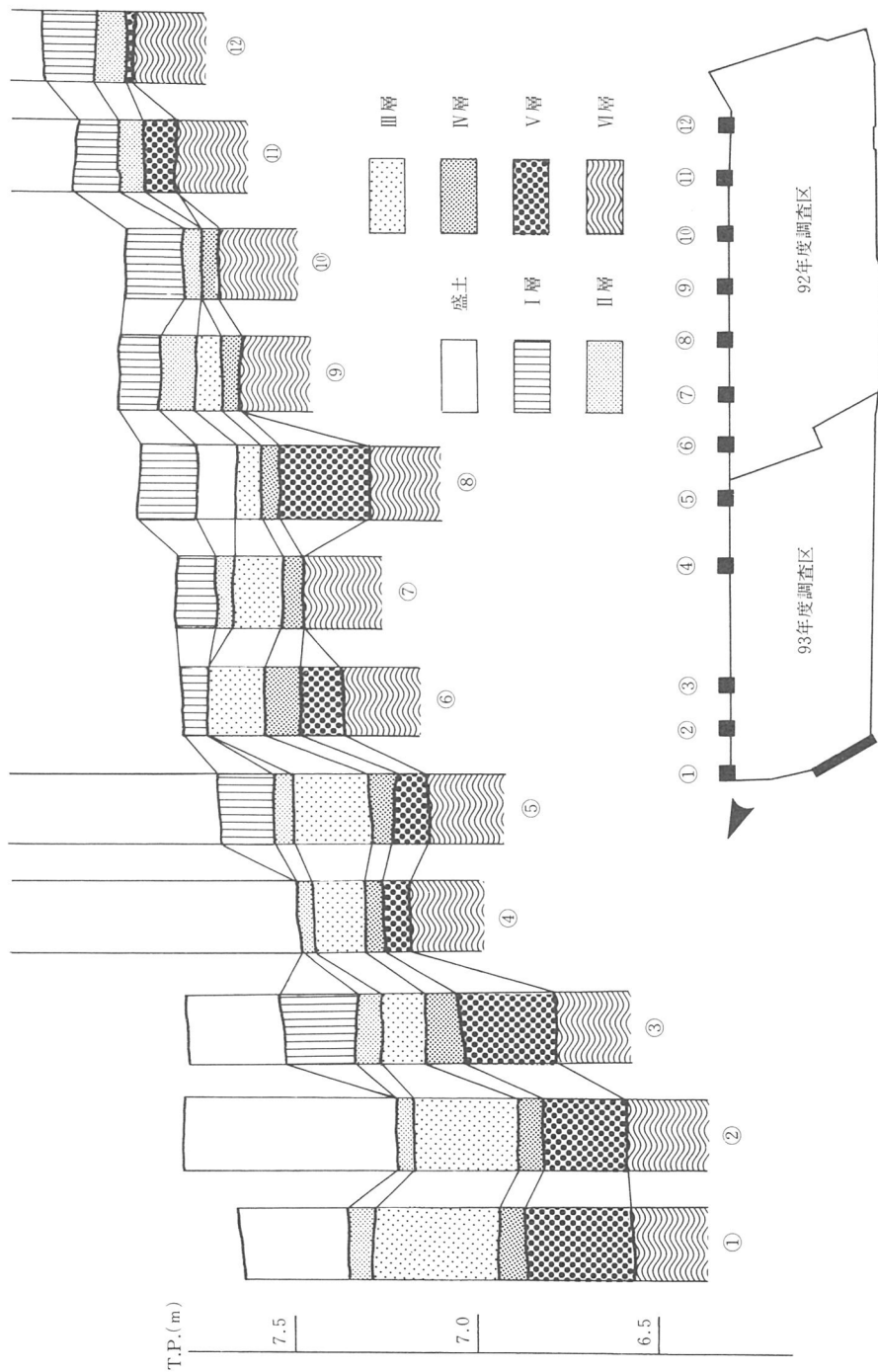
- I 灰色 (7.5Y5/1) 砂シルト, 旧耕作土
- II 黄橙色 (7.5YR7/8) 砂質土, 旧耕作土にともなう床土
- III 灰黄色 (2.5Y7/2) 砂シルト, 遺物包含層
- IV 黄褐色 (10YR5/6) 砂シルト, 遺物包含層
- V 黒褐色 (5YR3/1) 粘土
- VI 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土

となる。このうち第VI層は沖積層であるが、遺跡基盤層という意味から地山と呼ぶことができよう。またこの上面でみると調査区南東端⑫では標高7.9m、北西端①では6.6mを測り、1.3mの比高差が認められる。

こうした地形状況を反映し、北西側ほど堆積土は厚くことに第III、V層は顕著である。



第5図 調査区北西壁土層



第6図 基本層序

## 第2節 1992年度の調査成果

### ① 1992年度調査の概要

92年度の発掘調査は事業予定地のうち、府道堺阪南線への取り付け部から北西方向へ約110mまでを対象とした。調査対象面積は4,500㎡で、調査面積は約3,970㎡である。

調査前の状況は、調査区の南東端部が盛土の施された事務所建物及び工場跡地で、残りは田畑又は休耕地であった。現況での標高は、工場の跡地部分が9.7mで、残りの部分は概ね8m前後である。また調査の実施に際して、調査区を縦断している農業用水路の保持のため、全体を2つの調査区に分割しさらに6つの小調査区を設定した。なお、本書では全ての調査区を合せて報告をするものである。

調査で確認された遺構面は基本的に3面ある。

第1遺構面では近世から近代の耕作面が確認された。

第2遺構面では中世の耕作面が確認された。

第3遺構面では自然流路や非常に多くの土坑やピットなどが確認された。

以下にそれぞれの詳細を述べる。

### ② 第1遺構面の調査

基本土層のうち、第Ⅲ層及び第Ⅳ層の上面で確認された遺構面である。全体の標高は7.4m～8.5mを測り、南東から北西方向に緩やかに傾斜している。調査の結果、田畑の区画に伴う溝や段、非常に多くの耕作痕、耕作用の野池などが検出された。

01-0Z 調査区の北端部で検出された田畑の区画である。I16YVからI21CYまで南東方向に向かって直線的に伸び、CYではほぼ直角に屈曲し、北東方向へ調査区外に伸びる溝に囲まれている。北東方向10.4m、南東方向18.6m、幅60cm、深さ3～7cmを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形を呈する。埋土は1層で、灰黄褐色(10YR5/2)土である。遺物は出土しなかった。

溝の北側から多くの耕作痕が検出された。耕作痕は100条以上あり、いわゆる鋤溝と考えられる。区画溝と平行して、北西から南東方向に伸びている。長さ1m～7m、幅20cm～40cm、深さ2cm～10cmを測る。また調査区の北西端、01-0Zの中央ではやや規模の大きな溝が検出され、畝の痕跡である可能性が考えられる。共に埋土は1層で、灰黄褐色土

である。埋土から染め付けなどの遺物が出土した。

また01-OZは調査区外に広がる現況地割りと重複しており、南東方向に55m、北東方向に38mの区画が復元できる。

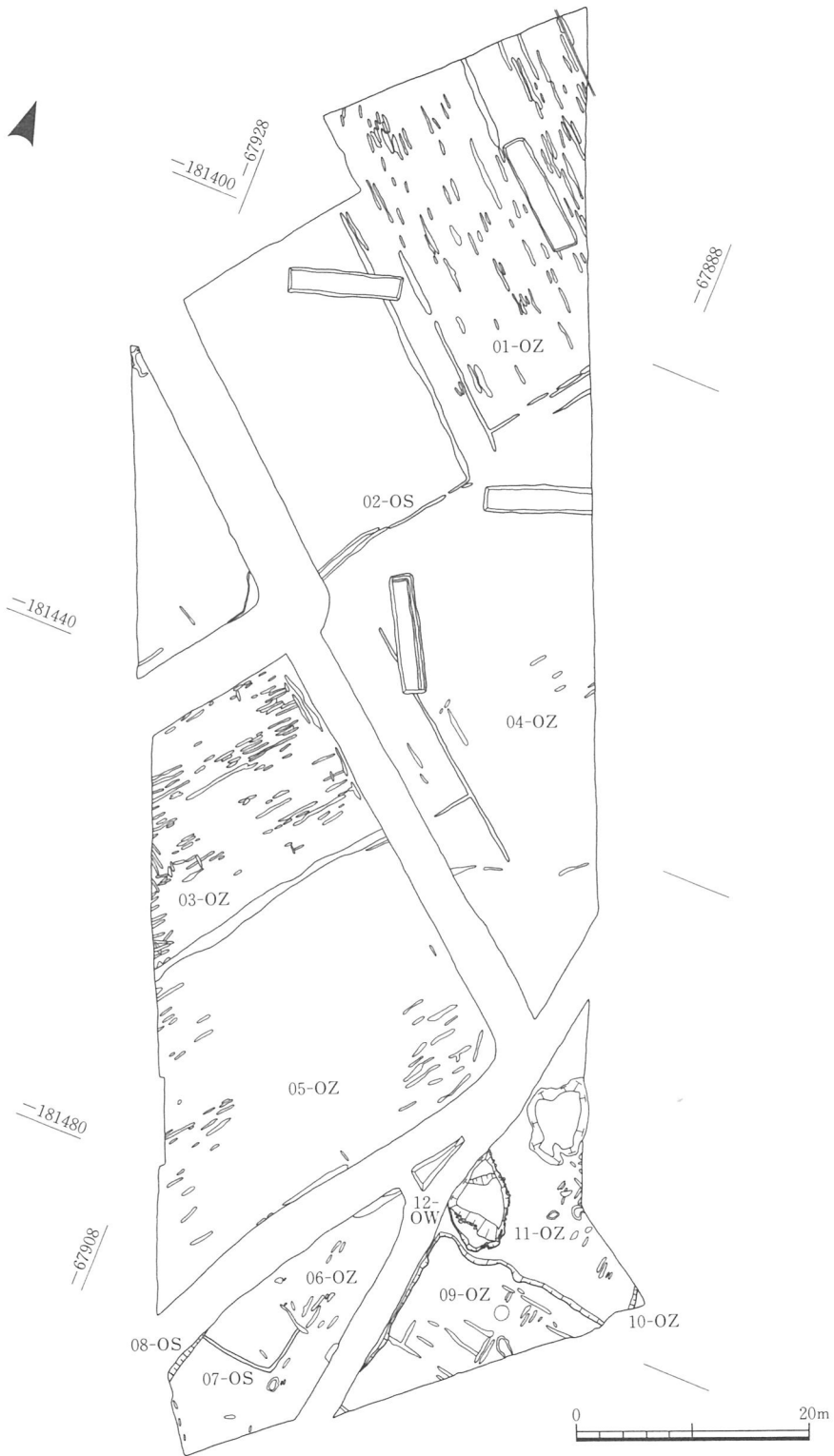
02-O S 01-OZの西隣で検出された溝である。I16YTからI21DYまで南東方向に向かって直線的に伸び、DYではほぼ直角に屈曲し、南東方向に進みGWで現況水路に切られる。北東方向8m、南東方向25.5m、幅20cm～70cm、深さ5cm～9cmを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形を呈する。埋土は1層で、灰黄褐色土である。遺物は出土しなかった。またFXからGWまでは5cm～10cm大の河原石が2列に並んで検出された。上部が削平されているが、暗渠と考えられる。02-O Sの西側からは耕作痕は検出されなかったが、現況の地割りと重複しており、暗渠も伴うことから01-OZと同様、田畑の区画溝である可能性が考えられる。

また、02-OZと01-OZの区画溝の間の2m程の間隔からは耕作痕がほとんど検出されず、この間を畦として用いていた可能性も考えられる。

03-OZ 02-O Sの南西側で検出された田畑の区画である。I21HYからI22LDまで南東方向に直線的に伸びる溝と、その途中のI22KCからはほぼ直角に屈曲し、現況水路をはさんで南西方向に伸びる溝によって囲まれている。南東に伸びる溝は検出長22.8m、幅20cm～30cm、深さ1.5cm～9cmを測る。また南西に伸びる溝は検出長27.8m、幅20cm～80cm、深さ4cm～6cmを測る。断面形状は南東に伸びる溝が口の開いたU字形で南西方向の溝は口の開いた浅いU字形を呈する。埋土はそれぞれ1層であり、灰黄褐色土である。遺物は出土しなかった。

溝の北西側から多くの耕作痕が検出された。全部で150条以上あり、長さ0.5m～6.5m、幅10cm～25cm、深さ1.5cm～5cmを測る。埋土は1層で、灰黄褐色土である。埋土から染め付けや蛸壺などの細片が出土した。耕作痕はほとんどが北東から南西方向へ伸びており、区画の溝と平行する。しかし現況水路をはさんだ両側には北西から南東方向へ、現況水路と平行するものもある。また南西部で検出された調査区外へと伸びる耕作痕にも北西から南東方向へと伸びるものが認められる。

04-OZ 03-OZの北東側に隣接した地点で、数条の耕作痕が検出された。耕作痕は長さ0.4m～3.8m、幅20cm～40cm、深さ3cm～5cmを測る。埋土は1層で、灰黄褐色土である。遺物は出土しなかった。ほとんどが北東から南西方向に伸びており、一部は調査区外へと伸びる。中には03-OZの区画溝と平行し、北西から南東に伸びるものもある。



第7図 1992年度調査区 第1遺構面全体図



また03-OZのうち、現況水路から東側の部分と04-OZについては現況の地割りにその痕跡が認めらる。

05-OZ 03-OZに南接して検出された耕作痕である。条数は80条を数える。長さ6m～7m、0.5m～2.5m、幅10cm～40cm、深さ1cm～6cmを測る。埋土は1層で、灰黄褐色土である。遺物は出土しなかった。ほとんどの耕作痕が北東から南西方向に伸びるが、数条の溝は現況の水路に沿って伸びている。

05-OZでは耕作痕の検出される範囲が東西に分かれていることから、それぞれ異なった耕作の単位に属するものとも考えられる。

06-OZ 調査区の南端部、現況の水路に囲まれた地点で検出された耕作痕である。条数は20数条ある。長さ0.5m～3.5m、幅10cm～40cm、深さ1cm～5cmを測る。埋土は1層で、明黄褐色(2.5Y6/8)粘土である。遺物は出土しなかった。溝のほとんどは北北東から南南西方向に伸び後述する09-OZの段の方向と平行するが、西北西から東南東方向に伸びるものもあり、07-OZによって区画されている可能性も考えられる。

07-OZ 06-OZに南接した地点で検出された溝である。I22WDからXDまで、南南西方向に直線的に伸び、XDではほぼ直角に屈曲した後、わずかに弧を描いて西北西方向に伸びる。WDの端部を06-OZの鋤溝に切られ、XBから先は現況の水路につながる。検出長10.9m、幅25cm～30cm、深さ2.5cm～4.5cmを測る埋土は1層で、明黄褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

07-OZは06-OZと同様、09-OZの段の方向と対面的に一致する。また溝の両端にレベル差は認められないが、現況の水路(08-OZ)につながることから田畑の取水や排水用の溝である可能性も考えられる。

08-OZ 07-OZの西端に隣接して検出された溝である。調査区の南端、I22XBからYBにかけて検出された。ほぼ南北方向に伸びており、検出長4.7m、検出幅70cm～80cm、深さ32cm～36cmを測る。埋土は1層で、緑色(7.5GY5/1)砂である。遺物は出土しなかった。

08-OZは現況水路と平行しており、溝のほとんどを現況水路が切っている。現況水路の前身と考えられる。

09-OZ 調査区の南東端部で検出された田畑の段である。11-OZにあたる部分を削平して形成されている。I22TFに頂点を持ち、やや蛇行しながら東方向にTJを通して調査区外へ、また南南西方向にはWEを通して調査区外へと拡がる。検出面での標高は8.2

m～8.5mを測り、北西方向に向かって緩やかに傾斜している。11-OZとの高低差は65cm～40cmである。現況の地割りと重複しており、南北に24m、東西に40mの区画が復元できる。

09-OZの上面で耕作痕が検出された。条数は30条あり、長さ1m～3.5m、幅20cm～30cm、深さ1cm～3cmを測る。埋土は1層で、にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土である。遺物は出土しなかった。溝の方向は2種類あり、それぞれ09-OZの段の方向と平行している。

10-OZ 調査区の南東端部で検出された田畑の段である。09-OZ、11-OZと隣接している。11-OZにあたる部分を削平して形成されている。I22SJからSKにかけて出土された。検出された範囲は僅かであり、現況の地割りにも痕跡が認められないが、一辺がほぼ南北を向いた方形の区画が考えられる。検出面での標高は7.9mを測る。11-OZとの高低差は約20cmある。検出された範囲が僅かであるため、上面では耕作痕などは検出されなかった。

11-OZ 調査区の南東部で検出された田畑の段である。基本土層のうち第Ⅲ、第Ⅳ層と第Ⅴ層の一部が削平されている。検出面での標高は7.7m～7.8m測る。南端は北に56m、東西に18mを測る長方形の区画が復元できる。

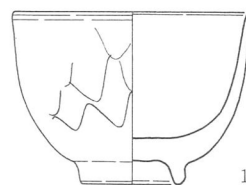
区画の全域が工場地に供されており攪乱が多く認められたが、検出面で耕作痕が数条検出された。長さ0.7m～1.7m、幅10cm～30cm、深さ4cmを測る。埋土は1層で、灰白色(2.5Y7/1)土である。遺物は出土しなかった。また、耕作痕ほとんどがほぼ南北に伸びているが、西北西から東南東方向に向かって伸びるものもある。

12-OW 調査区の南東部で検出された耕作用の野池である。I22QFからSGにかけて検出された。西端部を現況の水路で切られており、平面形状は長辺が北西を向いた半楕円形をなす。長辺6m、短辺3mで、肩部高7.60m～7.80m、底部高5.70m～5.80mを測る。ほとんどが素掘りの状態であるが、肩部には径10cm～15cmの自然石を用いた石組が1段ないし2段にわたって設けられており、内側には自然木を土留めに用いている箇所もあった。埋土は基本的に1層で、緑灰色(5G5/1)粘土であり、部分的に緑灰色(7.5GY6/1)礫混入砂が存在する。緑灰色粘土から近世の陶磁器片が出土した。

(1)は12-OWから出土したもので、肥前系磁器の中碗である。

出土したのは口縁部から高台までの破片であり、口径は9.55cm、器高は6.95cmを測る。色調は内外面共に透明釉が施され明オリーブ灰色(2.5GY/71)を呈する。また外面には

一重網目紋が施される。焼成は良好で、堅く焼き締まる。胎土は緻密であり、断面は灰白色である。18世紀代の所産となる製品である。



### ③ 第2遺構面の調査

基本土層のうち、第Ⅴ層の上面で確認された遺構面である。全体の標高は、南端部で8.4mを測り、北側に向けて7.8m～7.3mと緩やかに傾斜している。調査の結果、田畑の区画に伴う溝や多くの耕作痕、落ち込みなどが検出された。



第8図 12-OW出土遺物

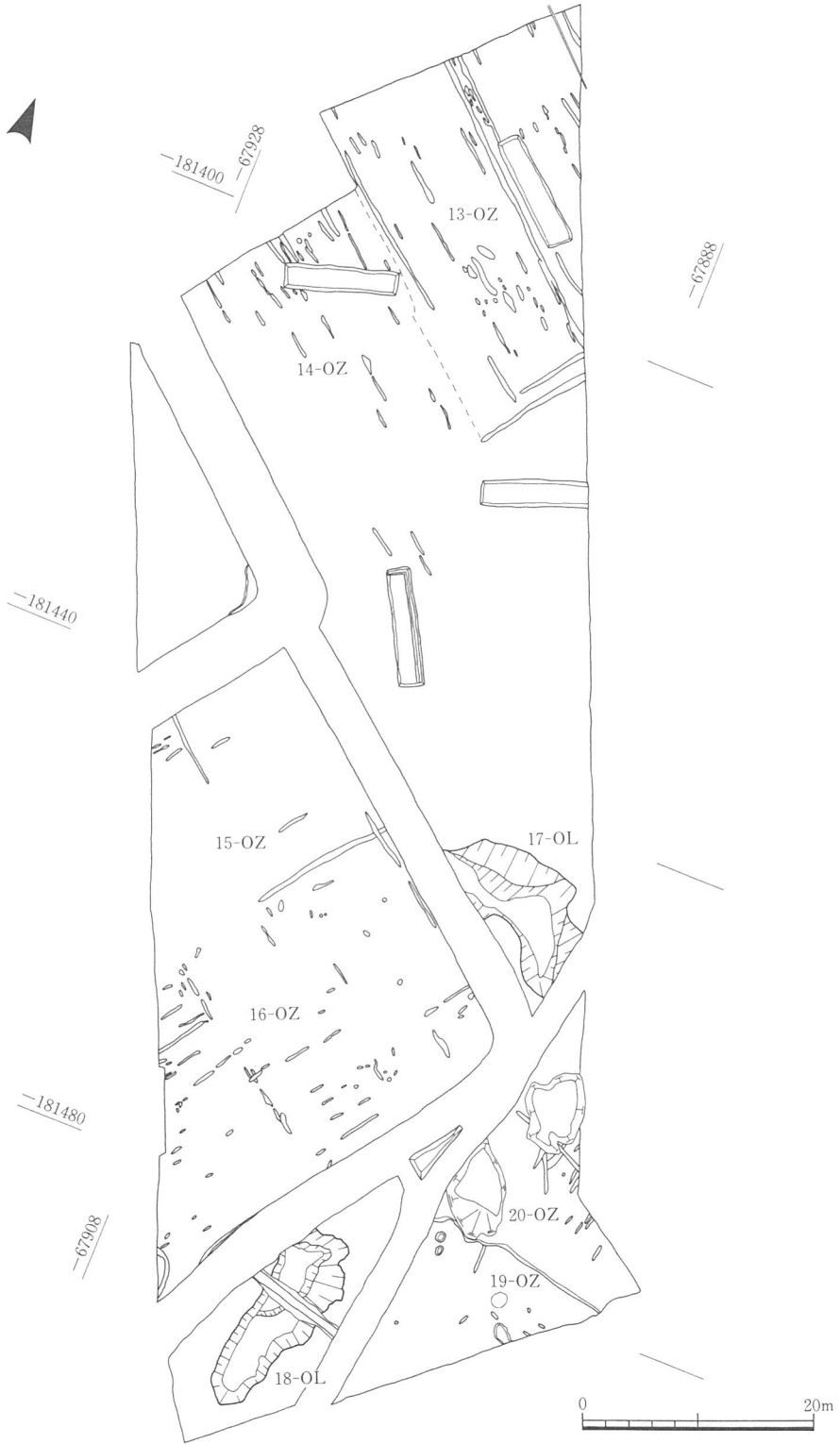
13-OZ 調査区の北端部で検出された田畑の区画である。I 21CYから直線的に北東方向に伸び調査区外へと続く溝と、溝から北西方向へ向かって第Ⅴ層が削りとられている範囲とで区画される。溝は検出長10.6m、幅25cm～50cm、深さ4cm～15cmを測る。断面形状は浅いU字形を呈す。埋土は1層で、黄褐色(10YR5/6)土である。遺物は出土しなかった。溝の北側は第Ⅴ層がほとんど削られており、地山面が露出している。検出面での標高は、7.3m～7.5mである。13-OZの範囲は調査区外へと広がるが、北東方向へ10m以上、北西方向へ30m以上の長方形の区画をなすものと思われる。

溝の北西側からは多くの耕作痕が検出された。溝は約60条あり、北西から南東方向へと伸びる。長さ1m～4m、幅20cm～50cm、深さ3cm～9cmを測る。埋土は1層で、黄褐色土である。埋土から瓦器、羽釜、蛸壺、土錘などが出土した。しかし、何れも細片であり、図化することは出来なかった。

また13-OZからは出土長が27mにおよぶ溝をはじめとして、他の耕作痕と比べて非常に長い溝が数条検出された。OZの中央ではこれらの溝が2条平行して伸びており、田畑を細分する溝である可能性も考えられる。13-OZの南端を区切る溝にも1m程の間隔で平行する溝があり、これらの溝と溝の間が畦として用いられた可能性がある。

13-OZは第1遺構面の01-OZと重複しており、01-OZの前身であると考えられる。

14-OZ 調査区の北西部で13-OZの西側に隣接して検出された耕作痕である。条数は30数条あり、北西から南東方向へと伸びる。長さ1.2m～4.0m、幅20cm～60cm、深さ2cm～13cmを測る。埋土は1層で、黄褐色土である。埋土から瓦器細片が僅かに出土したが、摩滅が激しく図化には耐えられなかった。



第9図 1992年度調査区 第2遺構面全体図

また13-OZが第Vを削って形成されていたのに対して、14-OZは第V層を切り込んで形成されている。これはベース層である黒褐色粘土層の堆積が不安定で、耕作に適さない高低差が生じていたためと考えられる。

14-OZはその位置より、第1遺構面の02-OZの範囲の前身を示すものと考えられる。

15-OZ 調査区の西部で16-OZに隣接した地点で検出された耕作痕である。条数は7条あり、1条を除いて北東から南西方向へと伸びる。長さ0.5m～3.2m、幅10cm～50cm、深さ2cm～6cmを測る。また、残りの1条は北西から南東方向へ伸びており、検出長6.7m、幅10cm～20cm、深さ4cm～7cmを測る。共に埋土は1層で、黄褐色土である。遺物は出土しなかった。

15-OZは第1遺構面の03-OZとほぼ重複しており、03-OZの前身であると考えられる。

16-OZ 15-OZの南接した地点で検出された田畑の区画である。北東から南西方向に伸びる溝によって、15-OZと区切られる。溝は長さ13.1m、幅50cm～60cm、深さ8cmを測る。断面形状は浅いU字形を呈す。埋土は1層で、灰黄褐色(10YR4/2)粘土である。埋土から瓦器片が出土したが、細片のため図化できなかった。

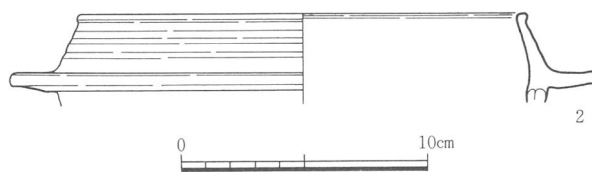
溝の南西側から多くの耕作痕が検出された。条数は80条以上あり、そのほとんどが北東から南西方向へと伸びている。長さ5.5m～0.5m、幅10cm～30cm、深さ3cm～6cmを測る。また北西から南東方向に伸びる溝も検出された。長さ1.0m～7.0m、幅15cm～40cm、深さ1cm～6cmを測る。共に埋土は1層で、黄褐色土である。遺物は出土しなかった。

15-OZ、16-OZで共に検出された北西方向に伸びる溝は、他の耕作痕と比べてやや長いことから異なる性格が考えられる。また、北西方向に伸びる溝は16-OZの北縁を区切る溝を切っている。以上のことから北西方向に伸びる溝は、小規模の区画を形成する区画溝である可能性が考えられる。

17-OL 調査区の東部で検出された落ち込みである。I22KDからNFにかけて検出された。東西の西端を現況水路によって切られており、平面形状は南東から西方向に向けて湾曲した歪な多角形を呈し、南北7m、東西10.3m、深さ1.7mを測る。断面形状は、口の開いた歪なU字形で、底部では直径9.5m、短径1.8mを測る。埋土は基本的に4層で、上から黄灰色(2.5Y4/1)土、にぶい黄色(2.5Y6/3)砂、暗灰色(N3/0)粘土、にぶい黄色(2.5Y6/4)礫混入砂である。このうち暗灰色粘土から羽釜片が出土した。

(2)は17-OLから出土したもので、瓦質の羽釜片である。口縁部から鏝部にかけて

の破片であり、胴部は欠損している。口径18.2cmを測る。口縁部はやや内弯しながら立ち上がり、端部を平坦に仕上げている。口縁外部には明瞭



第10図 17-O L出土遺物

な段が巡り、内部にはわずかにハケ目が施される。やや長い鏝を持ち、鏝部の端部を平坦に仕上げる。胴部はヘラケズリを施す。外面は灰色（N5/0）で内面は黒褐色（10YR3/1）を呈する。15世紀前半の所産となる製品である。

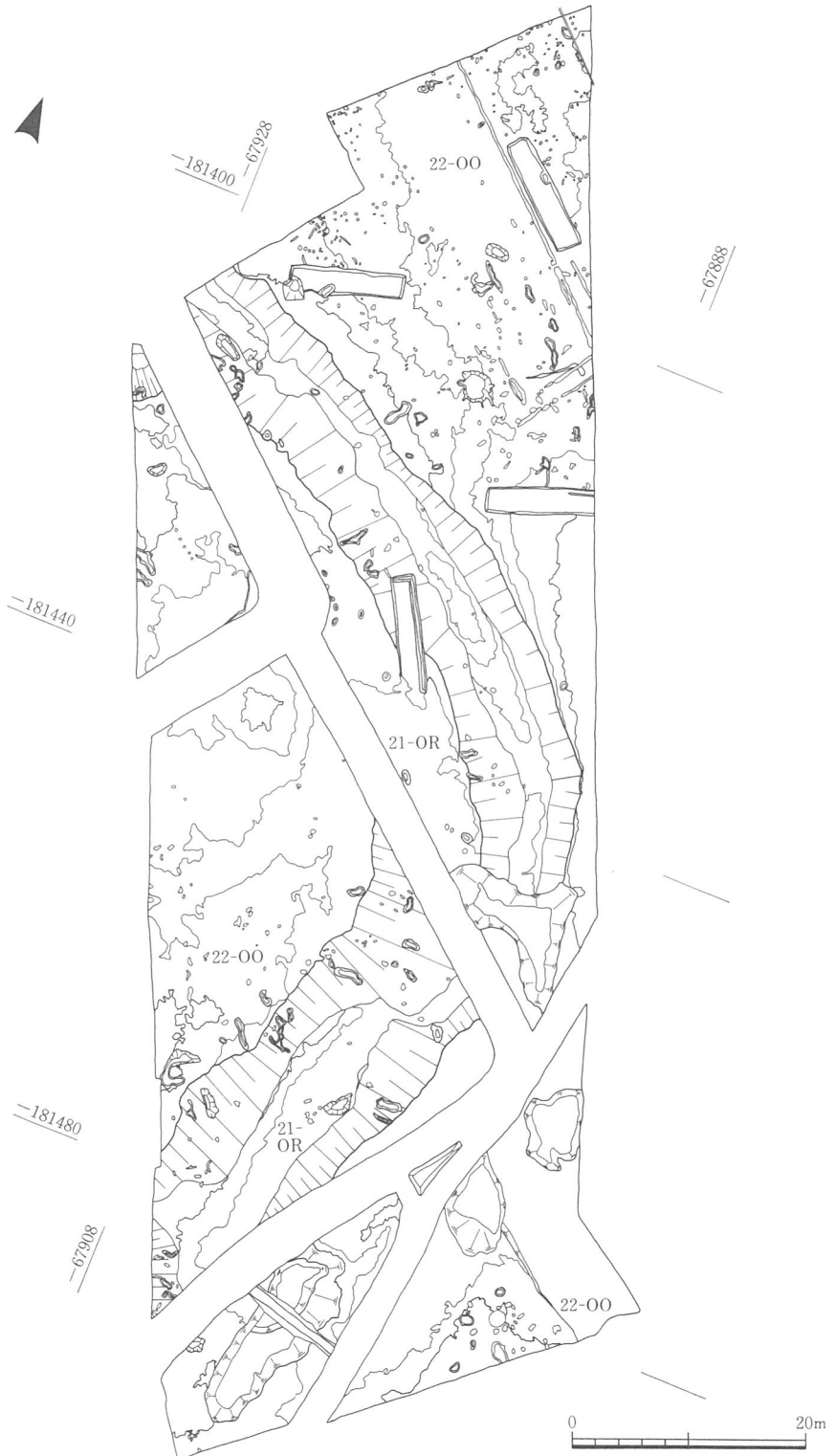
18-O L 調査区の南端部で検出された落ち込みである。I 22UCからYDにかけて検出された。北西部を現況水路に切られており、平面形状は長辺がほぼ南北に沿った歪な楕円形を呈する。直径19m、短径6.9m、深さ1.3mを測る。断面形状は口の開いた浅いU字形であり、底部では直径15.2m、短径3.7mを測る。埋土は基本的には6層で、上から明褐色（7.5YR7/1）礫混入土、にぶい橙色（7.5YR6/4）礫混入土、褐灰色（7.5YR5/1）粘土、黒褐色（5 YR3/1）礫混入粘土、褐灰色（7.5YR4/1）粘土混入礫、灰褐色（7.5YR5/2）砂混入礫である。遺物は出土しなかった。

17-O Lと18-O Lは、共に耕作に伴う溜め池の様なものと考えられるが、共に現況の水路に接しており、特に17-O Lは現況水路のコーナー部分に沿うように湾曲しており、現況水路の前身となる水路の一部である可能性も考えられる。

19-O Z 調査区の南端部で検出された耕作痕である。第1遺構面の09-O Zの下層にあたる。全部で6条の溝が検出された。長さ2.7m～0.5m、幅30cm～20cm、深さ3cm～5cmを測る。埋土は1層で、褐灰色（10YR4/1）土である。遺物は出土しなかった。

19-O Zは全体に指向性が弱く、また各々の溝の規模も小さく分布の密度も低い。以上のことから、19-O Zが耕作痕であると断言することは難しいが、09-O Zの北縁部にあたる地点では、南北に伸びる耕作痕の北端が段によって切られていることから、09-O Zの形成される以前に南北方向に向いて耕作の行なわれていた可能性を示唆するものもある。これは北接する20-O Zにおいて、南北方向に伸びる耕作痕が検出されたことから裏付けられる。

20-O Z 調査区の南東端部で検出された耕作痕である。第1遺構面の11-O Zの下層にあたる。条数は4条あり、全て南北方向に伸びる。長さ0.9m～1.3m、幅20cm、深さ2cmを測る。埋土は1層で、明黄褐色（10YR6/6）シルトである。遺物は出土しなかった。



第11図 1992年度調査区 第3遺構面全体図

また耕作痕に隣接する地点から数条の溝が検出された。全ての溝は攪乱により削られているが、長さ2.6m～3.5m、幅30cm～70cm、深さ1.5cm～9.5cmを測る。埋土は1層で、明黄褐色シルトである。遺物は出土しなかった。溝には明確な指向性が窺えず、用途は不明である。少し規模の大きな耕作痕であるとも考えられる。

上記の溝と近接して南東から北西方向に伸びる溝が検出された。溝の西端部と途中は攪乱によって削られているが、全体5cm～10cm大の河原石を用いた暗渠となっている。検出長7.7m、幅40cm、深さ10.5cm～20.5cmを測る。埋土は1層で、灰黄褐色（10YR6/2）シルトである。遺物は出土しなかった。暗渠であることや埋土の様相から、他の溝とは一線を描いており、取水又は排水に用いた溝と考えられる。

#### ④ 第3遺構面の調査

基本土層のうち、地山面で確認された遺構面である。全体の標高は7m～8.1mを測り、南東から北西方向に向けて緩やかに傾斜している。調査の結果、南から北西に向けて流れる自然流路や非常に多くの土坑やピットが検出された。

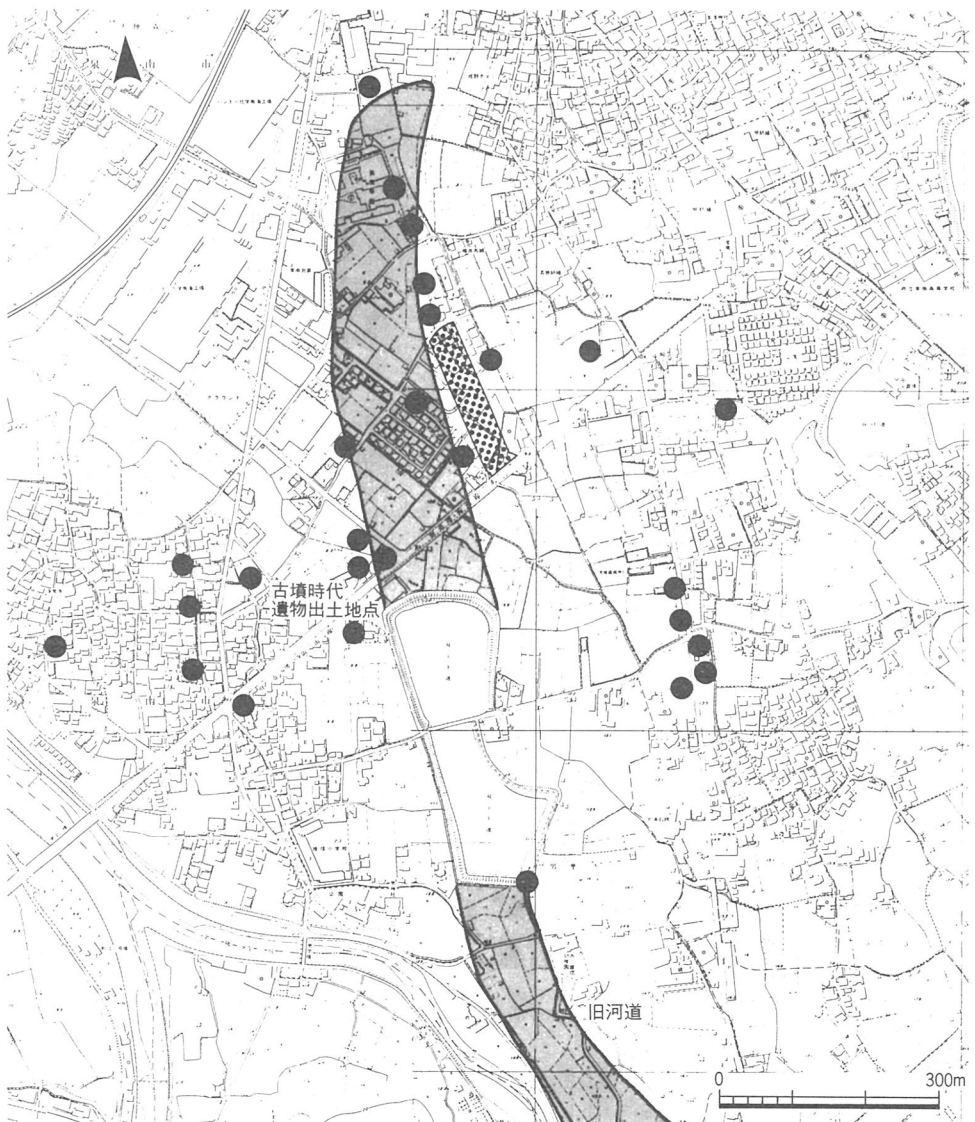
21-O R 調査区の北西端部から南西の端部にかけて検出された自然流路である。I 22 WAから現況水路を挿んでHBまで北東方向へ進み、HB付近で緩やかに湾曲して北西方向に伸びI 21DQを通して調査区外へと進む。平面形状は逆L字状を呈する。I 22KDからNFまでを17-O Lによって切られている。検出長101.5m、幅9.5m～14.5m、深さ30cm～80cmを測る。底部の高さは6.49m～7mで、全体に南から北西方向へ向かって低くなる。埋土は1層で、黒褐色（5 YR3/1）粘土である。遺物は出土しなかった。埋土の状況が一樣であることから、埋没が短期間の間に行なわれた可能性が考えられ、同じく埋土の様子から、流路が冠水状況にあった可能性は低いものと考えられる。

21-O Rの埋土であり、第2遺構面のベース層となる黒褐色粘土層は男里遺跡における既往の調査においても各所で確認されており、近隣一帯に拡がることがわかっている。

現在のところ旧河道の兩岸、特に双子池から北側やや東寄りに集中して認められ、黒褐色粘土層の堆積は旧男里川に起因するものであると考えられる。また黒褐色粘土層の堆積時期は遺物が出土しないため不明瞭であったが、今回の調査地点から200m南西の地点で行なわれた最近の調査（泉南市教委1993）では、黒褐色粘土層から古墳時代後期に属する須恵器や土師器が出土し、その直下層から庄内期や弥生時代中期の遺物が出土している。



22-00 調査区のほぼ全域で検出された不定形の土坑群である。総数は400ヵ所を超え、中でも21-ORの兩岸に多く認められ、特に流路の右岸にあたる調査区の北端部に集中している。直径0.5m~2.5mを測るものと、直径20cm~40cmを測るピット状のものがある。流路の肩部から斜面にかけて一定以上の規模を持つ大きな土坑が多く認められ、流路の周囲には小規模のものが多い。深さはほとんどのものが10cm前後で、深いもので35cm程



第12図 黒褐色粘土層分布図

度である。何れも埋土は1層で、黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。人為的に形成されたものとは考えにくく、植物の根の痕跡や風倒木などと考えられる。

#### ⑤ 出土遺物

92年度の発掘調査では、コンテナにして7箱分の遺物が出土した。出土遺物はほとんどが著しく摩滅しており、図化可能なものが非常に少なかった。

第13図に図示したのは、包含層の中でも最も出土量の多い第Ⅲ層および第Ⅳ層から出土した遺物である。

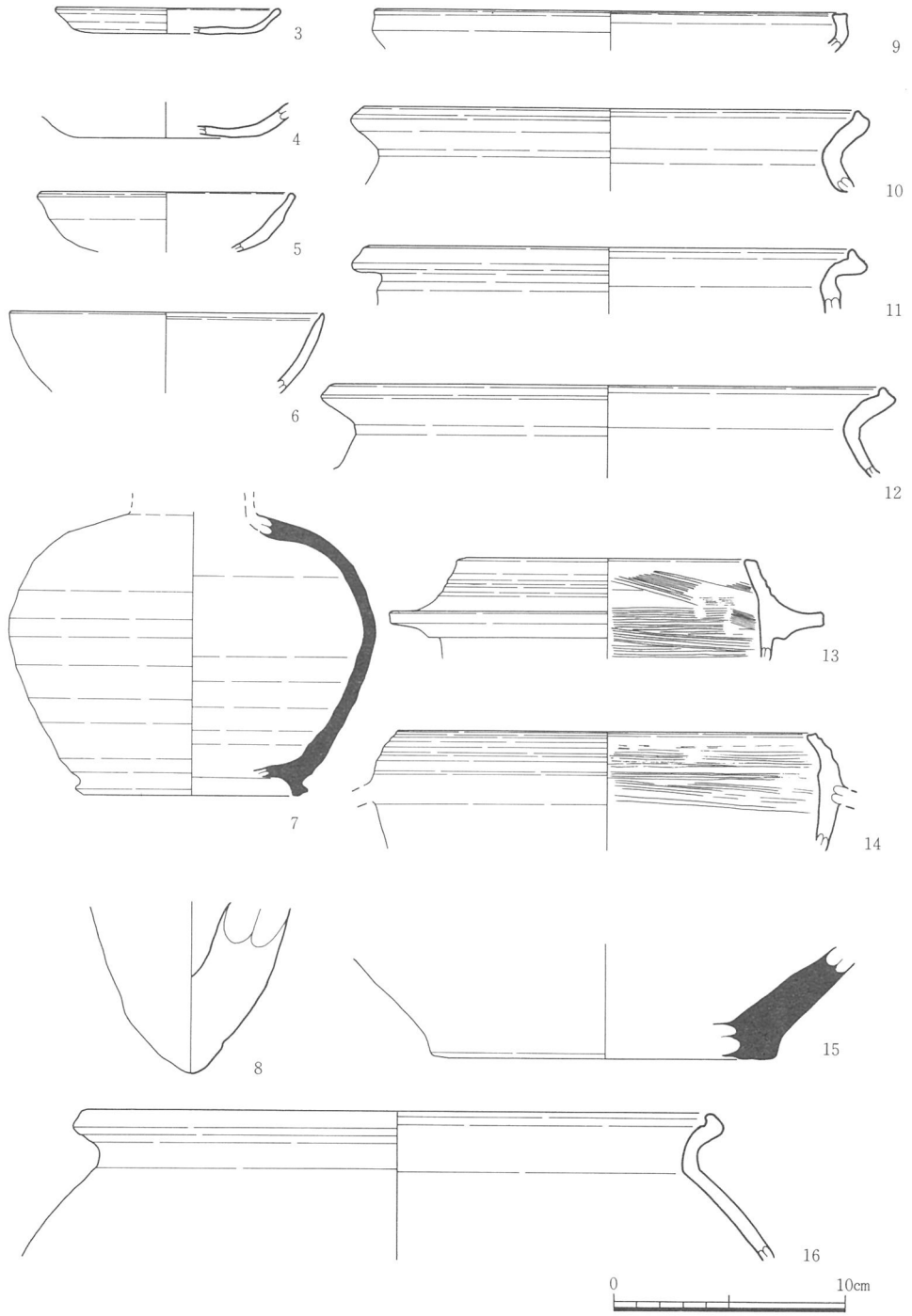
遺物はそれぞれ、(3)～(5)土師質の小皿、(6)黒色土器B類の杯、(7)須恵器小型壺、(8)土師質の真蛸壺、(9)～(12)・(16)土師質の土釜、(13)～(14)瓦質又は土師質の羽釜、(15)常滑焼の鉢である。

(3)～(5)は口径9.8cm～10.9cmを測る小皿で、和歌山県根来寺においてよく知られるいわゆる「根来の白土器」と呼ばれるものと同系統のものである。白色の精緻な胎土を持ち、全体に丁寧なナデが施されている。(3)は平坦な底部を持ち、底部から口縁部まで直線的に立ち上がる。根来寺において通有に見られるタイプである。(5)は体部が緩やかに丸みを帯びて立ち上がり、口縁部をわずかに内側に曲げる。

(9)～(11)は口径20.5cm～21.5cmを測り、(12)は23.9cmを測る。(16)は27.6cmを測る。(10)～(12)・(16)は「く」の字形に大きく外反する口縁部を持ち、胎土に白色砂粒を多量に含む。紀伊地方に多くの類例が見られる器形である。

(13)は瓦質の小型品で口径12.2cmを測る。口縁部はやや内湾しながら立ち上がり、端部を平坦に仕上げる。外面に明瞭な段を持ち、内面にはハケ目が残る。(14)は土師質の製品で口径18.2cmを測る。やや強く内湾する口縁部を持ち、端部を平坦に仕上げている。口縁部外面には明瞭な段を持つ。内面はハケ目で、鏝部以下はヘラケズリを施す。

出土遺物から包含層の形成された時期は、概ね14世紀～15世紀前半であると考えられる。また出土遺物には図示した「根来の白土器」や土釜などのように紀伊からの搬入品と思われるものが多く、彼地との密接な関係を思わせる。



第13图 包含層出土遺物

### 第3節 1993年度の調査成果

#### ① 調査区の概要

1993年度は、農業用水路などを除いて約3,700m<sup>2</sup>を調査した。発見された主要な遺構は掘立柱建物跡2、遺物廃棄遺構1、井戸3、溝状遺構15があり、加えて小溝状を呈する耕作痕や小穴などが多数認められた。これらの遺構はすべて第Ⅴ層上面で検出されたものである。

出土遺物は38,793gで、そのうち02-OX出土の遺物が22,974gと60%近くを占め、ついで第Ⅲ・Ⅳ層中より出土したものが14,667gある。

また遺構の痕跡は認められなかったが、周囲の状況から建物の存在が予想される場所が1ヵ所、調査区中央やや北寄りでも認められた。

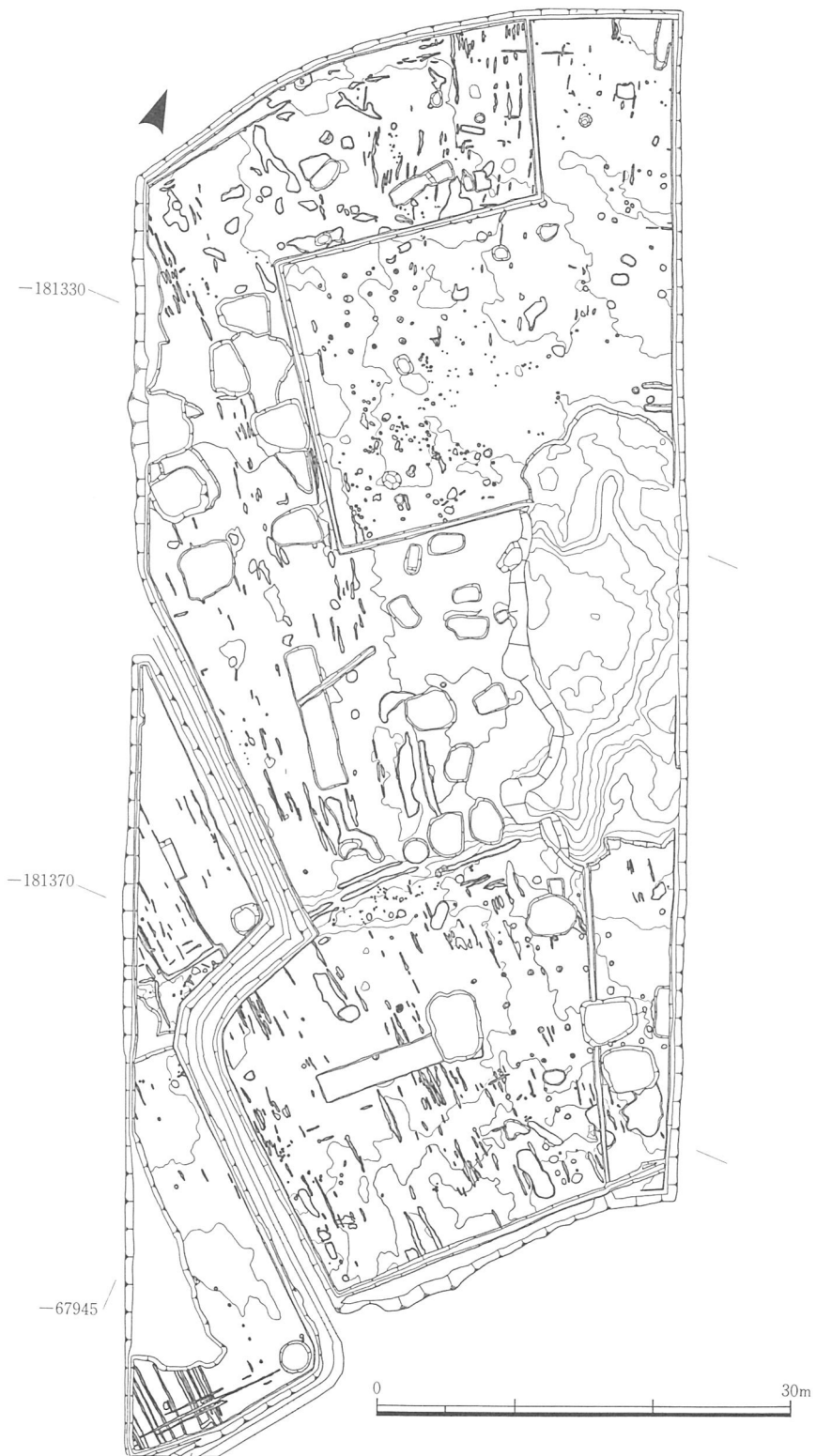
なお、調査区を斜交する東西方向で数ヵ所にわたって攪乱を受けており、そのため調査前に既に壊された小規模な遺構もあったと思われる。

また、調査区の東側と南隅で谷状の落ち込みがみられた。これらは溜池の一部かも知れないが、その実態は不明である。ただ両者とも、礫混じり砂質土の覆土から出土した少量の遺物の中に磁器も含まれていることから、埋没したのは近世以降であったと考えられる。こうした落ち込みは1992年度の調査においても発見されている。

調査区中央東側、すなわち上述の谷状落ち込みのうちの東側のものの南西側では、第Ⅴ層である黒褐色粘土は検出されず、第Ⅳ層下は直接地山である第Ⅵ層の上面となっていた。第Ⅲ・Ⅳ層の堆積状況が周辺と大差ないことからすると、この範囲においては第Ⅲ・Ⅳ層が堆積している期間に第Ⅴ層が削平されたものと考えられる。また、その範囲においてのみ遺構の存在がまったく確認されなかった。

しかしそうした一部の範囲を除くと、耕作痕や小穴は調査区全体に分布しており、また溝状遺構も南側に過半数があるとはいえ北側でも認められ、掘立柱建物も南北両側に各1棟ずつある。このように南側に主要な遺構がやや多いとはいえ、調査区全体に遺構は広がっており、調査区の中で遺構分布においてとくに異なった様相を示す部分は見当たらないといえる。

ただし、これらの遺構がすべて同時に存在したものでないことは後述する通りある。調査区の時代的な土地利用の変遷については第4章第2節で述べる。したがって本節ではひとまず調査区全体をひとつの範囲として扱い、調査成果について述べていく。



第14図 1993年度調査区 全体図

② 主要遺構について

調査区南東側では02-OXや04-OBなどの主要な遺構の存在が目立つ。

02-OX

02-OXは調査区の東南側に位置する北西-南東に長軸をもった遺構である。遺物を廃棄するために掘削されたものと考えられ、芥溜などと同じく使用目的が限定されており、通常の土坑とは異なることから「OX」と冠しておく。長軸5.0m、短軸3.7m、深さは確認面より約0.6m。平面形は不整な隅丸長方形を呈し、南東隅にはテラス状

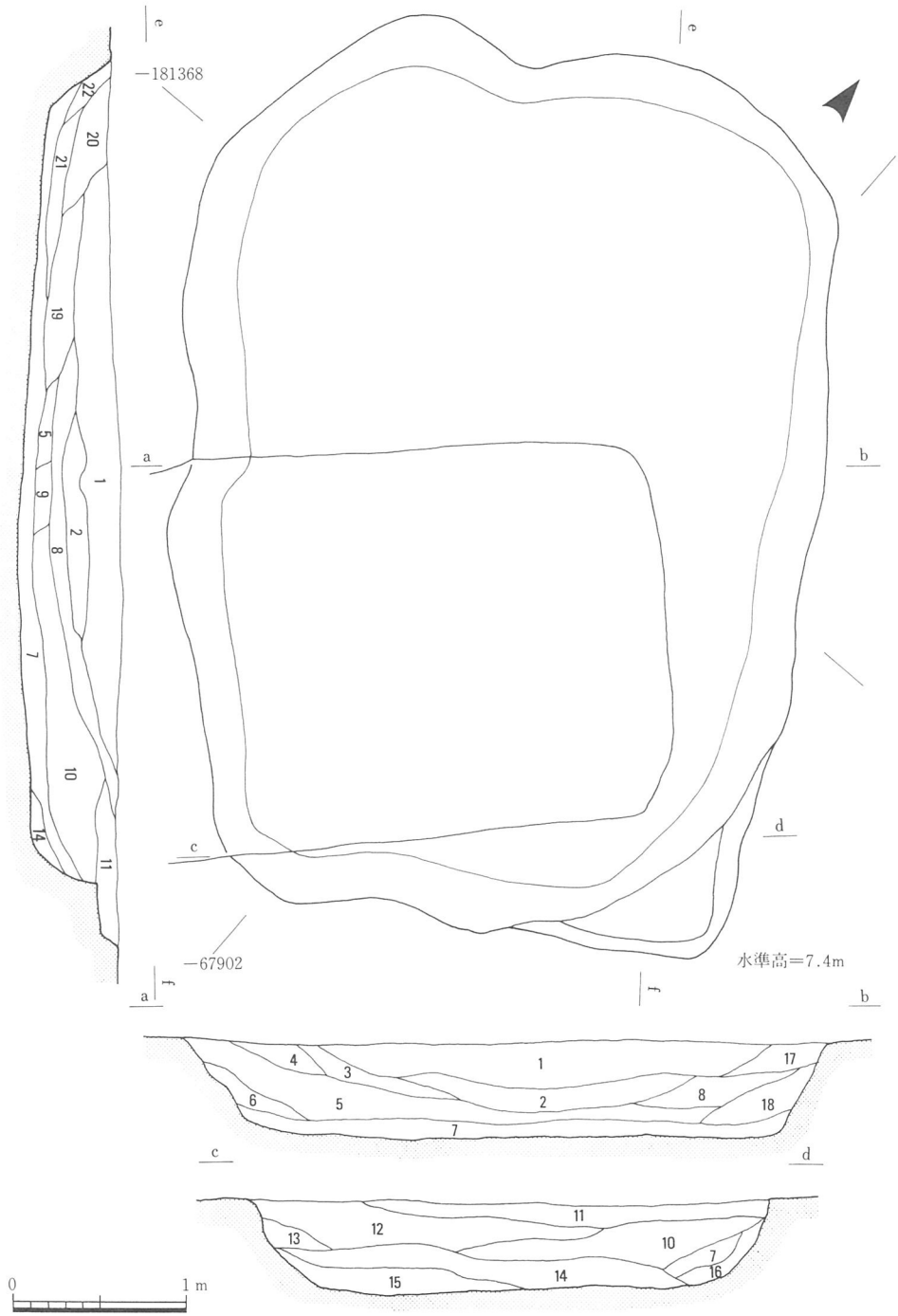


第15図 調査区南東側の主な遺構

の平坦部を有する。北西辺がやや不定であるのを除くと、残りの3辺は直線的である。底面はほぼ平坦である。壁の立上がりは内湾する部分と外反する部分とがあり、一定していない。壁と底面との境は丸味がある。

02-OX

- |                                     |                                       |
|-------------------------------------|---------------------------------------|
| 1 暗褐色 (10YR3/3) 粘土, 炭化物含む           | 12 暗褐色 (10YR3/3) 粘土, 炭化物少量含む          |
| 2 暗褐色 (10YR3/3) 粘土, 炭化物含む, 地山土多量混入  | 13 暗褐色 (10YR3/3) 粘土, 地山土混入            |
| 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土, 炭化物少量含む      | 14 黒色 (10YR2/1) 粘土, 炭化物含む, 地山土少量混入    |
| 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土, 明度あり         | 15 黒褐色 (10YR2/3) 粘土, 炭化物少量含む, 地山土多量混入 |
| 5 黒褐色 (10YR2/3) 粘土, 炭化物含む           | 16 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土, 地山土多量混入         |
| 6 黒褐色 (10YR2/3) 粘土, 地山土多量混入         | 17 暗褐色 (10YR3/4) 砂シルト, マンガン少量含む       |
| 7 黒色 (10YR2/1) 粘土, 地山土混入            | 18 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土, 地山土混入           |
| 8 暗褐色 (10YR3/3) 粘土, 炭化物含む           | 19 黒褐色 (10YR3/2) 砂シルト, 粗質             |
| 9 黒褐色 (10YR2/2) 粘土, 炭化物少量含む         | 20 黒褐色 (10YR3/2) 砂シルト, 粗質, 小礫混入       |
| 10 黒褐色 (10YR2/3) 粘土, 炭化物含む          | 21 黒褐色 (10YR2/2) 砂シルト, 粗質, 地山土混入      |
| 11 暗褐色 (10YR3/3) 粘土, 炭化物少量含む, 締まりあり | 22 暗褐色 (10YR3/3) 砂シルト, 明度あり, 小礫混入     |



第16図 02-OX

南半に試掘調査時のトレンチが入っており、遺構の形状を捉えるうえでは影響はなかったが、遺物の半数近くが出土位置の記録のないまま取り上げられている。

覆土は22層に細分された。底面上や壁際の堆積土を除く大半の覆土に炭化物の混入が認められた。また、覆土の状況からすると掘り直しはなかったようで、順次堆積していったものと観察される。

出土遺物は試掘調査時のものを含め1269点、22,974 gを測る。土師器、黒色土器A類、黒色土器B類、須恵器、緑釉土器などの土器類のほか土錘、鉄釘、鉄滓、石製品が認められ、土器類が全体の99%を占めている。また、土器類のなかでも土師器と黒色土器A類とで出土遺物の90%近くにのぼっている。

出土遺物については可能なかぎり図示した。その数は土師器89点、黒色土器A類40点、黒色土器B類4点、須恵器4点、土錘15点、鉄釘2点、鉄滓2点、石製品2点である。

まず土師器については、皿をはじめ、杯、盤、甕、蛸壺および釜が器種として認められた。

皿はさらに、口縁部の立上がりの直線的なもの（17～24）、内湾気味のもの（25～29）、外反するもの（30～33）、そして口縁部が直立気味のもの（34）とに分類することができる。

杯類は高台をもたないもの（A類）ともつもの（B類）に分かれ、さらにまた胴部から口縁部への立上がりが直線的あるいは外反気味のもの（I類）と丸味があり内湾気味のもの（II類）とに形態分類することができる。

杯類A Iはさらに口縁部が直線的に立上がるもの（35～45）、外反するもの（46～50）、直立気味なもの（51～52）に分けることができる。

杯類A IIもまた口縁部が直線的に立上がるもの（53～62）、外反するもの（63～72）、直立気味なもの（73～74）に分かれる。

杯類B Iはまず口縁部が直線的に立上がるもの（75～88）、端部が外反するもの（89～92）に分かれ、前者はさらに外面調整の上から、ユビナデにより器面が整えられたもの（75～79）とユビオサエの痕をそのまま残すもの（80～88）とに分かれる。なお口縁端部が外反するものはいずれも外面ユビオサエ痕を残している。

図示した土師器のうちで杯B IIに比定できるものは93の1点だけである。外面にユビオサエの痕を明瞭に残している。

盤も94の1点だけである。外面はユビナデ調整により平滑に仕上げられている。



甕には口径が胴部径を下回るもの（95～100）、口径が胴部径とほぼ等しいもの（105）、口径が胴部径を上回るもの（101）とがあり、95～100についてはさらに口径の大きさから小型（95）、中型（96～97）、大型（98～100）と相対的に細分することができる。

蛸壺も102の1点だけである。頸部が狭く口径が胴部径を下回り、長胴形で、丸味のある底部を有している。外面にユビオサエの痕を顕著に残している。器壁は厚い。また焼成は不良である。

釜は口縁部の小破片2点を断面図で図示できたにすぎない。ともに鏝の部分を欠失している。

内面にのみ炭素を吸着させた黒色土器A類には杯と鉢がみられる。また杯は、土師器と同様高台の有無と、胴部から口縁部への立上がりの形状からA I、A II、B I、B IIに4分類することができる。

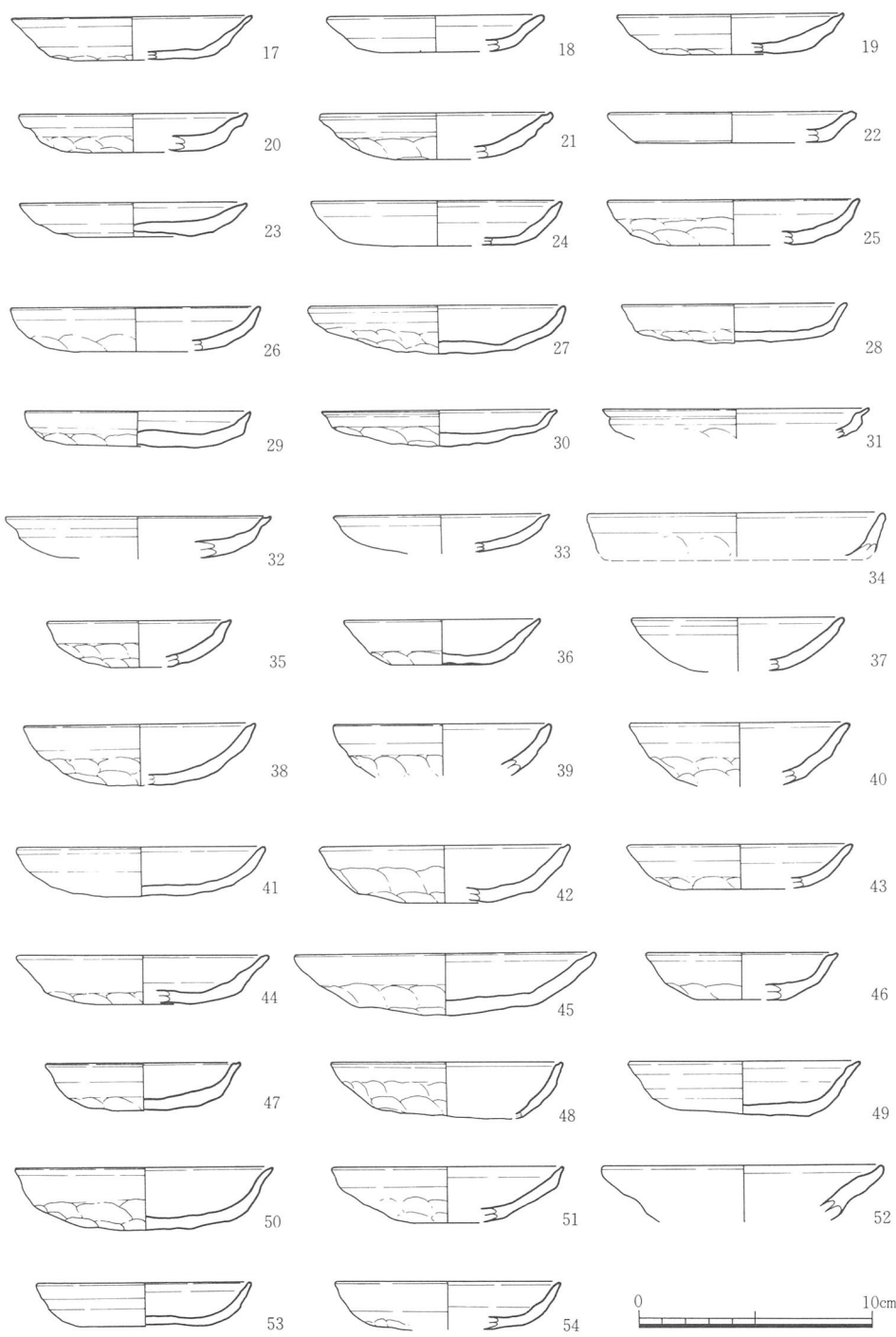
杯A Iは106～107の2点が図示できたにすぎない。ともに外面ユビオサエ痕がみられ、内面にはミガキ調整が施されている。ただ、前者は口縁部が直線的に立上がるのに対して、後者は外反気味であるという差異はある。

杯A IIも108の1点が図示できたに留まる。外面ユビナデ、内面ミガキによる調整がみられる。口縁端部は外反している。

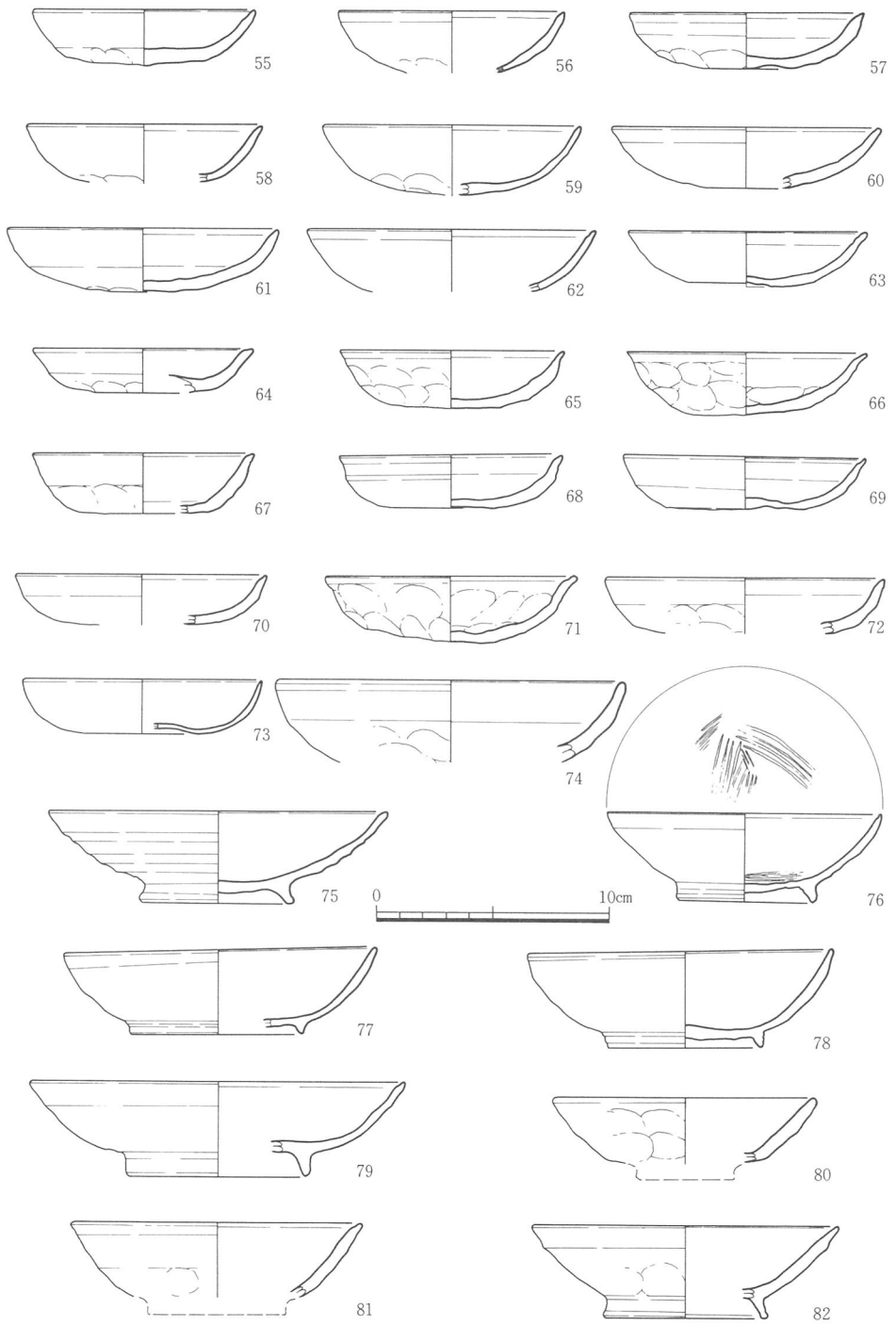
杯B Iは21点と黒色土器A類の中でもっとも多く図示することができた。これらも口縁部の立上がりの形状から分類することができ、直線的に立上がるもの（109～123）、端部が外反するもの（124～125）、直立気味のもの（126～129）となる。さらに、外面調整から区分でき、直線的に立上がるものはミガキによるもの（109～110）、ヘラケズリによるもの（111～117）、ユビオサエによるもの（118～123）に、外反するものはヘラケズリによるもの（124）とユビオサエによるもの（125）に細分することができる。なお直立気味のものはいずれも外面ユビオサエ調整によっている。

杯B IIは高台を有し、口縁部が丸味をもって立上がるもので、「椀」と呼ぶことが可能な一群である。これらもまた口縁端部の立上がりの形状から、そのまま丸味をもって立上がるもの（130～134）と僅かに外反するもの（135～137）に分かれる。さらに、前者は外面調整がミガキによるもの（130）、ヘラケズリによるもの（131～132・134）、ユビオサエによるもの（133）とに分かれ、後者もまたミガキによるもの（135）、ヘラケズリによるもの（136）、ユビオサエによるもの（137）に各々細分することができる。

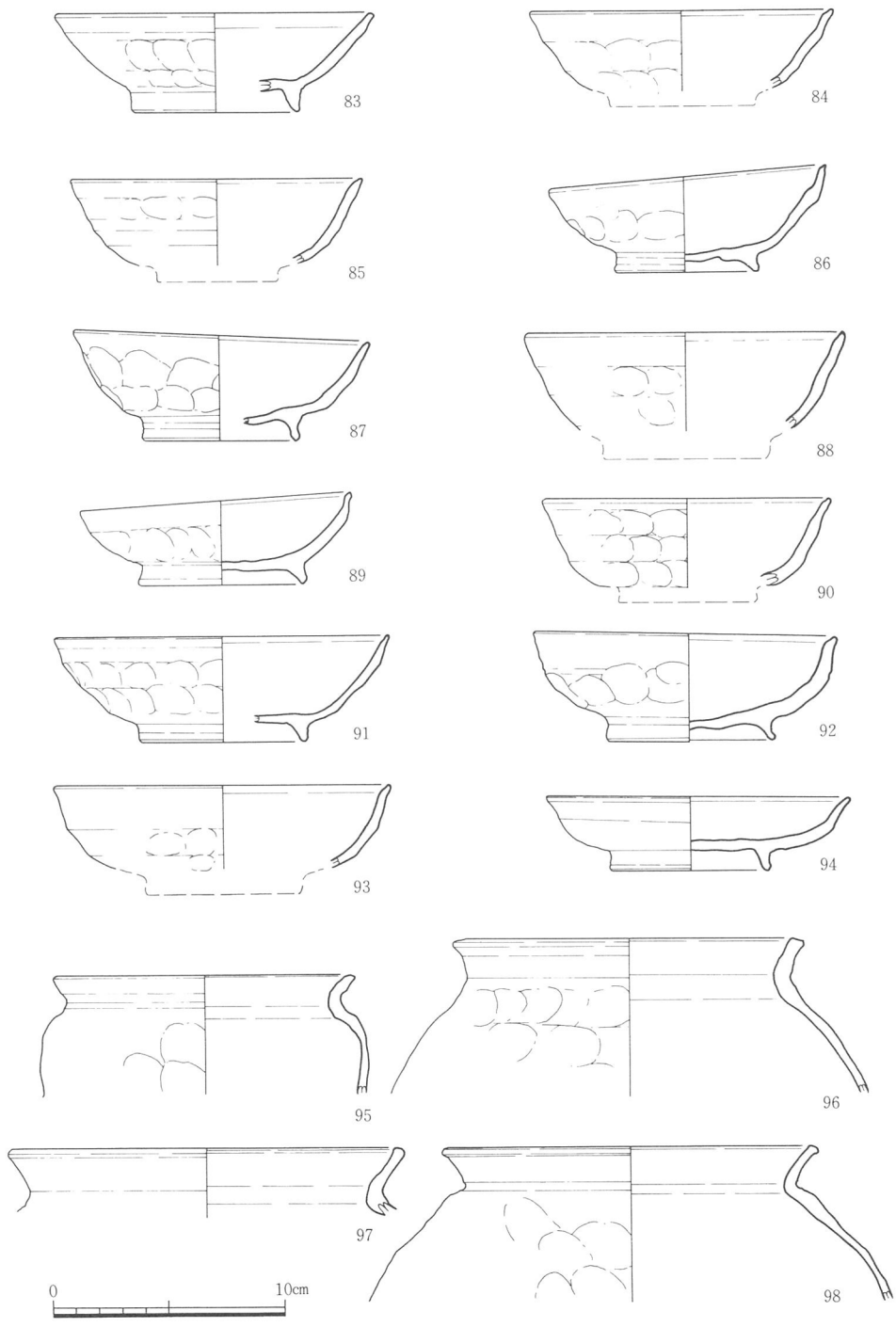
これらの他139のようにミニチュア品と考えられるものがある。口径4.2cm、器高2.1cm



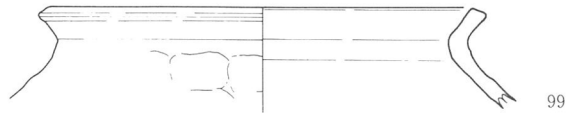
第17図 02-OX出土遺物(1)



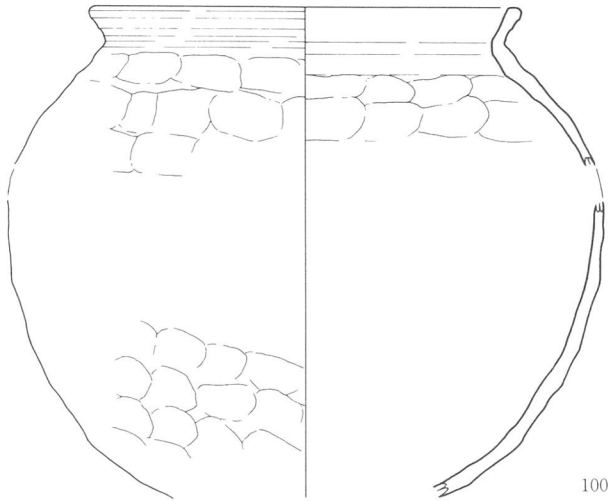
第18図 02-OX出土遺物(2)



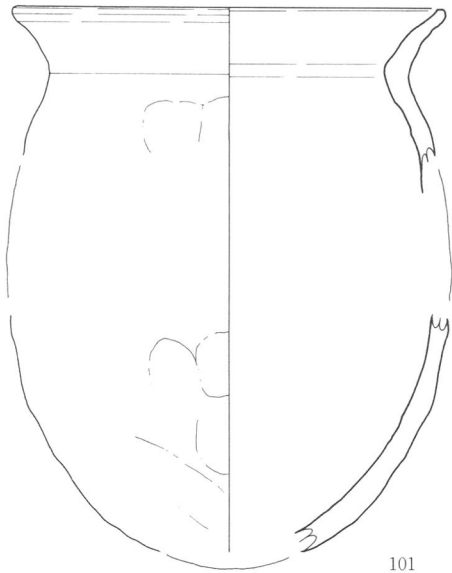
第19図 02-O X 出土遺物 (3)



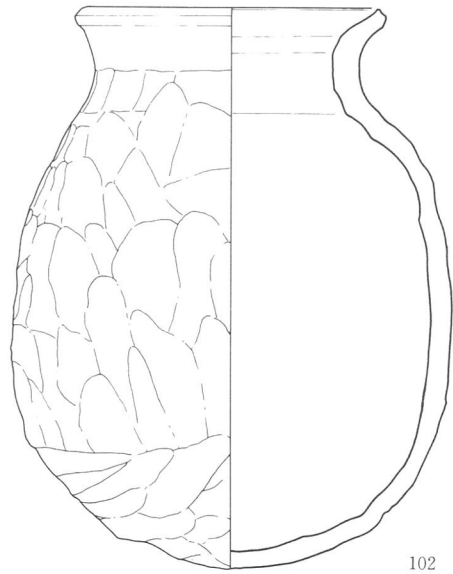
99



100



101



102



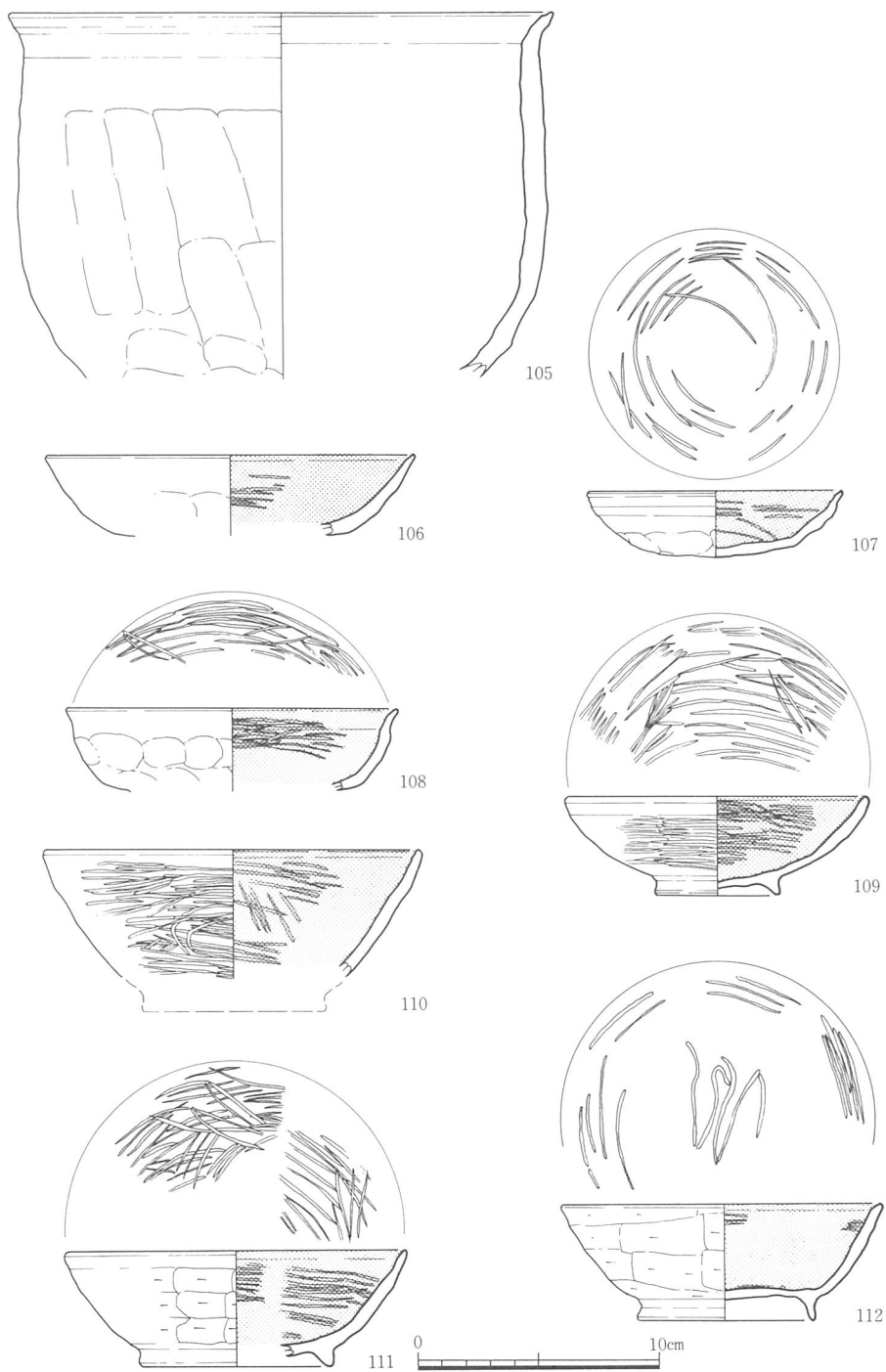
103



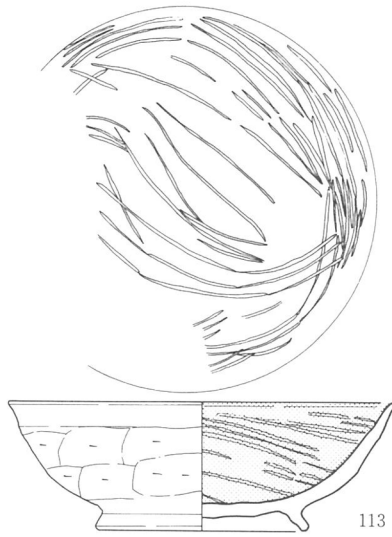
104



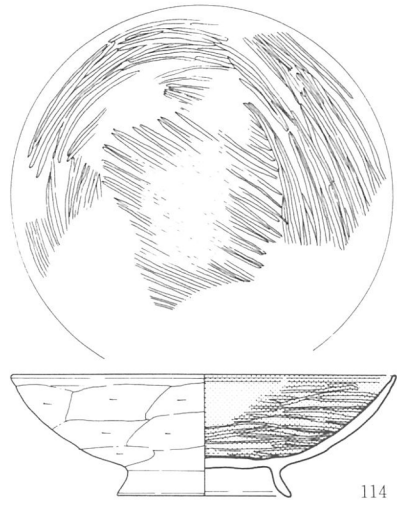
第20図 02-O X 出土遺物 (4)



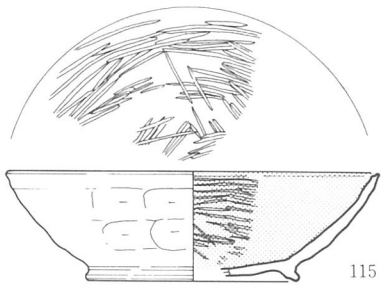
第21図 02-OX出土遺物(5)



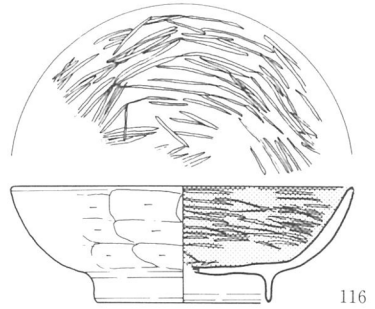
113



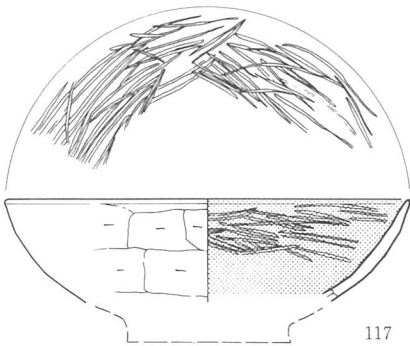
114



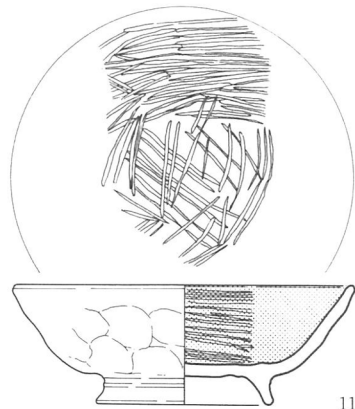
115



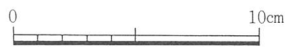
116



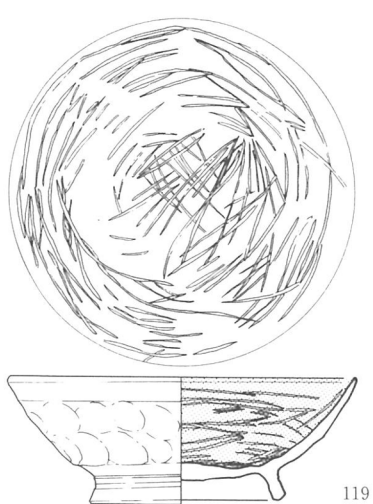
117



118



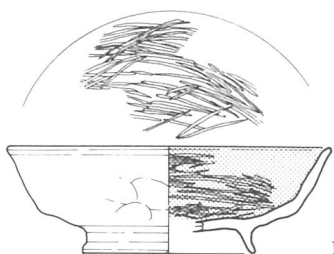
第22図 02-O X出土遺物(6)



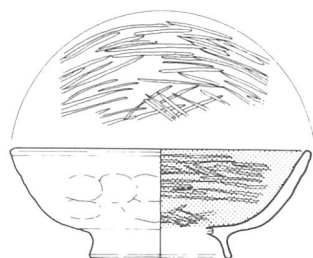
119



120



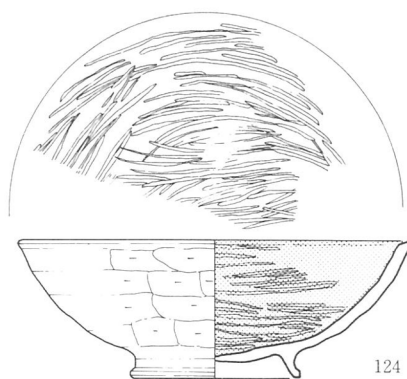
121



122



123

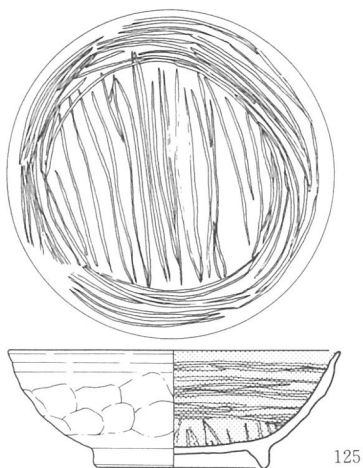


124

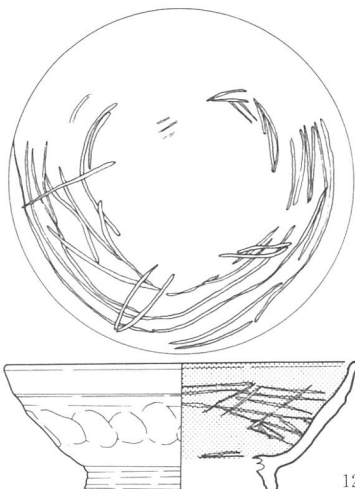


第23図 02-OX出土遺物(7)

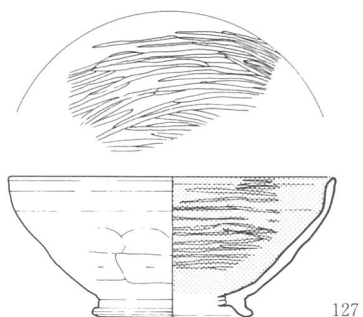




125



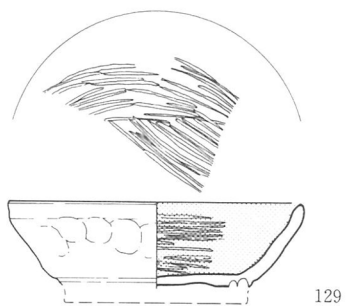
126



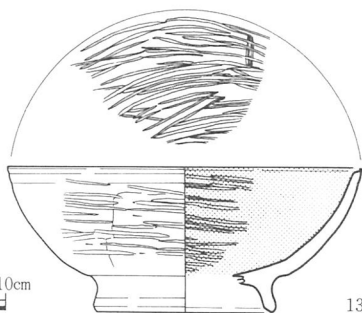
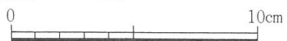
127



128

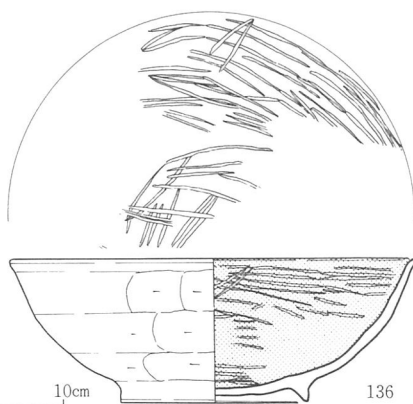
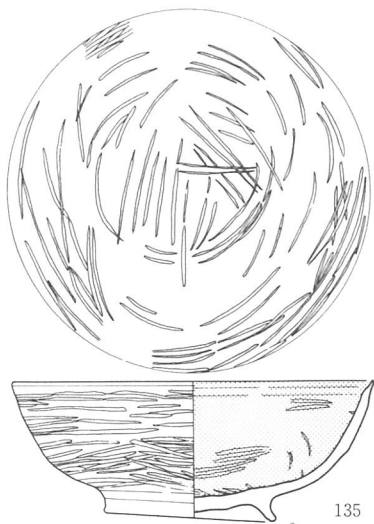
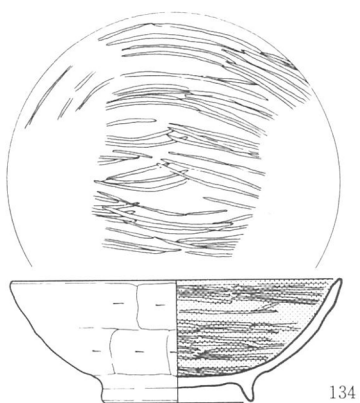
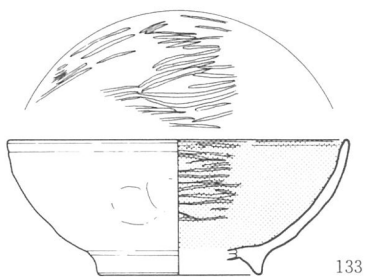
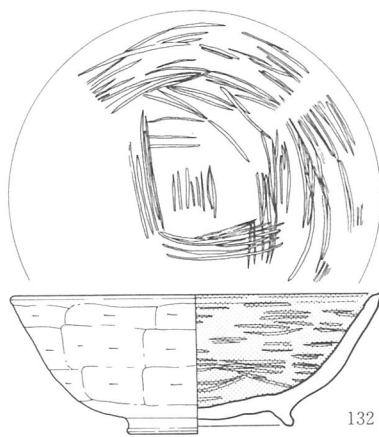
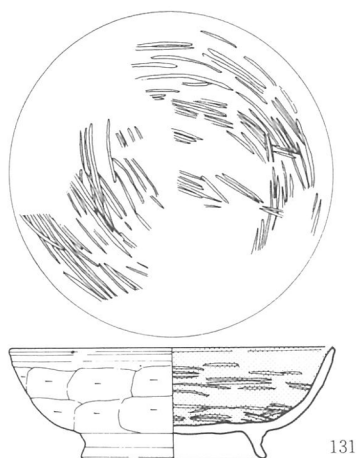


129



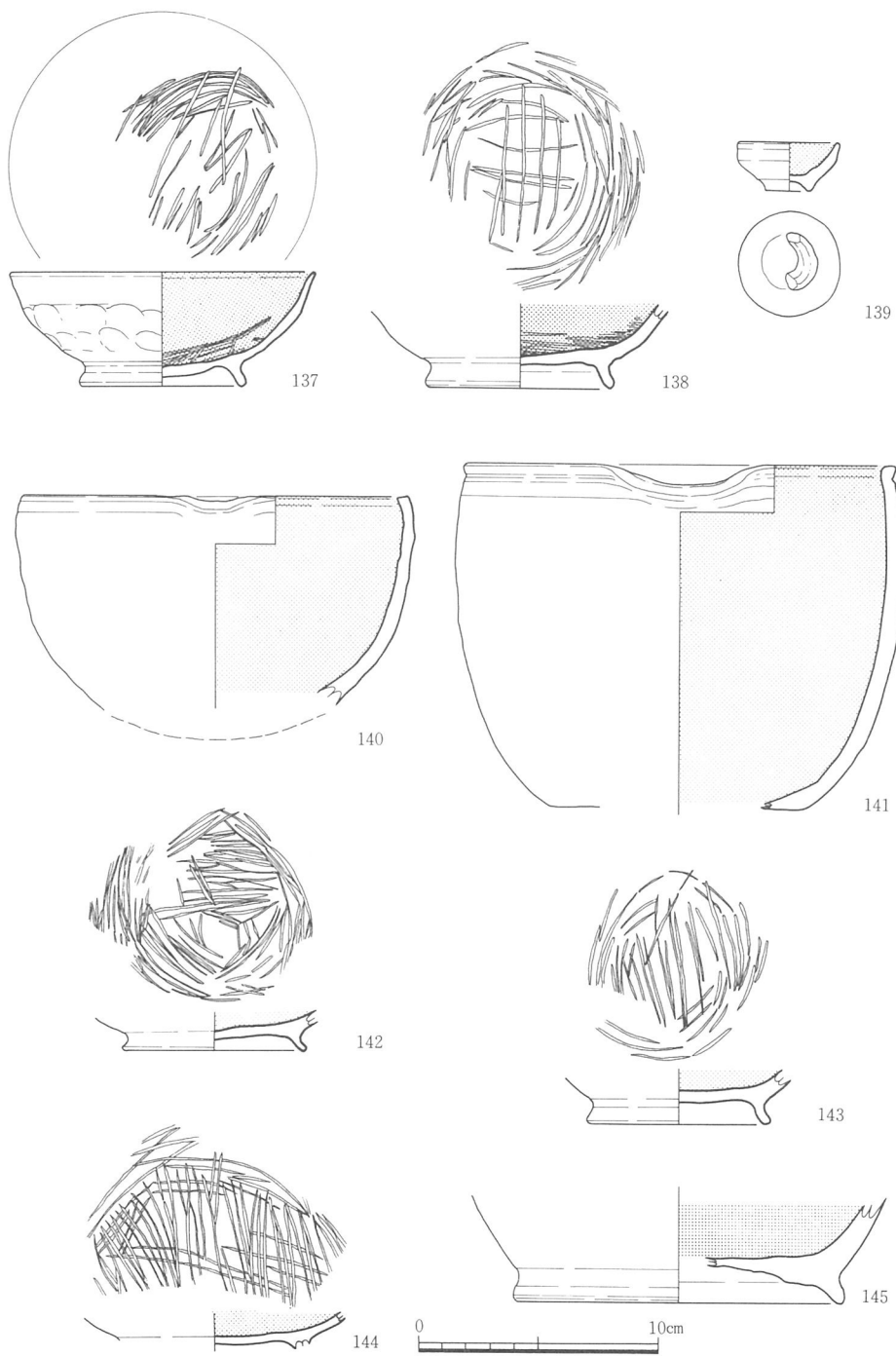
130

第24図 02-OX出土遺物(8)

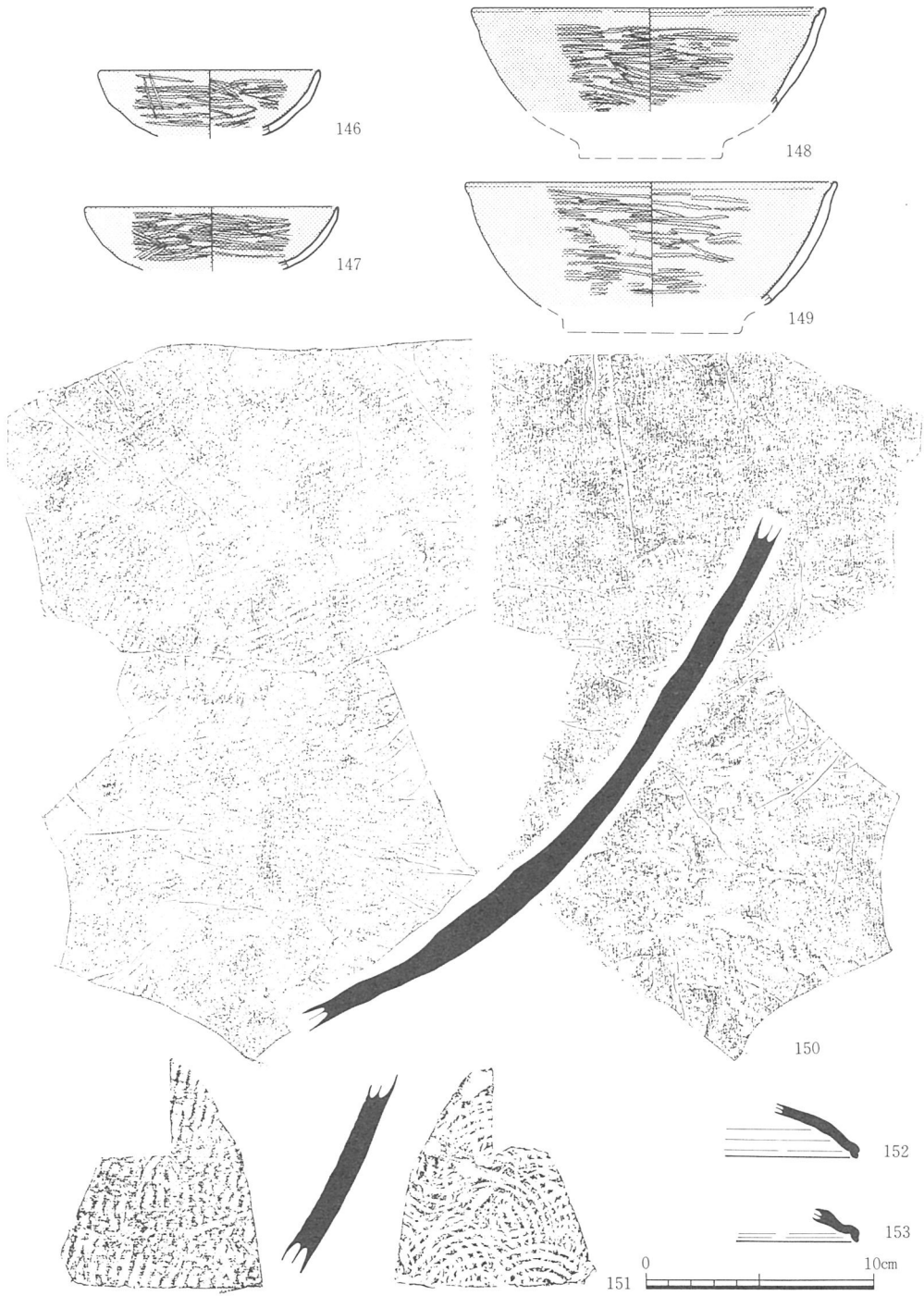


0 10cm

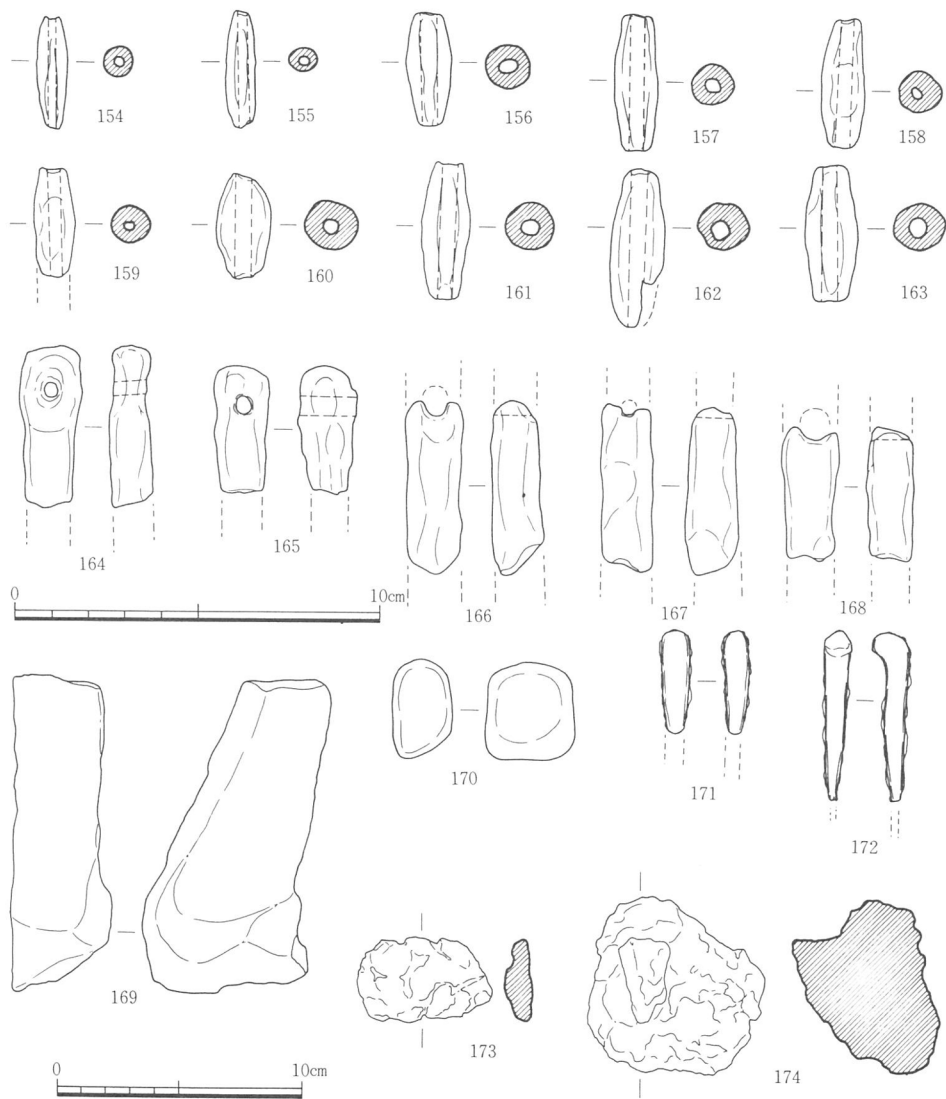
第25図 02-O X 出土遺物 (9)



第26図 02-O X 出土遺物 (10)



第27図 02-OX出土遺物(11)



第28図 02-O X出土遺物 (12)

を測る。高台は粘土紐の貼付による。内面に炭素を吸着させて黒色化させており、外面の上部も黒色化している。

鉢は、図示した2点とも片口となるものである。140は丸味のある底部を、141は平坦な底部をもつと思われる。

内外面に炭素を吸着させた黒色土器B類には杯A IIとB IIとが認められた。

杯A II (146~147) はともに類似した形状を示している。また杯B IIには口縁部が直線

的に立上がるもの(148)と端部が僅かに外反するもの(149)とがみられた。

須恵器には甕と杯蓋とがみられる。150は大甕の底部から胴部にかけての破片で、外面の平行叩き目や内面の当具痕は丁寧にナデ消されている。151も甕の破片であるが、150とは別個体である。外面の格子目や内面の同心円文は明瞭に残っている。杯蓋(152～153)2点はともに復元実測できないほどの小破片である。

土錘には管状を呈するもの(154～163)と柱状の形態をもち両端に穿孔したもの(164～168)とがあり、前者はさらに細型(154～155)、中細型(156～159)、中太短型(160)、中太型(161～163)に細分することもできる。

石製品には砥石(169)があり、残りは不明品(170)である。

鉄釘は2点認められ、頭部に丸味をもたせただけのもの(171)と、搔折釘(172)とがある。

鉄滓も2点出土した(173～174)。

以上の遺物のうち土師器と黒色土器A・B類の特徴から、後述するように02-OXを10世紀後半代に位置付けることが可能といえよう。

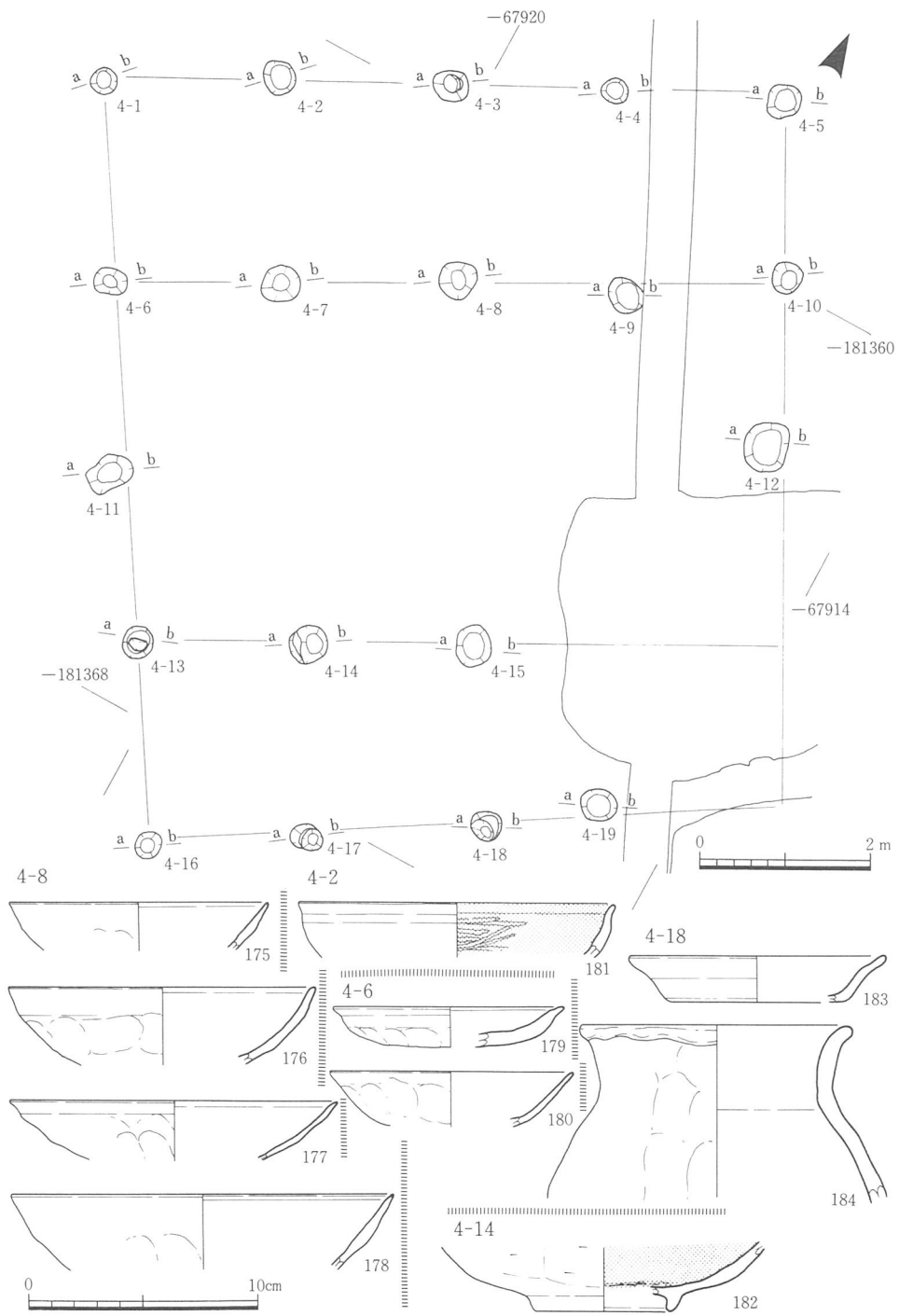
#### 04-OB

04-OBは調査区南東部分に位置している。N-66°-Eに主軸をもつ掘立柱建物跡である。桁行4間(7.9m)、梁行2間(4.2m)を測り、さらに東西両側には2mほどの距離をあけて桁柱と対応する位置に廂柱が並んでいる。南東部分が攪乱されており、柱穴3基が消失しているが、その他は比較的よく遺存している。

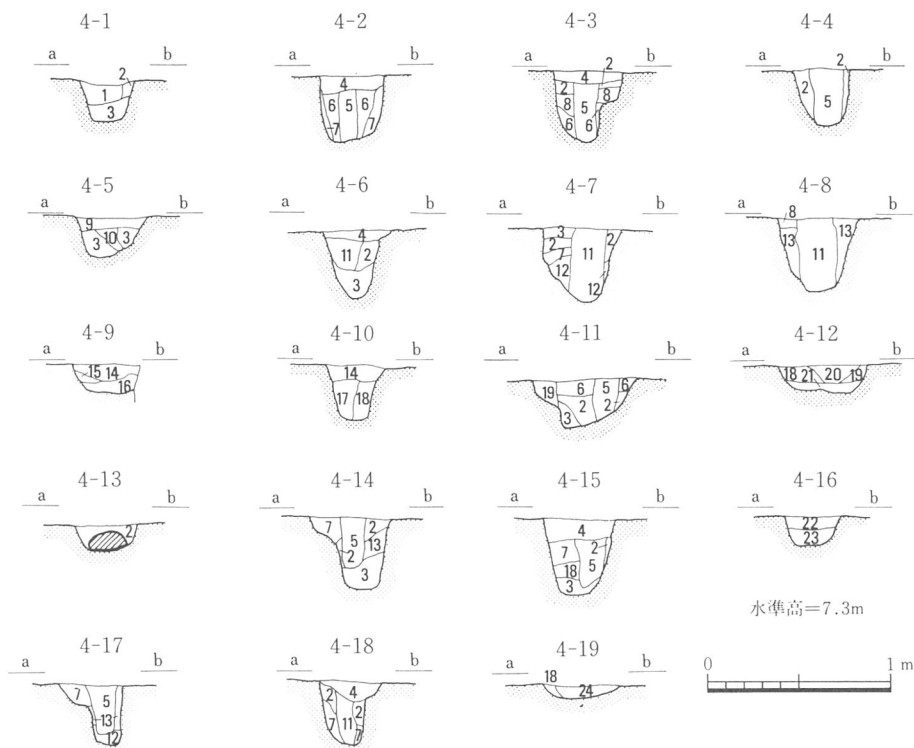
柱穴の平面形は円形あるいは楕円形で、その大きさは最も小さい4-1で30×30cm、大きい4-12で56×50cmを測り、平均40×35cmほどである。深さは6～41cmあり、4-9・12・13・16・19を除くと掘方はしっかりとしている。

また4-2・3・4・6・7・8・10・11・14・15・17・18の12基については柱痕が観察でき、その幅は9～20cm、平均14cmであることから、径15cm前後の柱材が使用されていたと考えられる。

柱痕や柱穴上部の覆土から遺物の出土がみられた柱穴が5基ある。そのうち図示できたものは4-6の土師器2点、4-8の土師器4点、4-18の蛸壺1点を含む土師器2点、4-2および4-14の黒色土器A類各1点である。これらの土器は建物が崩壊したのち柱穴に混入したものと考えられ、いずれも先の02-OX出土の土器と大差ないものであることから、この04-OBもほぼ時期を同じくするものと考えられる。



第29図 04-O Bおよび出土遺物



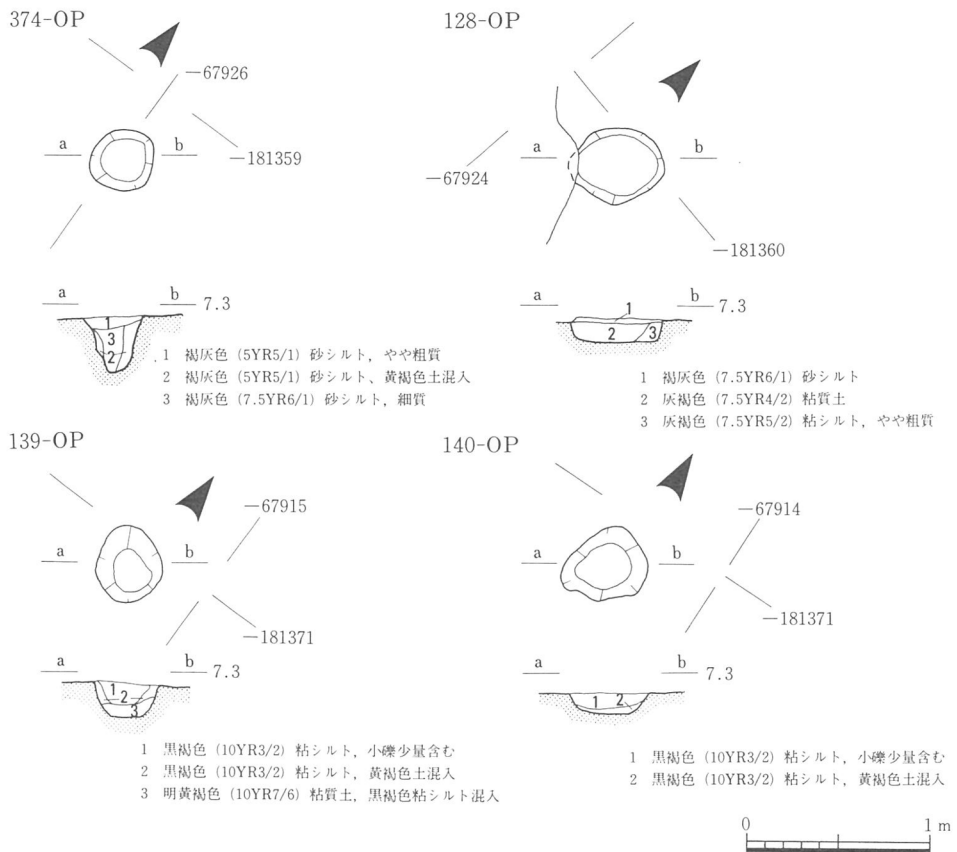
- |                                 |                                 |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1 灰褐色 (7.5YR6/2) 砂シルト、礫少量含む     | 13 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土、粗質、礫含む、埋土  |
| 2 褐灰色 (10YR5/1) 砂シルト、黄褐色土混入、埋土  | 14 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土、粗質        |
| 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂シルト、小礫少量含む、埋土 | 15 灰褐色 (7.5YR5/2) 粘質土           |
| 4 褐灰色 (10YR6/1) 砂シルト、やや粗質       | 16 褐灰色 (10YR6/1) 粘シルト、粗質        |
| 5 褐灰色 (7.5YR6/1) 砂シルト、粗質、柱痕     | 17 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土、やや粗質、柱痕    |
| 6 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂シルト、縮まりあり、埋土  | 18 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土、縮まりあり、埋土   |
| 7 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質土、黒褐色土混入、埋土  | 19 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘質土、黄褐色土少量混入  |
| 8 褐灰色 (10YR4/1) 砂シルト、縮まりあり、埋土   | 20 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘シルト、粗質       |
| 9 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂シルト、細質      | 21 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘シルト、褐灰色土混入 |
| 10 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘質土、小礫少量含む、埋土 | 22 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂シルト、やや粗質     |
| 11 褐灰色 (10YR5/1) 砂シルト、細質、柱痕     | 23 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂シルト、小礫少量含む   |
| 12 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質土、縮まりあり、埋土  | 24 褐灰色 (7.5YR5/1) 砂シルト、褐灰色土少量混入 |

第30図 04-O B柱穴土層

#### 04-O B周辺の小穴

04-O B周辺には幾つかの小規模な遺構が散在しているが、掘り込みの比較的明瞭な小穴が4基認められた。128・139・140・374-O Pである。そのうち、374-O Pでは覆土の状況が掘立柱建物跡の柱穴にみられる様相と類似しており、また139-O Pも柱痕が崩れたような堆積状況を示している。こうしたことから04-O B周辺に何らかの構造物の存





第31図 04-OB周辺の小穴

在していた可能性が窺われる。

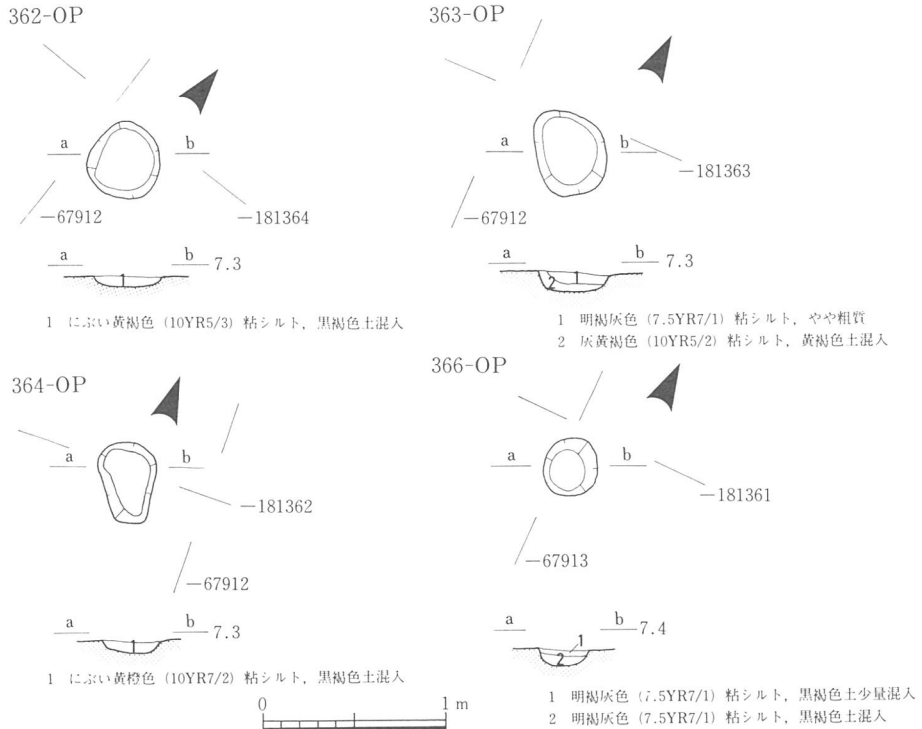
#### 04-OB東側の小穴

04-OB東側において1.0~1.5m間隔でL字形に並ぶ小穴列が認められた。362・363・364・366-OPである。

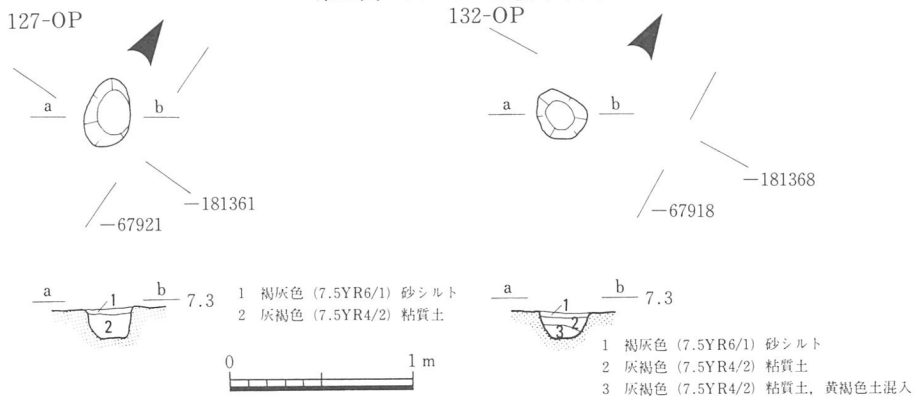
いずれも長径30~40cmの円~楕円形を呈し、深さは6~10cmほどと浅い。覆土はにぶい黄褐色の粘シルト、あるいは明褐灰色粘シルトを基調としている。深度に乏しいが、363・364・366-OPは04-OBとほぼ一致した方向で並んでいることから、04-OBと関連するものと考えられる。

#### 04-OB内の小穴

04-OBと重複する位置関係にある小規模な遺構が幾つかあるが、そのなかでも比較的掘り込みの明瞭なものに127・132-OPがある。ともに覆土の最上層が褐灰色砂シルト、



第32図 04-O B 東側の小穴



第33図 04-O B 内の小穴

それ以下が灰褐色粘質土である。出土遺物はなかった。04-O Bとの関連については判然としないが、04-O B内側あるいは周辺に所在する小穴の中でも掘り込みのしっかりとしたものである。

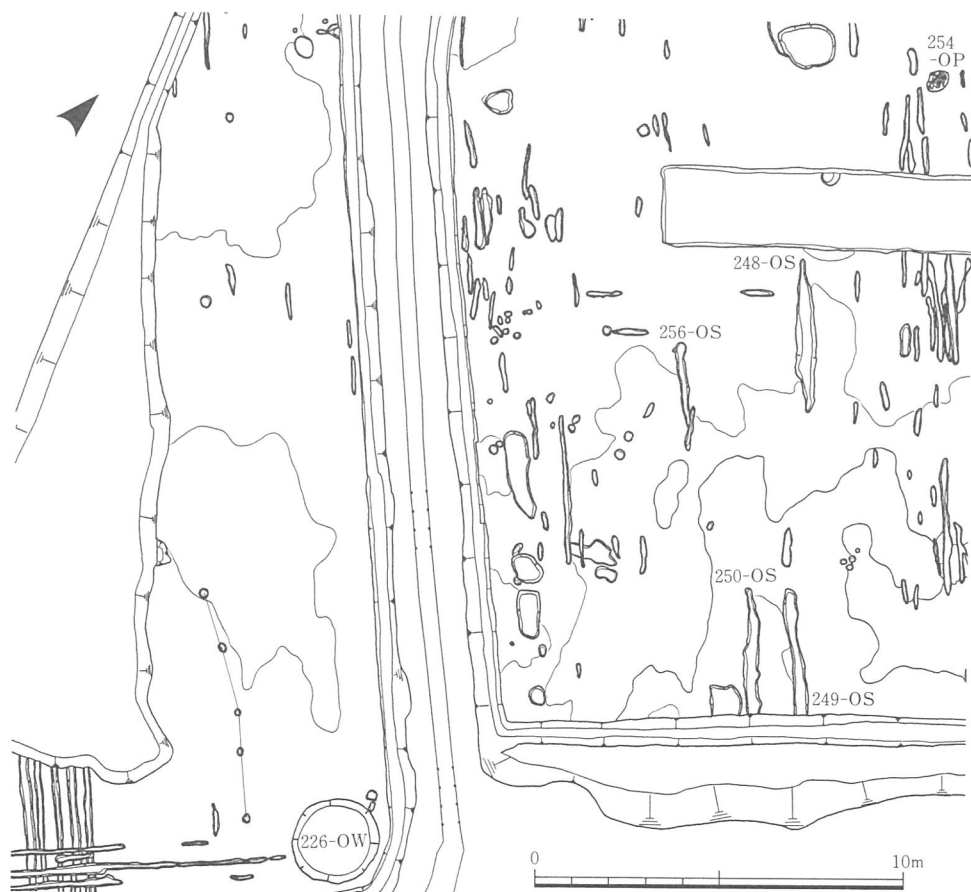
調査区中央南側では、北西－南東方向に平行して延びる溝状遺構の存在が目立ち、他に井戸も検出された。

#### 226-OW

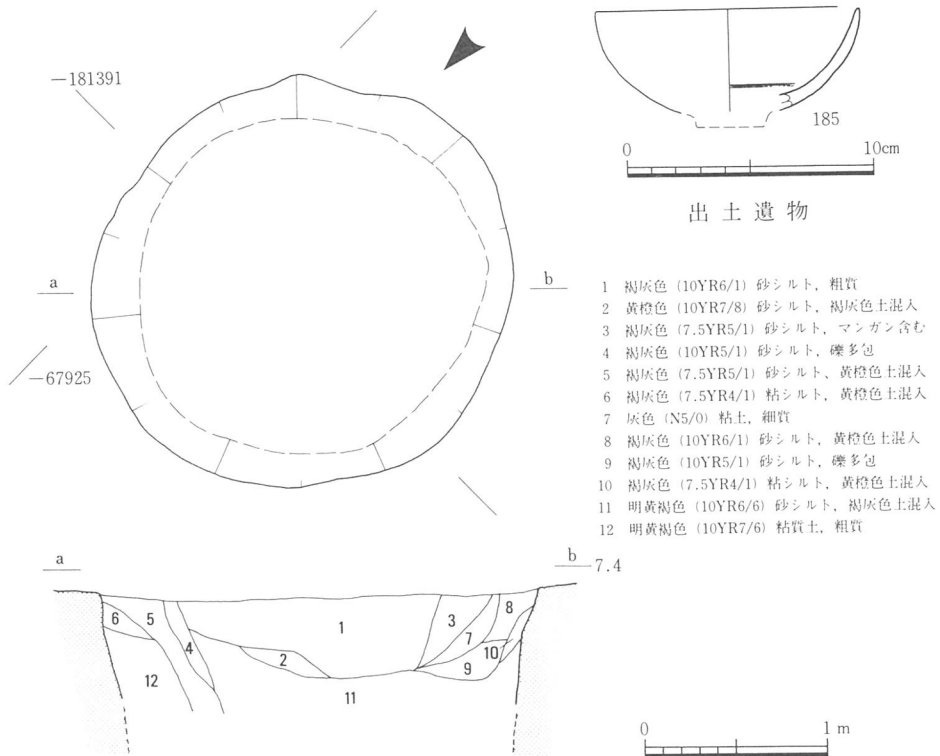
調査区南壁近くに位置する井戸である。南北2.3m、東西2.2mを測り、平面形はほぼ円形を呈している。深さは0.8mまで確認したが、さらに下がる。壁の立上がりは垂直的である。

覆土は砂シルトを基調とし、部分的に粘土・粘質土を挟んでいる。出土遺物は図示した磁器中碗（185）のほか土師器甕（12g）・不明（8g）、須恵器不明（1g）が認められた。こうした遺物から、この井戸の埋没時期は近世であると考えられる。

なお、この226-OWの西側に径5cmたらずの小穴が5基ほど並んでおり、杭あるいは



第34図 調査区中央南側の主な遺構



第35図 226-O W

柵の跡かと思われる。

#### 249・250-O S

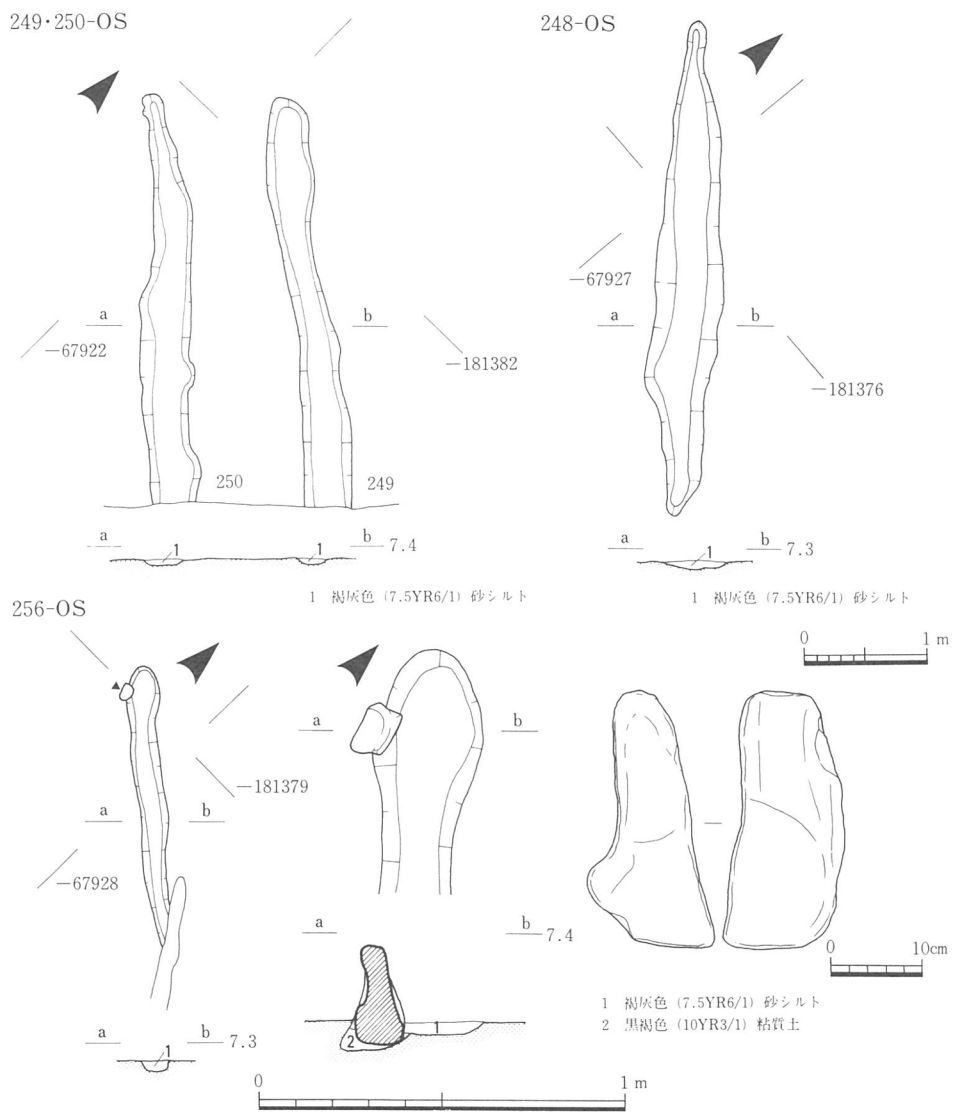
0.9mの間隔をもって並走する両溝状遺構は、調査区の南壁に接して位置し、その一部は調査区外に延び出ている。ともに現況で長さ3.2m、幅は0.4mほどを測り、N-45°-Wに主軸方向をもつ。深さは5cmほどと浅い。覆土は、耕作痕内堆積土と同じく褐灰色砂シルトであった。出土遺物はなかった。

#### 248-O S

250-O Sの北西方向約5mに位置する長さ4m、幅0.5mほどの溝状遺構である。主軸はN-46°-Wにある。覆土は褐灰色砂シルトの単一層である。遺物の出土はみられなかった。

#### 256-O S

248-O Sの南西約3mにほぼ平行して位置している。南端が耕作痕と重複しているた



第36図 調査区中央南側の溝状遺構

め不明瞭になっているが、現状で長さ2.2m測る。幅は0.2m、深さは4～8cm。主軸方向をN-49°-Wにとっている。

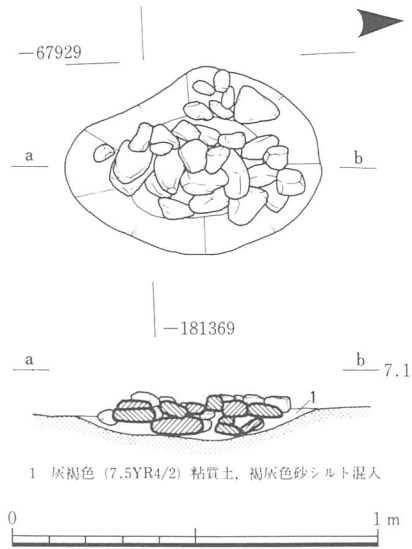
また、北西端近くの西側に立石が認められる。壁の立上がり際をさらに5cmほど掘り下げ、その中に長さ28cmの柱状の礫を立て、黒褐色粘質土で埋め戻したものである。境界を示すためのものかも知れない。なお溝内の覆土は褐灰色砂シルトの単一層である。出土遺物はなかった。

254-O P

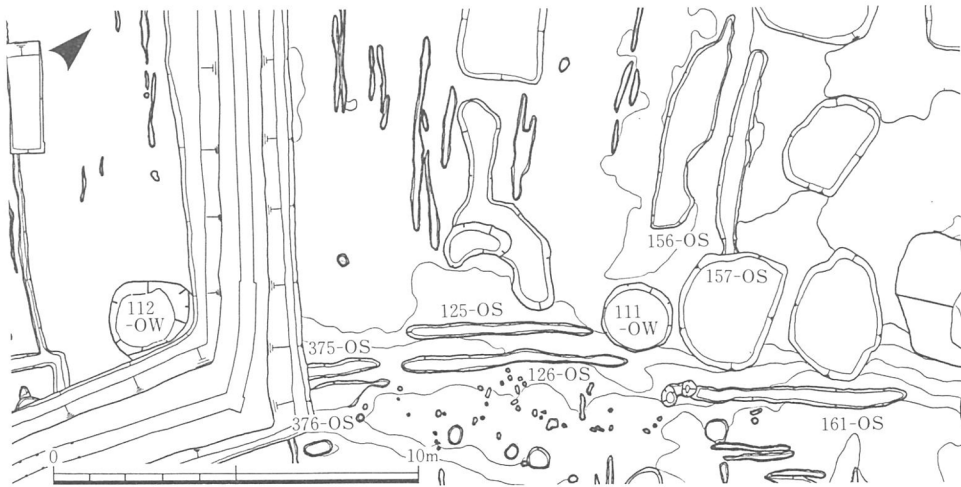
02-O Xの西方1.7mほどのところに位置するこの254-O Pは、深さ10cmほどの浅い皿状の掘方に、径5~10cmの礫を充填した小穴である。

長軸0.7m、短軸0.5mを測る楕円形を呈している。礫間に混在する覆土は灰褐色粘質土である。遺物の出土はなかった。

調査区中央付近でも溝状遺構の存在が目立ち、その他の主なものとしては井戸2基がある。また溝状遺構のなかには南北方向のものと東西方向のものが認められる。



第37図 254-O P

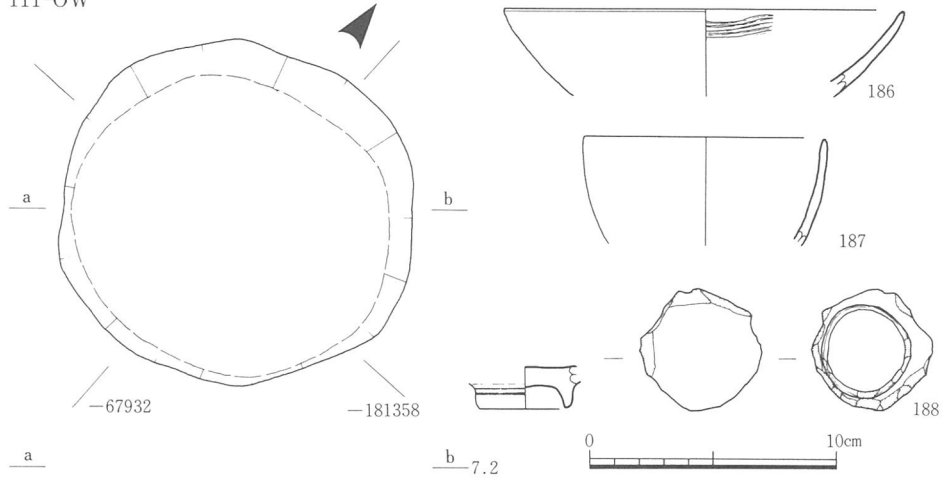


第38図 調査区中央付近の主な遺構

111-O W

調査区中央やや南東寄りに位置するこの井戸は、長軸2.0m、短軸1.8mを測る長円形を呈している。深さは1mまで確認したがさらに下がる。壁の立上がりは垂直的である。覆土は、開口部近くに黄褐色砂質土が40~50cmほど堆積しているが、それ以下はシルトを基調とし、部分的に粘土を挟んでいる。

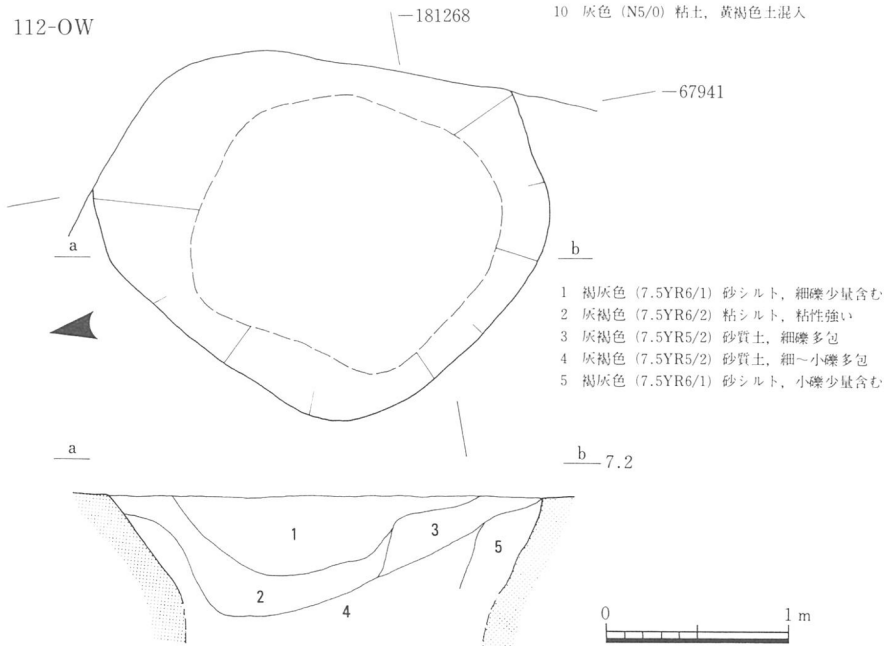
111-OW



出土遺物

- 1 褐灰色 (7.5YR6/1) 砂シルト, 軟質
- 2 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土, 細礫多包
- 3 褐灰色 (10YR6/1) 粘シルト, 黄褐色土混入
- 4 黒色 (10YR2/1) 粘土, 褐灰色土多量混入
- 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂シルト, 黒色粘土多量混入
- 6 褐灰色 (10YR6/1) 粘シルト, 黄褐色土混入
- 7 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土, 粗質
- 8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘シルト, 黄褐色土混入
- 9 にぶい橙色 (2.5YR6/3) 砂質土, 細礫含む
- 10 灰色 (N5/0) 粘土, 黄褐色土混入

112-OW



- 1 褐灰色 (7.5YR6/1) 砂シルト, 細礫少量含む
- 2 灰褐色 (7.5YR6/2) 粘シルト, 粘性強い
- 3 灰褐色 (7.5YR5/2) 砂質土, 細礫多包
- 4 灰褐色 (7.5YR5/2) 砂質土, 細~小礫多包
- 5 褐灰色 (7.5YR6/1) 砂シルト, 小礫少量含む

第39図 111・112-OW

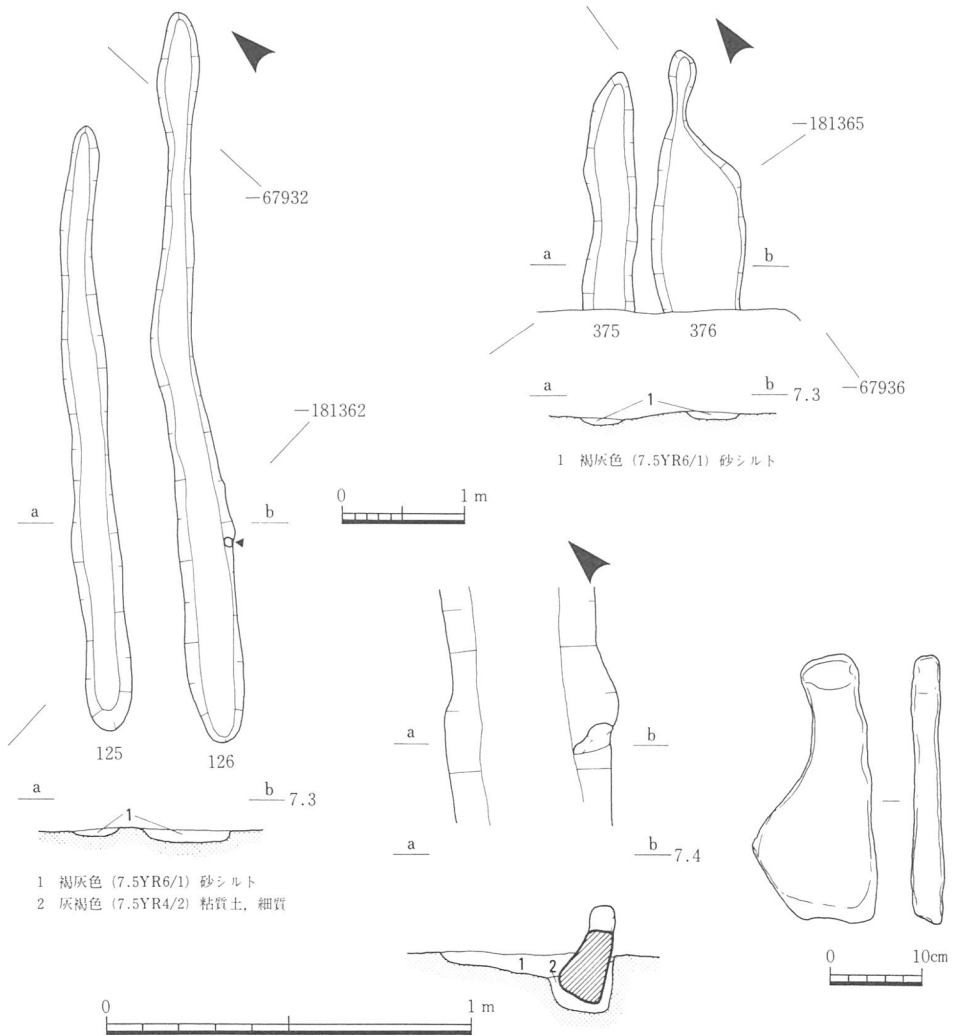
出土遺物は、磁器中椀（188）、陶器小椀（187）・中椀（186）・不明（8 g）である。そのうち磁器中椀の高台部資料は、裏面の端辺と高台が打ち欠かれている。出土遺物より、この井戸の埋没は近世であると考えられる。

112-OW

111-OWの南西11mに位置する。農業用水路の確保のため東側の一部が未調査に終わっている。現状での長軸は2.4mを測る。深さは0.7mまで確認したが、なおまだ下がっている。

125・126-OS

375・376-OS



第40図 調査区中央所在の溝状遺構（1）

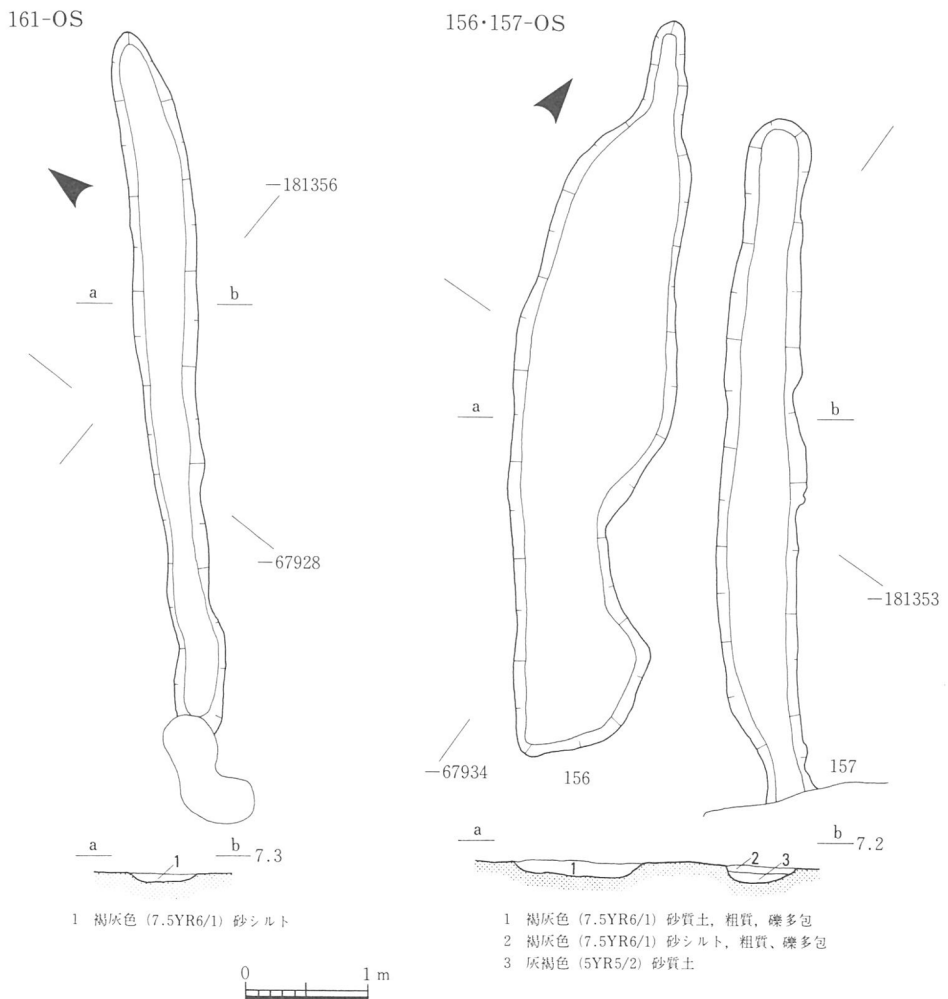


覆土は、上部の窪みにはシルトを基調した堆積土がみられるが、それ以下では礫を多包した灰褐色砂質土が主体であり、他の2つの井戸とは様相を異にしている。

出土遺物は多く、土師器甕（112 g）、磁器中椀（20 g）・不明（1 g）、陶器中椀（8 g）・徳利（8 g）・不明（3 g）、須恵器甕（15 g）が認められた。しかしすべて小破片であり、図示することはできなかった。なお出土遺物より、本井戸の埋没時期も近世と考えられる。

125・126-O S

111-O Wの南西1 mの近距離に位置する両溝状遺構は、0.5 mの間隔をもって並走して



第41図 調査区中央所在の溝状遺構（2）

いる。125-O Sは長さ6m、126-O Sは4.9mで、ともに幅は0.45~0.3m、深さは5cmほどである。覆土は褐灰色砂シルトである。

両者とも主軸方向をN-45°-Eにとり、調査区南側中央に所在する249-O Sなどの一群の溝状遺構とは直交する方向にある。

また126-O Sでは、その西辺において、256-O Sと同様の立石が認められた。やはり壁の立上がり際を10cmほど掘り下げ、その中に長さ29cm、厚3cmほどの扁平な礫を立て、灰褐色粘質土で埋め戻している。ただ、256-O Sとは異なり、溝状遺構の端部ではなく中程に立てられている。

### 375・376-O S

126-O Sの南西0.5mに位置し、0.1~0.2mほどの極めて狭い間隔で並走している。主軸方向はほぼN-40°-Eである。ともに南西部分が農業用水路下に延びており、全形を捉えることはできない。

現況では、375-O Sは長さ0.9m、幅0.4m、376-O Sは長さ2.1m、幅0.8mを測る。ともに深さは5~10cm程度で、覆土も褐灰色砂シルトの単一層である。多少のずれはみられるが、東方の125・126-O Sと対応しているものと考えられる。遺物の出土はみられなかった。

### 161-O S

126-O Sの東2mに位置する。南西端が小穴と重複しているが、長さはほぼ5.8mである。幅は0.3~0.5mを測る。また主軸方向はN-43°-Eである。覆土は125-O Sなどと同じ褐灰色砂シルトの単一層である。出土遺物はなかった。

### 156・157-O S

156・157-O Sは111-OWの北1.5mに位置する。0.4mほどの間隔で並走している。主軸方向はほぼN-34°-Wであり、161-O Sなどと直交する北西-南東方向をとっている。

156-O Sは長さ6.0m、幅は0.8~1.3mとやや幅広い。157-O Sは南東部分に攪乱を受けているため全形は捉えられないが、現状での長さは5.5mを測り、幅は0.7mほどである。

覆土は157-O Sの上層が褐灰色砂シルトで、周辺の溝状遺構などと同じであるが、その下層や156-O Sの覆土は砂質土であり、やや粘性の乏しい質の堆積土である。遺物の出土はなかった。



第42図 調査区中央北西寄りの主な遺構

調査区中央の北西寄りでは、掘立柱建物跡1棟があり、その西にも掘方の比較的明瞭な小穴が幾つか存在していた。

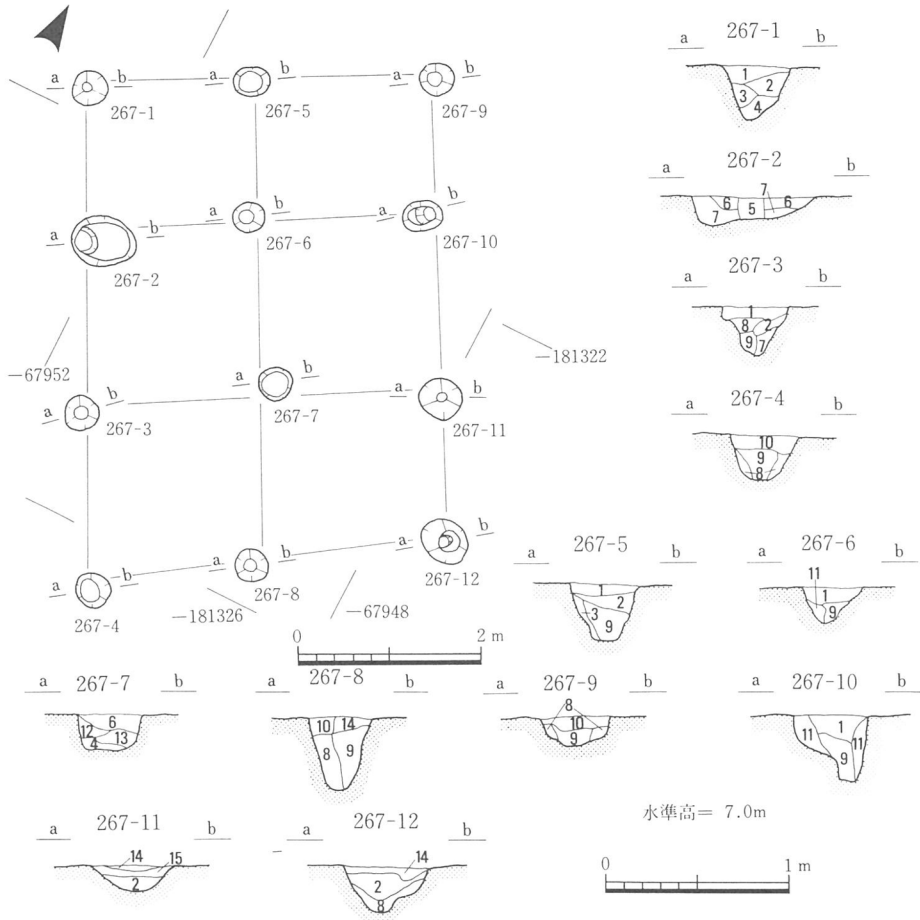
#### 267-OB

調査区中央の北西寄りに位置する掘立柱建物跡である。N-27°-Wに主軸をとる。桁行3間（西5.5m、東5.0m）、梁行2間（北3.8m、南3.9m）を測る。やや歪んだ平面形を呈している総柱の建物である。

柱穴の平面形は円～楕円形で、規模は267-6で35×33cm、267-2で72×55cmを測るが、おおむね40×36cmほどである。深さは14～40cmまでであるが、20cm以上が過半数を占めている。267-2・9・11を除くと掘方は比較的しっかりとしている。また267-2・3・4・5・6・8・9・10の8基では柱痕が確認された。堆積土が幾分崩れているためその幅は一定しないが、過小にみても径10cm前後の柱材が使用されていたものと考えられる。

267-3・10では柱痕の中や上部の覆土から遺物が出土している。267-3では土師器皿（48g）・杯A I（37g）・甕（20g）・不明（6g）、黒色土器A類不明（2g）が認められ、そのうち土師器の皿（194）と杯A I（195～196）を図示した。また267-10では土師器皿（38g）・杯A I（40g）・甕（76g）・不明（35g）、黒色土器A類杯B I（48g）・不明（10g）、が出土し、そのうち土師器の皿（189～191）と杯A I（192）、および黒色土器A類の杯B I（193）を図示した。

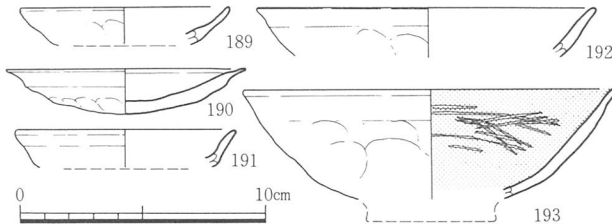
これらの遺物は、04-OBの柱穴から出土した遺物や02-OX出土の一群のものと同時期であると考えられる。



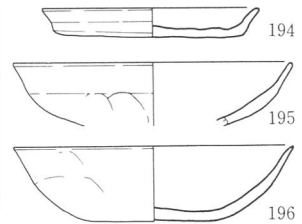
- 1 褐色 (10YR4/4) 粘シルト, やや粗質
- 2 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘シルト, 小礫少量含む
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 粘シルト, 粘性やや強い, 埋土
- 4 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質土, 黒褐色土混入, 埋土
- 5 褐灰色 (7.5YR5/1) 粘質土, 粗質, 柱痕
- 6 にぶい褐色 (7.5YR5/3) 粘シルト, 締まりあり, 埋土
- 7 黒褐色 (7.5YR3/1) 粘シルト, 小礫少量含む, 埋土
- 8 黒褐色 (10YR3/2) 粘シルト, 黄褐色土少量混入, 埋土

- 9 黒褐色 (7.5YR2/2) 粘質土, やや粗質, 柱痕
- 10 灰褐色 (7.5YR6/2) 砂シルト, 小礫少量含む
- 11 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土, やや粗質, 埋土
- 12 暗赤灰色 (2.5YR3/1) 粘質土, やや粗質
- 13 暗赤灰色 (2.5YR3/1) 粘質土, 黄褐色土多量混入
- 14 褐灰色 (7.5YR5/1) 砂シルト, 黄褐色土混入
- 15 黒褐色 (5YR3/1) 粘質土, 粗質

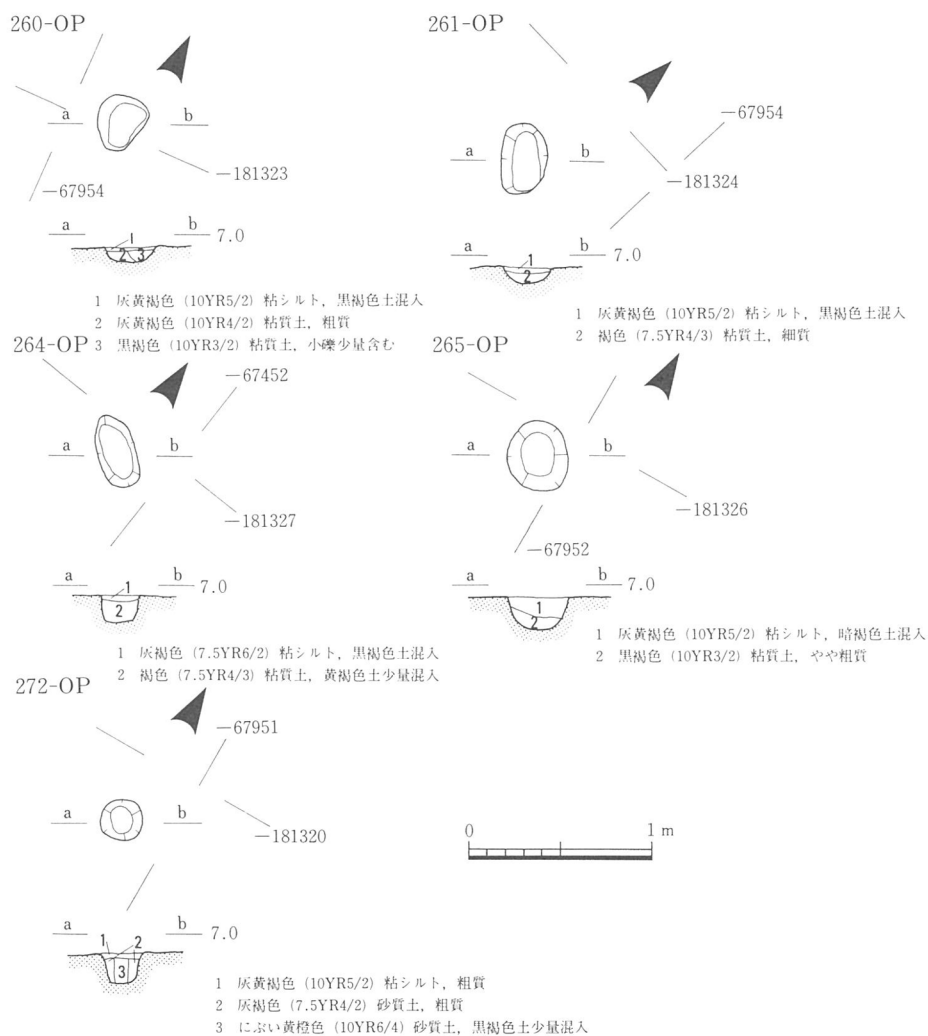
267-10



267-3



第43図 267-O Bおよび出土遺物



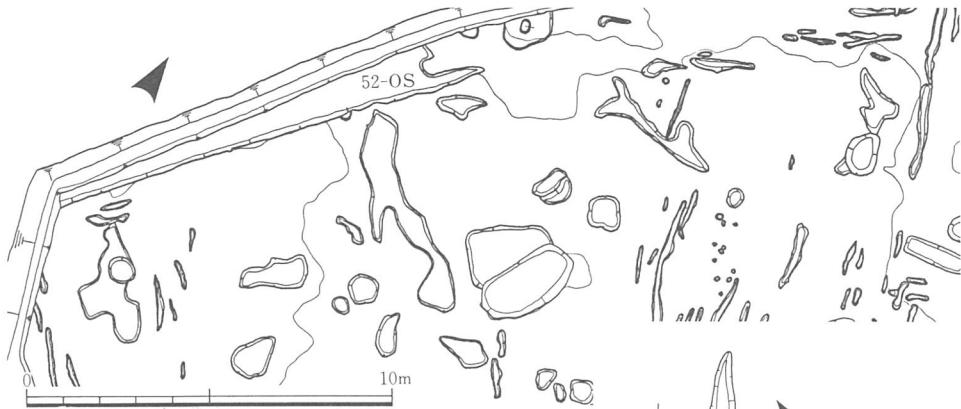
第44図 267-OB周辺の小穴

267-OB周辺の小穴

267-OB周辺において掘方の比較的明瞭な小穴が5基認められた。260・261・264・265・272-OPである。各小穴の上部覆土は灰黄褐色粘シルトあるいは灰褐色粘シルトであり、267-OBの柱穴とは若干様相を異にするが、遺構分布の状況は04-OB周辺と近似しており、掘立柱建物跡に関連する構造物のあった可能性も考えられる。

267-O B東方の建物

267-O Bの東から南方向一帯には植物痕と思われる不整形で浅い小穴が多数散在しているが、それらの存在しない範囲が267-O B東方9 m付近に認められる。その範囲は南北3.5m、東西6.7mを測り、2間、3間半の大きさとほぼ対応する。建物の存在した痕跡を遺構としては捉えられないが、植栽が建物に規制されることのあることから、ここに建物が存在していた可能性を考えておきたい。



第45図 調査区西隅の主な遺構

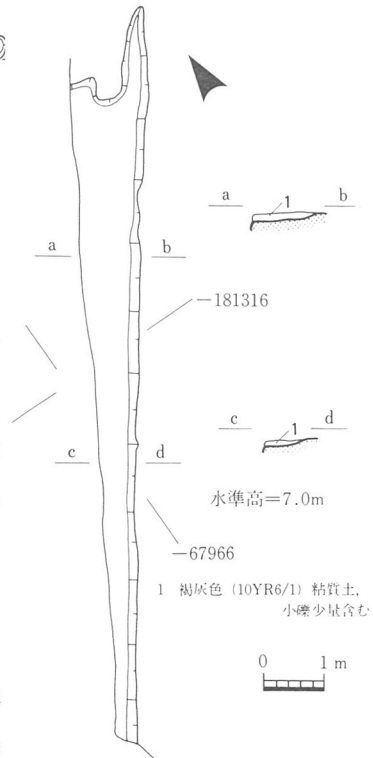
調査区西隅でも耕作痕や小穴が散在しているが、目立った遺構には乏しく、主な遺構としては溝状遺構1基が挙がるにすぎない。

52-O S

調査区の西壁に接して位置する、幅広い溝状遺構である。

西および南側が調査区外に延びているため全形を捉えることはできないが、現状で長さ11.8m、幅1.3mを測り、溝状遺構の中では規模の大きなものである。主軸方向についても明確ではないが、およそN-37°-Eにある。

深さは10cmほどで、底面は比較的平坦である。覆土は、第Ⅲ・Ⅳ層再堆積土の褐灰色粘質土の単一層である。出土遺物はなかった。

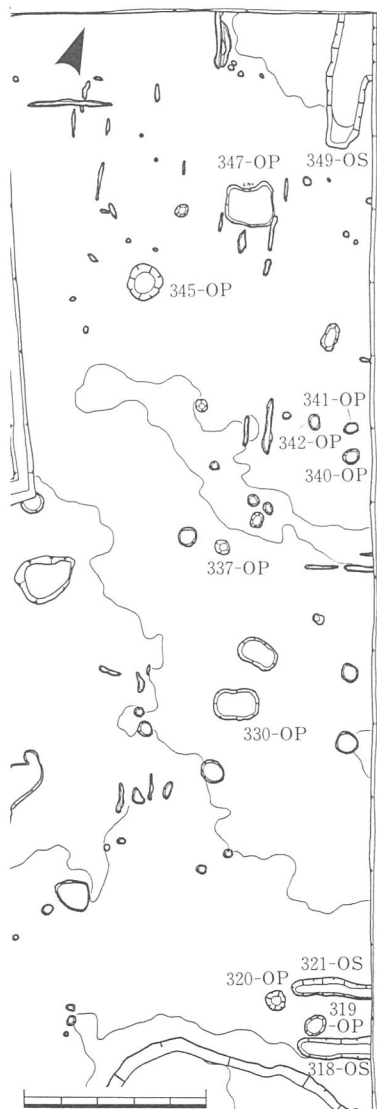


第46図 52-O S

調査区北側でも溝状遺構が認められるほか、掘方の明瞭な小穴がみられ、そのうち幾つかはまとまりをなしている。

#### 349-OS

調査区北東隅に位置する。北東部が調査区外に延び出ているため、その全形は不明であるが、現状で長さ3.6m、幅1.1mを測る。主軸方向は $N-11^{\circ}-W$ である。底面は平坦で壁の立上りは直線的である。覆土は褐灰色粘シルトを基調に、周辺の第V層を混入している。遺物の出土はなかった。



第47図 調査区北側の主な遺構

#### 318・321-OS

調査区北東部分に位置する。主軸方向を $N-70^{\circ}-E$ にもち、1.2mほどの間隔をもって並走している。ともに全形は捉えられないが、現状での長さは318-OSが2.0m、321-OSが2.2mで、幅は0.5~0.6mほどである。覆土はいずれも灰褐色粘シルトを基調としている。出土遺物はなかった。

#### 347-OP

349-OSの南西2mにある。南北およそ1.0m、東西1.4mほどの、北側がやや崩れた方形を呈する小穴である。平面形は明瞭であるが、深さは5cmと浅い。覆土は灰褐色粘シルトの単一層である。

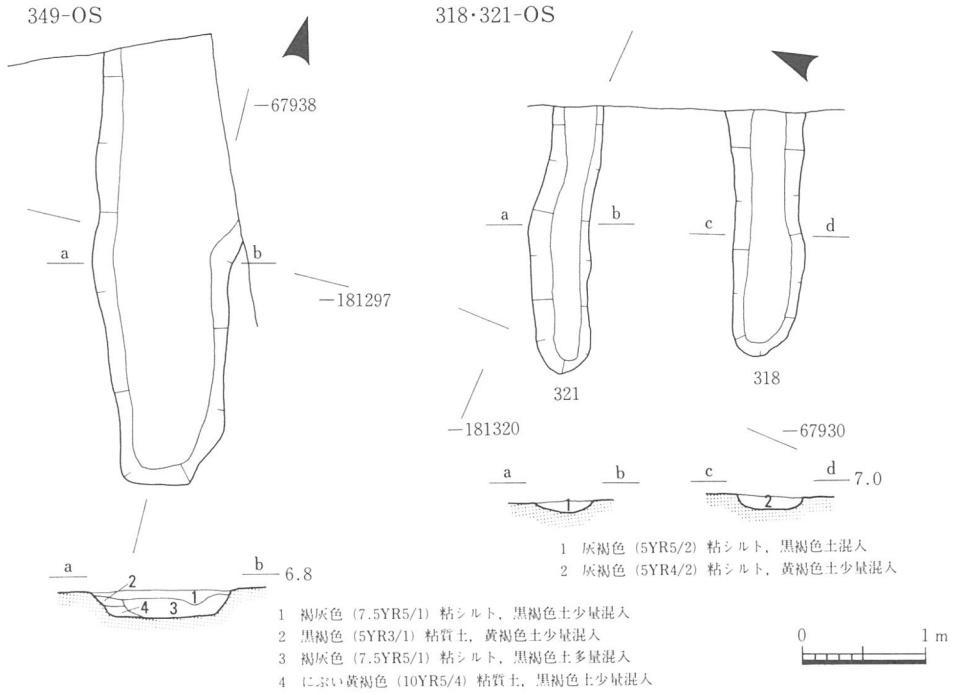
#### 345-OP

347-OPの南西約2.5mにある。長軸1.0m、短軸0.95mのやや不整な円形を呈する。深さは34cmあり、覆土は3層に細分できる。出土遺物はなかった。

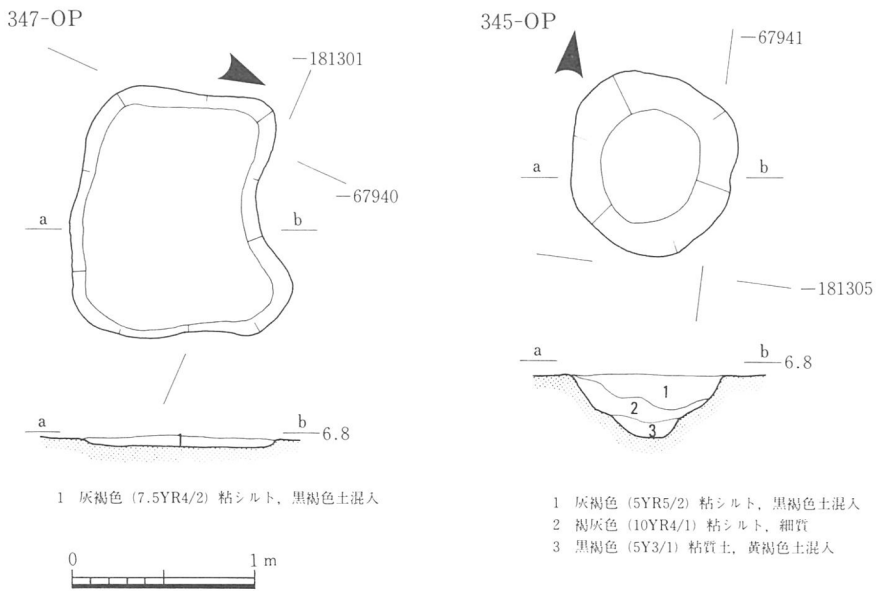
#### 調査区北東側の小穴

調査区北東隅から東側にかけての範囲にも比較的掘り込みの明瞭な幾つかの小穴が検出された。そのうち319・320-OPは0.7mの間隔で、340~342-OPは0.4~0.6mの間隔でそれぞれまとまりをもっている。

330-OPが長軸1.2m、短軸0.8mの方形隅丸を

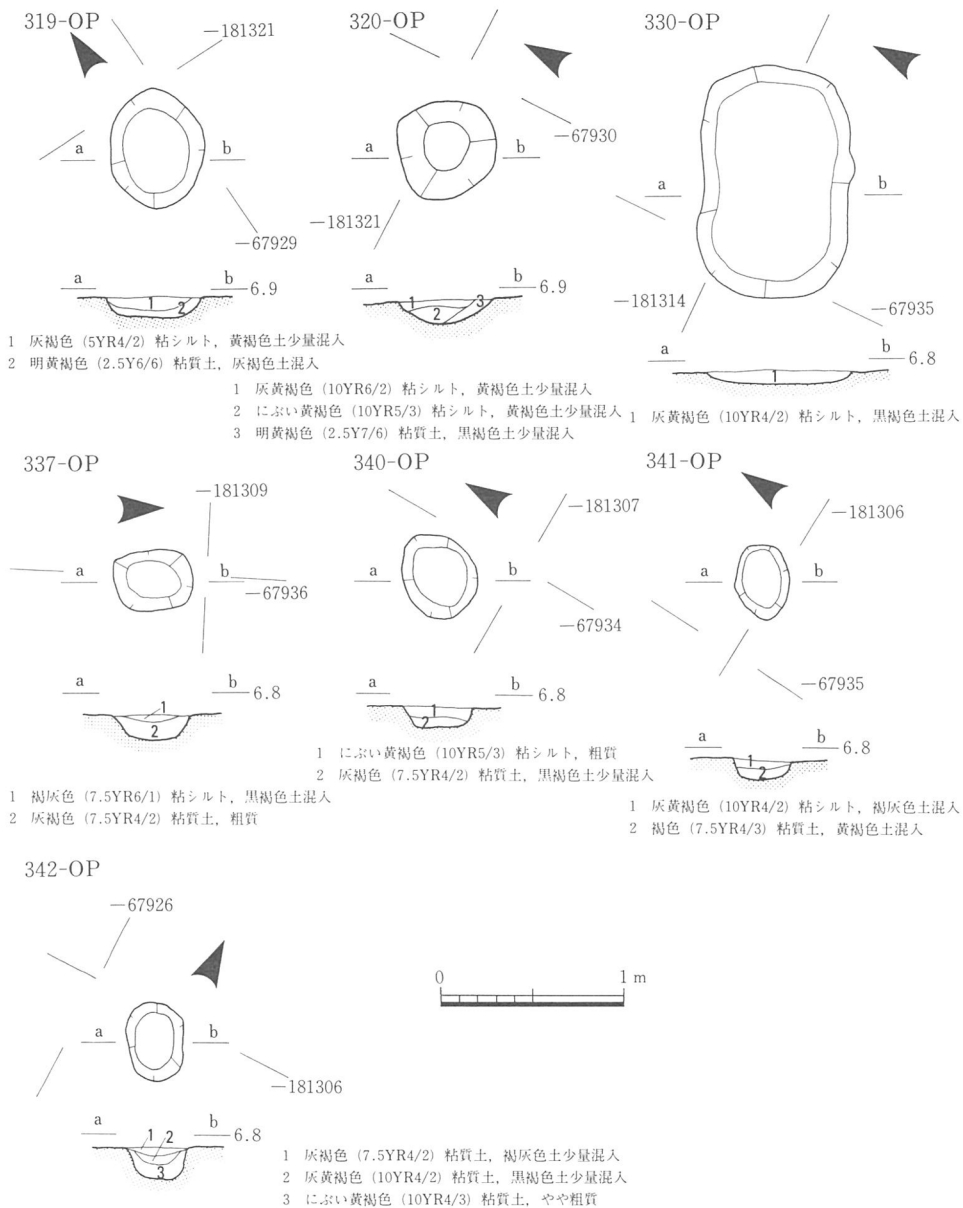


第48図 調査区北側所在の溝状遺構



第49図 調査区北側所在の小穴 (1)





第50図 調査区北側所在の小穴 (2)

呈している以外、おおむね長軸0.4～0.6m、短軸0.3～0.6mの楕円形である。深さは330-OP以外12～19cmである。

覆土はいずれも(灰)黄褐色の粘シルト・粘質土あるいは灰褐色の粘シルト・粘質土を基調としている。遺物の出土はなかった。

### ③ 耕作痕について

調査区のほぼ全域にわたり耕作痕（耕作土を掘り起こす際についた起耕具の刃先痕）が検出された。その数は約200条にのぼる。

さてこうした耕作痕であるが、大半のものはおよそ北西—南東方向に主軸をもち、ごく一部のものがこれと直交する方向にある。しかしながら同じ北西—南東方向でも詳細にみると僅かずつ方向に違いがあり、しかもそれが群単位で認められる。耕作痕の検出されなかった調査区中央東側を除くと5ブロックに分けることができ、



第51図 耕作痕分布

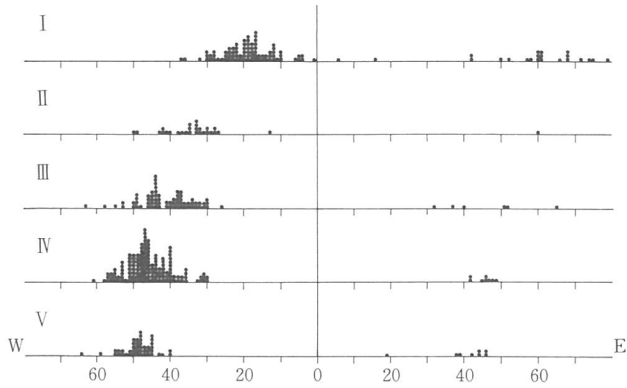
ブロック I 17~20° を中心に10~30° に分布  
 ブロック II 32~34° を中心に27~43° に分布  
 ブロック III 37~46° を中心に30~50° に分布  
 ブロック IV 40~52° を中心に36~57° に分布  
 ブロック V 47~50° を中心に40~55° に分布  
 という傾向を認めることができる。こうした違いが、広がりのあるものでかつ群単位であることから、調査区の中でさらに細分された耕作域のあったことを示していよう。

またブロックの境には溝状遺構が存在する傾向にある。このことから、溝状遺構は畦脇の側溝であった可能性が考えられる。

耕作痕の覆土については、

① 褐灰色砂シルト	59.1%
② 灰褐色粘シルト	11.1%
③ 褐灰色粘シルト	8.8%
④ 明褐灰色粘シルト	7.0%
⑤ にぶい黄褐色砂シルト	5.8%
⑥ 明黄褐色砂シルト	5.8%
⑦ 暗褐色砂シルト	2.3%

となり、①が突出して多い。この褐灰色砂シルトは溝状遺構の覆土にも多く認められたもので、第III・IV層の再堆積土であると考えられる。



第52図 ブロック別主軸方向

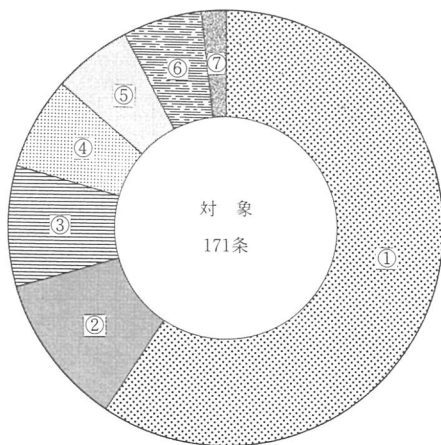
これらの耕作土は他の遺構と同様第V層上面で検出されたものであるが、その深度については1 cm (31.0%)、2 cm (49.1%)、3 cm (15.2%)、4 cm (4.1%)、5 cm (0.6%)となり、深度1~2 cmという浅いものが80%にものぼっている。

こうした深度の浅さは起耕面が第V層直上面ではなく、第III・IV層中であったためと考えられ、さらに覆土の大半を占める褐灰色・灰褐色の砂・粘シルトが第III・IV層の再堆積土であることからその点は肯首されよう。

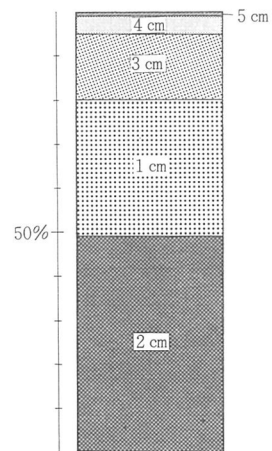
すなわち、これらの痕跡を残した耕作は第III・IV層形成中になされたもので、起耕後に周囲の砂シルト系の土が落ち込み、その刃先痕は埋没したのであろう。

後述するように、瓦器などが含まれていることからこの第III・IV層は中世代に比定でき、耕作もまたその時期になされたものといえる。ただし、調査区南隅の遺存状況のよい一群は、明黄褐色砂シルトという覆土の違いから近世期のものかも知れない。

こうした深度の浅さは起耕



第53図 覆土比率



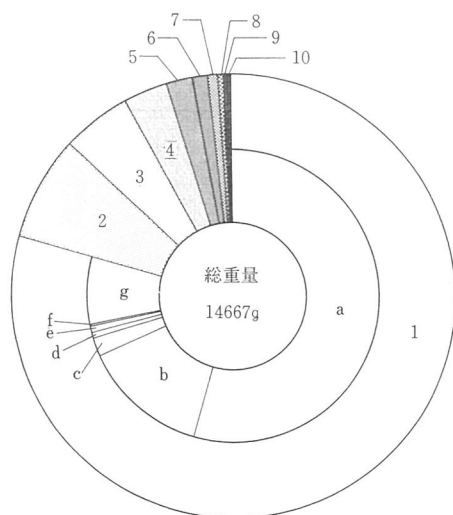
第54図 耕作痕深度

④ 包含層出土の遺物について

遺物包含層である第Ⅲ・Ⅳ層からは14,667gの遺物が出土した。その内訳は図表に示した通りであるが、土師器が全体の80%と突出して多い。そのなかでも蛸壺が8,000gと、土師器中の69%に及んでいる。蛸壺1個体の重量は他の土師器に比べ大きい、それにしても02-OX出土例からすると1,500gほどで、よって最低5個体分存在したことになるが、実際はさらに多かったように思われる。また土錘も総重量は100gしかないが、その1個体の重量を考えるとやはり10個体以上はあったといえる。このように漁撈関連遺物の出土が目立っている。

これら以外のものとしては瓦器の存在が目される。総重量292gと数個体分にすぎないが、第Ⅳ層下検出の02-OX出土遺物中には含まれていないこと、および包含層中の黒色土器が35gと極めて少ないことから、第Ⅲ・Ⅳ層は黒色土器の使用が終わった以後に形成された層であることを示している。

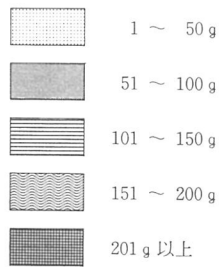
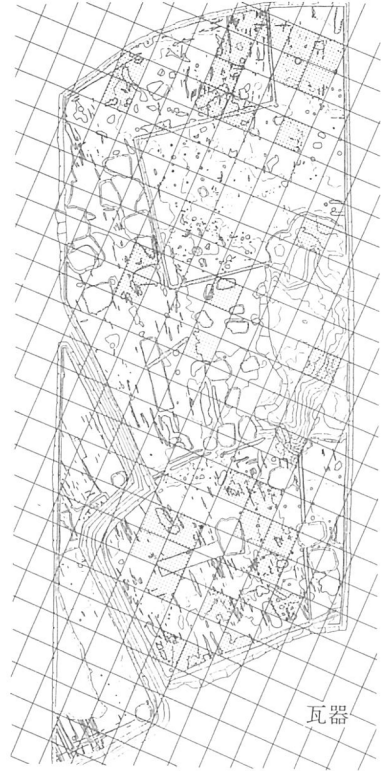
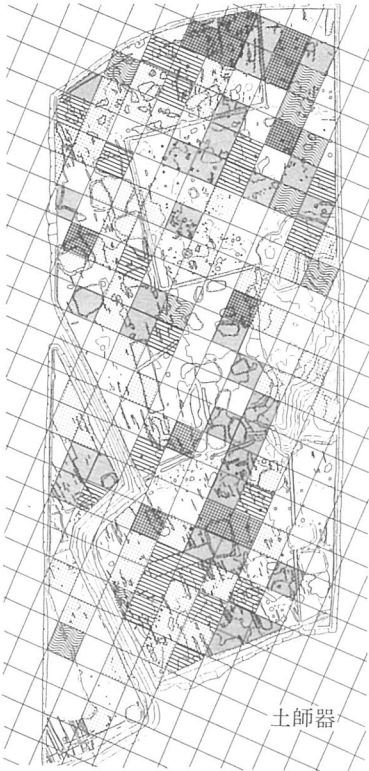
なお磁器も37g含まれている。これについては、第Ⅲ層上面で近世の耕作痕が検出されていることから、第Ⅲ層上部に近世の遺物が混在していた可能性が考えられ、第Ⅲ・Ⅳ層形成の時期を下降させる必要はないといえる。



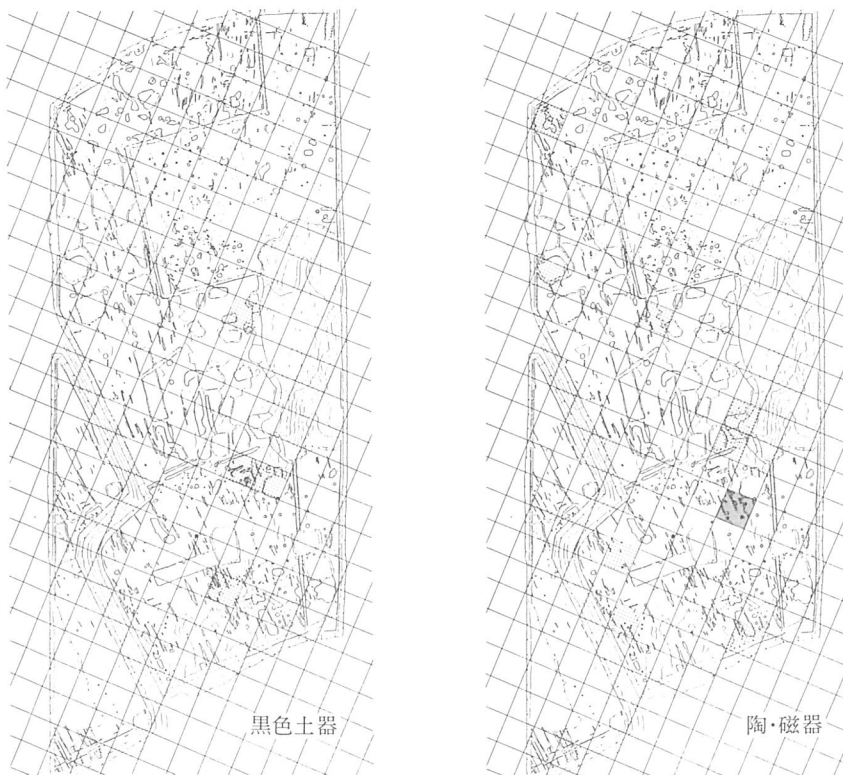
第55図 包含層遺物組成

	種別	重量 (g)
1	土師器	11639
	a 蛸壺	8000
	b 甕	2060
	c 杯A I	294
	d 鉢	102
	e 皿	82
	f 杯B I	40
	g 不明	1061
2	須恵器	1138
3	炆器	732
4	瓦	469
5	瓦器	292
6	陶器	157
7	土錘	100
8	湊焼	68
9	磁器	37
10	黒色土器	35
	合計	14667

表2 包含層遺物組成



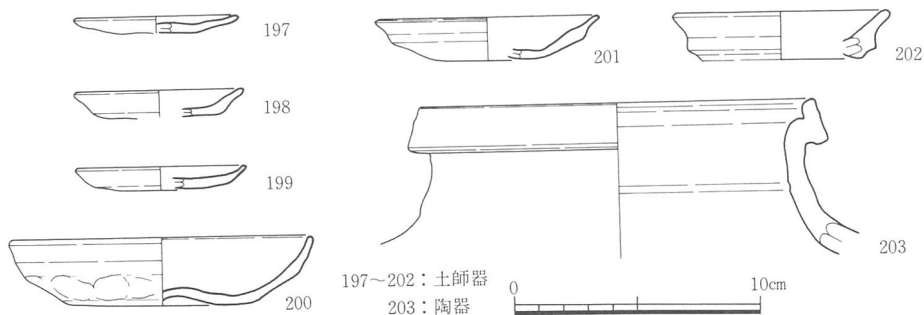
第56図 包含層遺物分布 (1)



第57図 包含層遺物分布（2）

遺物出土の分布についてみると、まず土師器については調査区全体にみられるが、ことに02-0Xの所在する南東側と、地形が下降し堆積層の厚い北東側でより多く認められる。僅かな数量ではあるが黒色土器も、やはり02-0X周辺で出土している。

瓦器については谷状の落ち込み部分を除いて全体に分布している。



197～202：土師器  
203：陶器

第58図 包含層出土遺物

### ⑤ 地山面の調査について

1992年度の調査結果から、地山面での落ち込みは人為的な掘り込みではなく、自然地形や植物痕であると考えられた。そこで、本年度の調査ではまず遺構確認のためのトレンチ調査を行なうことにした。

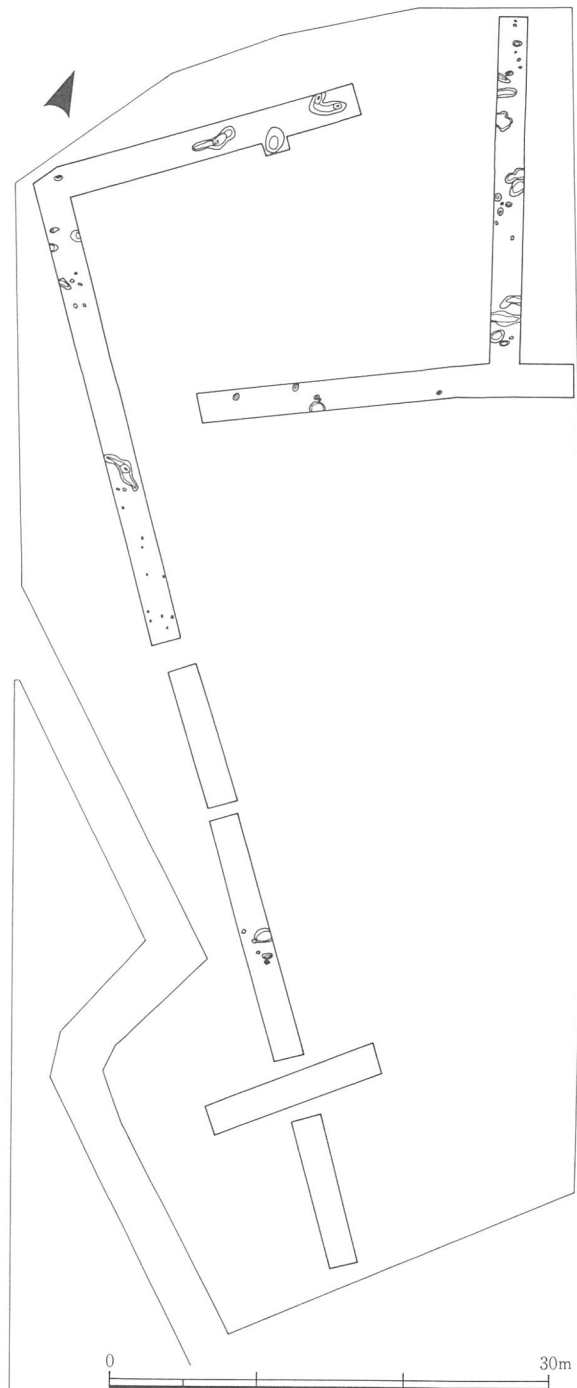
遺構保存の可能となった02-0X、04-0B、267-0Bを避け、調査区に幅5m、総延長76mのトレンチを縦横に配した。

その結果大小合わせて61ヵ所の落ち込みが認められた。

しかし、堆積土の状況や不整な平面形、凹凸のある壁面などの点から、そのいずれもが昨年度の調査成果と同様、風倒木や植物痕と考えられるものであった。

また第V層である黒褐色粘土の中からも、また検出された落ち込みからも遺物の出土は認められなかった。

このように、地山面では人為的な土地利用が、明瞭な痕跡としては見い出せなかった。



第59図 トレンチ位置・検出の落ち込み

## 第4節 試掘調査の成果

### ① 調査に至る経過・方法と目的

試掘調査は、主要地方道泉南岩出線（都市計画道路樽井男里線）建設に伴って計画された。調査は大阪府教育委員会文化財保護課の指示に基づいて、大阪府土木部岸和田土木事務所尾崎出張所との委託契約により、（財）大阪府埋蔵文化財協会が実施した。

天神の森（その2）試掘調査は、調査課5班技師岡一彦を担当者として、現地調査を1991年4月20日に開始し7月31日まで実施した。トレンチは、2m×10mを計9ヵ所（A～J T r.）を設定、市道を境に調査区の中央から北側をA地区、南側をB地区とした。トレンチ番号は基本的に北から南に向かって付けたが、B-5トレンチは、計画変更の為未調査となった。尚、B地区の6本（B-1～4・6～7）のトレンチ地区は本調査がその後実施されたため、記載は省略した。

天神の森（その3）試掘調査は、調査課4班技師田中一廣を担当者として1992年10月26日現地調査を開始、11月13日に作業を終了した。幡代地区と区別する為天神ノ森地区（天神ノ森遺跡近接地=C地区・戎畑遺跡近接地=D地区）と呼称した。尚、人家・工場などの物件所在地や耕作中の畝、大規模なコンクリート基礎がある等、実施不可能な所は除外した。掘削可能範囲内にトレンチを設定するに際してこれら未解決の場所についても充分考慮し、地形に即して設定した。さらに、掘削深度に合わせてトレンチ形状・掘削方法を現地で変更した。また、基準点埋標の設置でも路線を考慮しての選点を初めて実施した。

幅員約50～40m・延長約500mが対象であるが、調査可能地6ヵ所にそれぞれ幅4mのトレンチを設定した。掘削は、現地の条件により人力床土掘削・大小のバックホウによる機械掘削・人力掘削を併用し、層位毎に一層ずつ掘削を繰り返し遺構を追求、断ち割りで土層の把握・広がりには注意を払った。遺跡の有無を確認する事と周知の遺跡内の遺構の広がりを把握する事が両調査とも主目的である。（田中）

### ② 調査の結果

#### 1. A地区（天神の森その2）

地形は、東から西方向に向かって緩やかに傾斜を示し、標高は海拔6～7m前後を測る。調査区はその地形上を南東から北西方向に横断する形で位置している。

A-1トレンチ [A T r.] : A地区北側の地点に、南西-北東方向に設定したトレンチである。地山までの深さは約0.7mを測る。現耕土（0.2m）の下には明黄褐色土（0.1



m、床上)、明褐色土(0.08m)、灰褐色礫混粘質土(0.08m)、黒褐色礫混粘質土(0.22m)の4層の堆積が見られた。地山は明褐色礫混砂質土である。遺物は土師器、須恵器、蛸壺、瓦器の各細片が床土から出土した。また灰褐色礫混粘質土層上面に長さ約2.5m、厚さ約0.05mを測る焼土層を確認した。そのため、トレンチ東南隅を3.35m、北西中央部を海側へ3.0m拡張した。その結果、一部は側溝によって破壊したが平面が楕円形を呈する焼土坑を検出した。規模は長径1.15m、短径0.48m、深さ0.08mを測り、その長軸方向はほぼ南西―北東方向に向けられている。埋土は暗赤褐色を示す焼土で、遺物は出土しなかった。

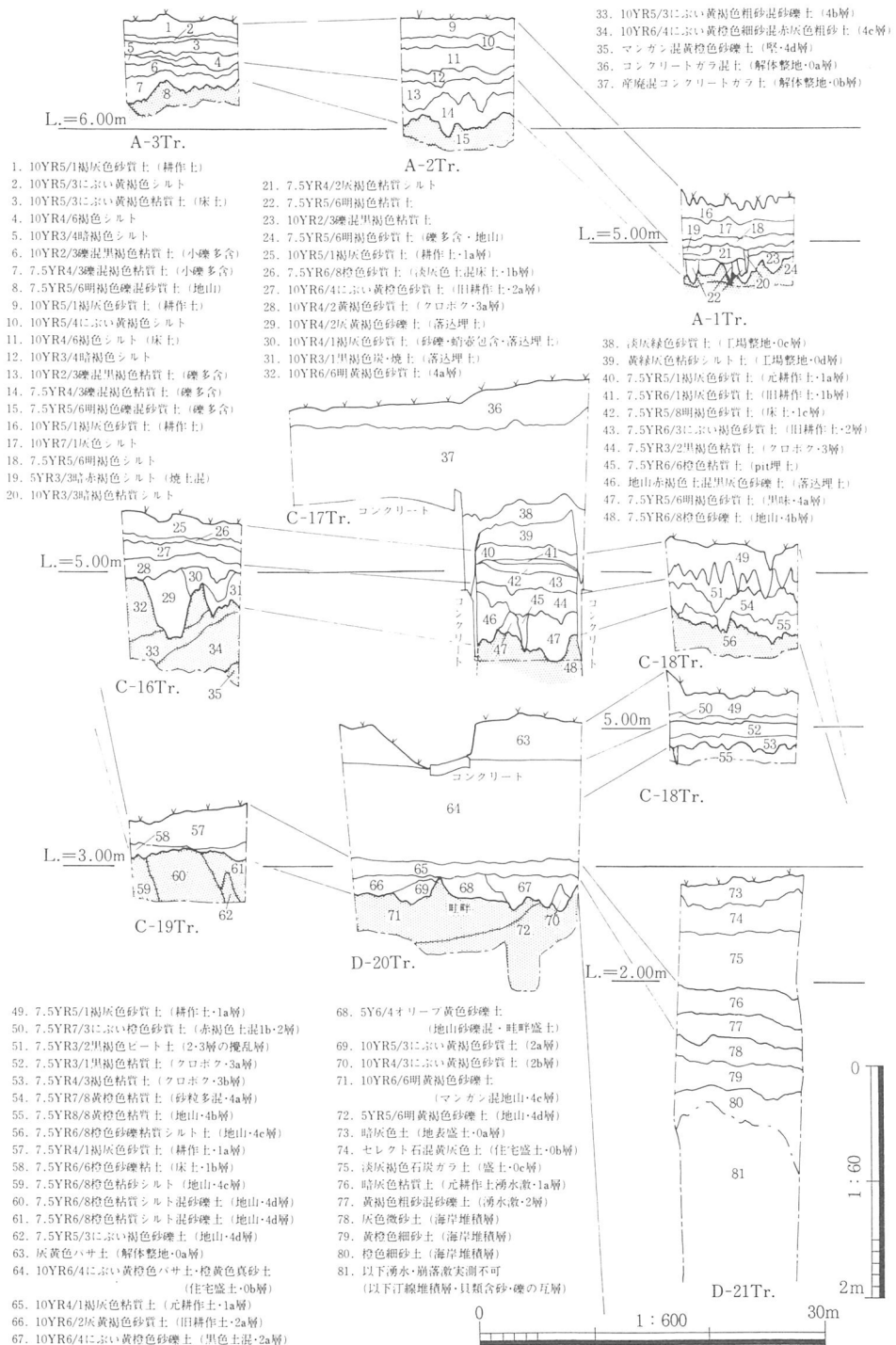
A-2 トレンチ [B T r.] : A地区中央部のやや南側の地点に、南西―北東方向に設定したトレンチである。地山までの深さは約0.9mを測り、現耕土(0.2m)の下には、にぶい黄褐色土(0.08m、床土)、褐色土(0.2m)、暗褐色土(0.06m)、黒褐色礫混粘質土(0.24m)、褐色礫混粘質土(0.16m)の5層の堆積が観察される。地山は明褐色礫混砂質土である。遺物は、土師器、須恵器、蛸壺、瓦器の各細片と、銅銭(元豊通寶)が1枚、いずれも床土から出土した。遺構は検出しなかった。

A-3 トレンチ [C T r.] : A地区南側の市道に近い地点に、北西―南東方向に設定したトレンチである。地山までの深さは約0.6mを測る。現耕土(0.2m)の下には、にぶい黄褐色土(0.04m)、褐色土(0.08m)、暗褐色土(0.03m)、黒褐色礫混粘質土(0.08m)、褐色礫混粘質土(0.17m)の5層の堆積が観察される。地山は明褐色礫混砂質土である。遺物は、土師器、須恵器、蛸壺、瓦器の細片と土錘1点が褐色土から出土した。遺構は検出しなかった。

小結 : 調査で得た知見をまとめてみる。まず、調査区の土層についてはトレンチの現表土から地山までの深さは、盛土がされている部分を除き、0.55~0.70mの範囲内に収まる。このことから、旧地形は、ほぼ現地形と同様に南東から北西方向にゆるやかに傾斜しているものと思われる。また、A-2 トレンチ付近などでは地山が若干深くなっており、この周辺が谷の部分にあると考えられる。

現(旧)耕土の下には、4~7層がほぼ水平に堆積している。またほとんどのトレンチで認められた黒褐色土層は、これまでの周辺調査によって調査区周辺に広がることが確認されている。土層内からは、ほとんど遺物が出土しない。

A-1 トレンチにおいて焼土坑を検出した。時期は中世と思われ、遺構の広がり、現在住宅化している調査区中央部に中心を求めることができよう。また土錘や蛸壺などの漁



第60図 トレンチ土層断面図 (S = 縦1/60・横1/600)



第61図 男里・天神の森遺跡調査地周辺地形と試掘トレンチ位置図

撈具遺物などから、周辺部に当該期の集落の存在が想定される。(岡)

## 2. C地区(天神ノ森遺跡近接地)

10月26日の伐開作業を手始めに、27日重機による掘削を開始し、11月12日埋め戻しを完了した。

C-16トレンチ：4m×10mを天神ノ森A地区試掘地点の続き部分の荒地に設定。1層耕作土層30cm、2層淡灰褐色の旧耕土層を20cm認める。微細の瓦器・土師器を包含。3層として淡黒褐色砂質土(クロボク)層が15cm堆積、無遺物。これは男里川上流の幡代地区の状況とも同じである。5層地山層として黄橙色砂礫層を確認、さらに灰色粗砂混じりの黄橙色砂礫層、マンガン・茶灰色細砂混じりの粗砂や砂礫層が斜めに堆積。

遺構は、地山面でトレンチを横断する溝状の落ち込みが検出される。炭・焼土や礫がブロック状に認められ、人為的に埋められている。中からは、須恵器練鉢片(図版32-10)・羽釜細片・土師器蛸壺片73(4個体以上、図版32-1~8)が出土した。中世末~近世の廃棄土坑であろう。その他、西隅に浅い耕作ピットがあった。

C-17トレンチ：工場跡地に4m×25mを路線に縦断させて設定。整地土下は、工場撤去時のコンクリートガラが約1m堆積、その下で工場の整地土を認め、北15mでは全面を厚い基礎コンクリートが覆う。よって北側は掘削を断念。

破壊を免れた土層の層序は、工場操業時盛土下に1層として耕・床土2面を20cm認める。2層マンガン混じり灰色砂質土層の旧耕土を10cm認める。極少の土師器片を挟む。3層の黒褐色粘質土(クロボク)層は20cm測る。中世土師器1片が出土し、クロボク層が少なくともこの頃にも形成されている事を示す。4層として灰黄橙色砂質土層が地山の上に堆積する。5層地山層として赤橙色砂礫層を確認。遺構は、4層から切り込まれた褐色土の堆積する浅い落ち込みとピットを確認したのみである。

C-18トレンチ：19Tr.より上段の水田面に4m×10mを設定。40~20cmの1層耕土下に3層黒褐色土を攪反した元畑地の畝を認める。20cmの3層(クロボク)は2層に分けられ、3b層は淡褐色土層である。4層は砂粒を含んだ黄灰色粘質土層。以下、5層地山層の赤黄褐色砂礫粘質シルト面となる。4層面で3層より切り込んだ耕作小ピット12個などを検出した以外、遺構・遺物は無い。

C-19トレンチ：盛土による地上げがされずに残された水田に4m×10mを設定。30cmの耕作土層下には灰黄褐色の床土を部分的に噛んだ地山(赤黄褐色粘砂シルト・砂礫)層を確認。植木穴の窪み2ヵ所以外、遺構・遺物無し。

## 2. D地区（戎畑遺跡近接地）

「文化財分布図」には戎畑遺跡として登録されている。内容はよくわかっていないようだ。路線内に個人建立の「山乃井遺跡」と記した顕彰碑がある。11月5日に掘削を開始し、11月11日に調査を完了した。

D-20トレンチ：道路を挟んだ住宅跡地に4m×20mを設定。住宅撤去後・住宅建設時の盛土（120cm）下に元水田面を確認。水田層は20cmの耕土が二面確認できる。共に明瞭な床土面をもたない泥田である。トレンチ中央部付近が旧水田の畦畔にあたる。近世後期以後の所産であろう。水田層下には地山層の黄味がかかる赤褐色砂礫層が広がる。浄化槽の攪乱以外、遺構・遺物無し。

D-21トレンチ：住宅跡地に4m×10mを設定。現地表土及びセレクト（40cm）、昭和の石炭ガラ盛土（50cm）の下で、近代の元水田面を認める。1層の暗灰色水田層（25cm）の下は黄橙色粗砂混じり砂礫層（20cm）。以下は灰色微砂層・黄橙色細砂層などの海砂・粘土の堆積を繰り返す。G. L. -3mまで掘削したが、各層からの湧水が激しく掘削を断念した。水田層以外は海岸砂層の堆積を示す。20Tr. 北側市道段差の落ちが旧海岸崖にあたると思われる。砂層中よりローリングを受けた土師器1片と近世後期の陶磁器片が出土。海岸湿地部の沼水田化するのは、近世後期以降である。

小結：小規模な調査に加え、予想もされなかった種々の条件に制約された調査であったが、当初の目的は達成できたと考える。トレンチ総長85m・調査面積約340m<sup>2</sup>であった。

①水田耕作の営みの痕跡は確認できるものの、集落遺跡などに伴う遺構・遺物は確認されなかった。水田耕作開始の上限は、C地区18Tr. 以南では、中世末ないし近世の所産であろう。天神の森C地区でも薄いですが、水性植物が生えた後に黒色土化したグライ層であるクロボク層が確認され、場所により時期が異なることが認識される事となった。

②16Tr. の廃棄土坑の遺物は、近接地に当該時期漁業従事者集落の存在を裏付ける遺物である。

③D地区は海岸段丘崖・汀線地点であり、現地形の落ちより北は海岸線であることを示した結果である。この部分の水田開発はかなりおくれ、近世後期以降に泥田水田化されたと思われる。その状況は20世紀中ば迄続いていた景観そのものであろう。（田中）

## 第4章 まとめ

### 第1節 平安時代における遺物廃棄の一例

#### ① 出土遺物の概観

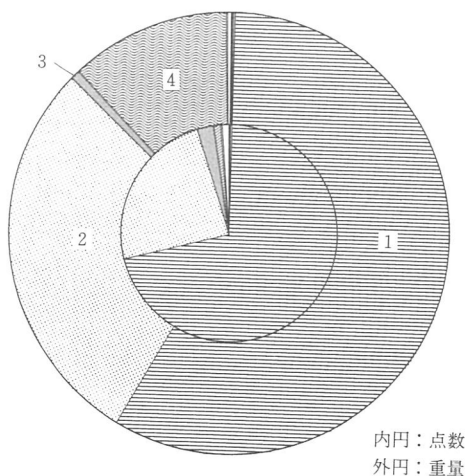
02-〇Xから1,269点、22,974gの遺物が出土した。そのうち土師器が点数比で70.9%、重量比で58.0%と過半数を占めており、次いで黑色土器A類となる。須恵器は比重が大きいため点数は14点であるが、重量は2,718gと重い。また緑釉土器が2gの細片1点ではあるが出土しており、留意される資料である。

土器以外では土錘、鉄釘、鉄滓、石製品がみられるが、それらについては出土点数が廃棄された推定個体数でもありと考えられる。そのうちでも土錘が15点、82gと多い。また2点の鉄滓も注目される。

#### ② 器種・器形分類

02-〇X出土の遺物のうち出土量の多い土師器および黑色土器については、その中に幾つかの器種・器形が認められる。そこでまず器種・器形分類を行い、組成の単位を求めた。

出土量のもっとも多い土師器についてみると、高台をもたない一群については器高と口



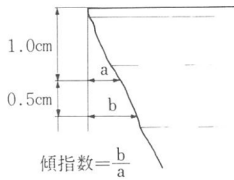
第62図 出土遺物の組成

種別	点数(点)	重量(g)
1 土師器	900	13321
2 黑色土器A	303	6607
3 黑色土器B	30	150
4 須恵器	14	2718
5 緑釉土器	1	2
6 土錘	15	82
7 鉄釘	2	18
8 鉄滓	2	25
9 石製品	2	51
合計	1269	22974

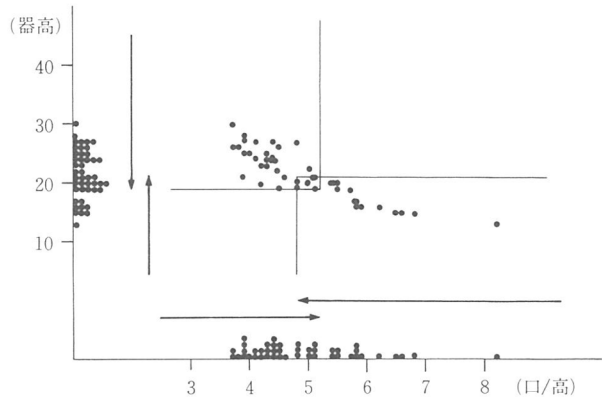
表3 出土遺物の組成

径との割合から皿と杯に分離  
することができる。

器高と口径指数（口径／器高）についてみると、器高2.0cm、指数5.0前後を境に両側でもピークのあることから、それを重複範囲とみて、器高2.1cm以下で指数4.8以上のも



第64図 計測部位



第63図 器高・口径指数

のを皿、器高1.9cm以上、指数5.2以下のものを杯と呼ぶことができる。

杯は高台の有無のほかに、さらに胴部から口縁部への立上

がりが直線的あるいは

外反気味のものは

（I類）と丸味があり

内湾気味のものは

（II類）に分けること

ができる。この立

上がりの形状につい

ては、

①口縁端部下1.0cm

と1.5cmにおける器

面までの長さの割合

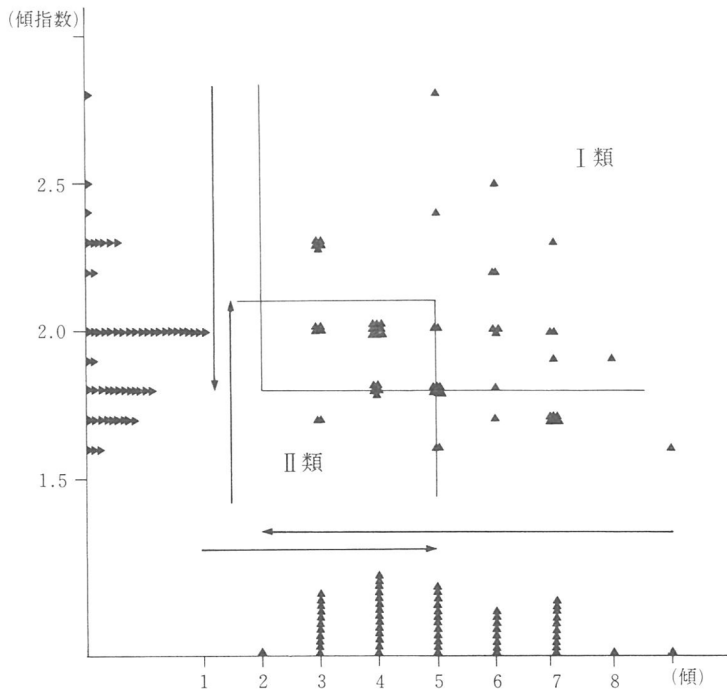
（傾指数）

②口縁端部下1.0cm

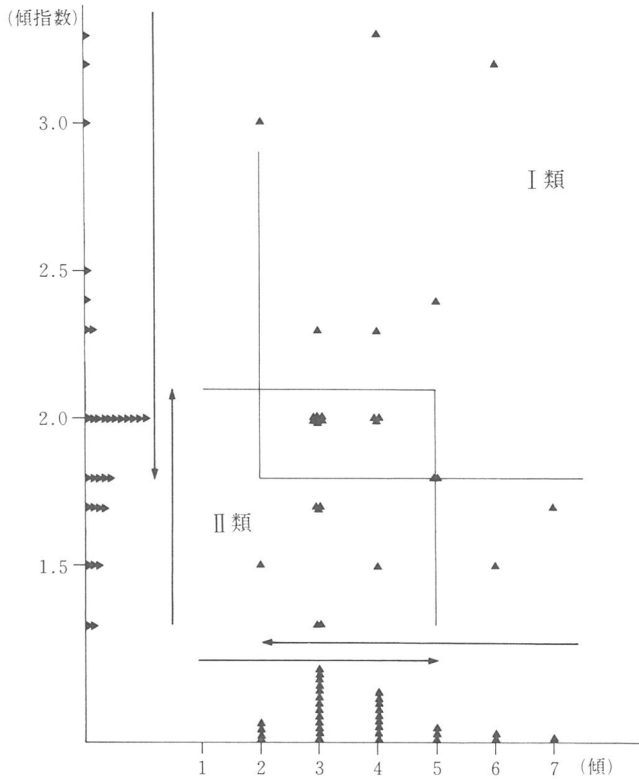
における器面までの

長さ（傾）

の相関により、口縁



第65図 土師器の傾指数・傾



第66図 黒色土器の傾指数・傾

口径の大きなものがある。いま口径指数についてみると、指数5.0を超え他とは隔絶した存在のものがみられる(94・79)。そのうち79は身深が3.0cmあり、16.3cmという口径の大きさに起因した口径指数といえ、杯に含まれる。よって94を唯一盤と呼ぶことができる。

なお、杯B IIは「碗」と呼ぶことのできる器形である。

以上の作業から、02-O X出土の土器は、土師器では杯A I・A II・B I・B IIの器形があり、さらに皿と盤がそれらとともに存在すること、そして黒色土器においても杯A I・A II・B I・B IIが存在することが求められた。

### ③ 器種組成

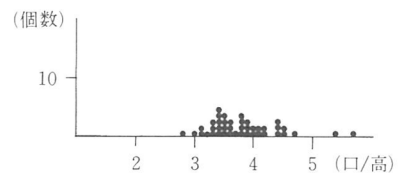
02-O X出土遺物のうち、細片1点が認められた緑釉土器を除く土器について、遺構内

部の傾斜と立上がりの度合いを求め得る。

その傾指数と傾についてみると、指数2.0、傾4.0cmを境にその両側でもピークがみられることから、それを重複範囲とみて指数1.8以上、傾2.0cm以上をI類、指数2.1以下、傾5.0cm以下をII類とみることができよう。

また黒色土器についてもその傾向は同様に認められることから、等しい指標でI、II類を区分できると考えられる。

ところで、高台を有する土師器の中には身が浅く、



第67図 口径指数分布



に廃棄された推定個体数を求めた。その方法としては、

a 口縁部の破片の大きさの累積から推定個体数を求める。これは筆者達が東京都新宿区所在内藤町遺跡で陶磁器を対象に行なった方法を用いたものである（新宿区所在内藤町遺跡調査会1992）

b 同一個体片を識別して推定個体数を求める

という2種類を併用した。その結果、土師器103点、黒色土器A類47点、同B類4点、須恵器5点がそれぞれ推定個体数として求めることができ、全体の64.8%を土師器が占めているが明らかとなった。

土師器では杯A I・A II・B I、皿が、黒色土器A類では杯B I・B IIが多く、しかもそれぞれ20個体前後という等しい推定個体数が求められた。また土師器と黒色土器A類は、杯B Iを除くと補完的な関係にあるように看取される。

また、黒色土器A類と同B類では、推定個体数は18：1の割合でA類が圧倒的に多い。

なお土師器の中には蛸壺2点が含まれており、しかも土錘、鉄滓、砥石といった生産関連遺物も出土していることから、119のようにミニチュア土器は存在するものの、出土土器は日常的に使用されていたものと考えられる。

このように、土師器の杯A I・A II・B Iと皿、黒色土器A類の杯B I・B IIがセット関係にあった可能性が考えられ、その飲食器のセットに片口鉢や貯蔵器である土師器や須

恵器の甕が加わり、日常生活具としての一群をなしていたのであろう。

#### ④ 出土状況

南東半分を試掘トレンチが入っているため、その範囲での遺物出土状況は不明であるが、それを除いて遺構内全体に遺物は分布している。

総遺物のうち182点、7,670gについて出土位置の記録を行なった。重量比にして

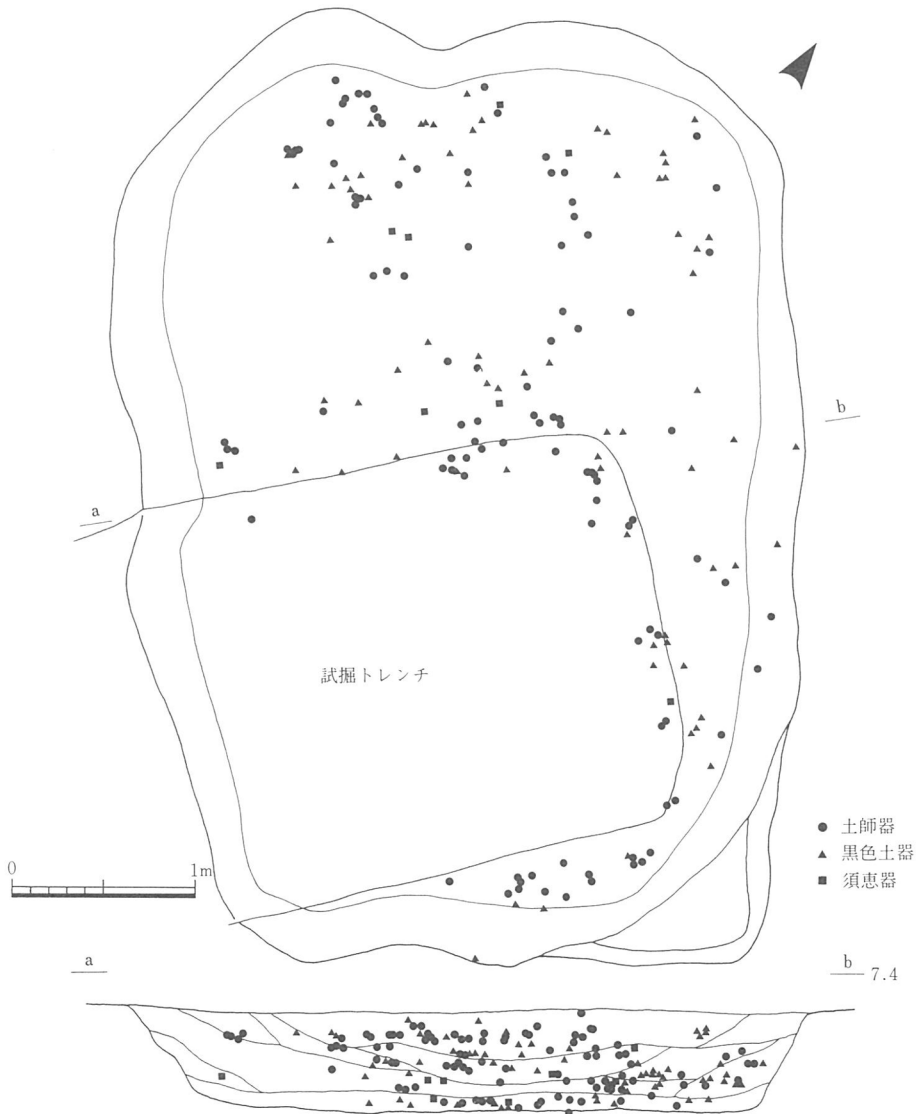
器種	土師器	黒色A	黒色B	須恵器	算出法
①杯A I	20	3			a
②杯A II	23	2	2		a
③杯B I	21	25			a
④杯B II	1	15	2		a
⑤ 皿	20				a
⑥ 盤	1				a
⑦ 甕	13			3	b
⑧ 鉢		2			b
⑨杯 蓋				2	b
⑩蛸 壺	2				b
⑪ 釜	2				b
計	103	47	4	5	

表4 推定個体数

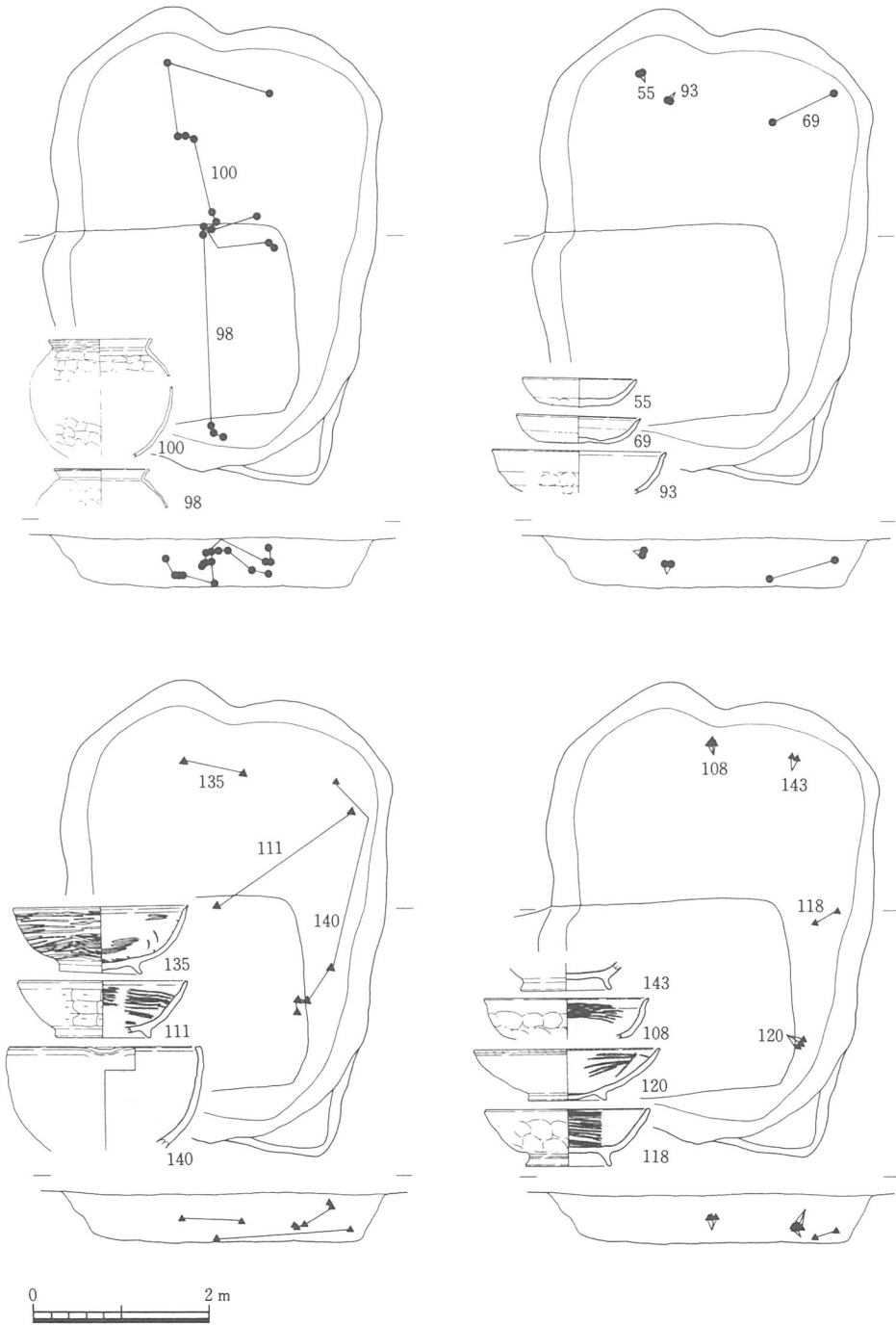
33.4%と半数以下の記録に留まっているが、全体的な状況は捉え得たものとする。

遺物の分布は平面的には先述したように全体的に拡がっているが、垂直分布においても遺構確認面から底面までの間に散在している。

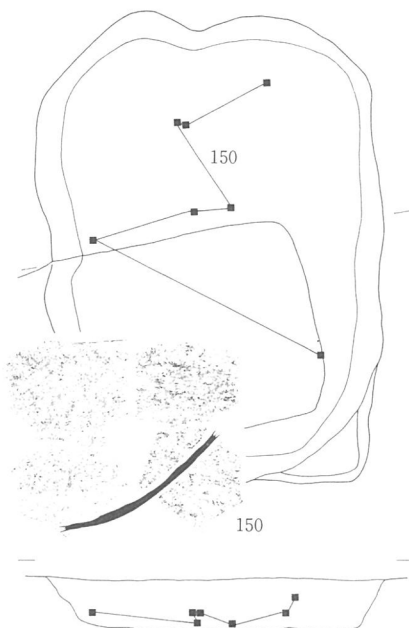
この出土記録のある遺物のうちで接合関係をもったものは土師器5点、黒色土器A類7点および須恵器1点である。



第68図 02-O X 遺物出土状況



第69図 遺物接合状況（1）



第70図 遺物接合状況(2)

そのうち土師器では98、100、黒色土器A類では111、140、そして須恵器の150で広範囲な接合関係が認められる。しかも垂直分布においても、98で26cm、100で40cm、150で30cmの幅を測り、覆土の層序を越えて接合している。

一方土師器の55、93、黒色土器A類の108、118、120、143は平面的にも垂直的にも接近して接合している。

ところで遺物の接合はその廃棄状況とも密接な関係にあり、広範囲な接合であっても掘り返しのある場合には流転・混入の可能性が高いが(仲宿遺跡調査会1991)、02-OXでは遺構の掘り直しは認められなかった。

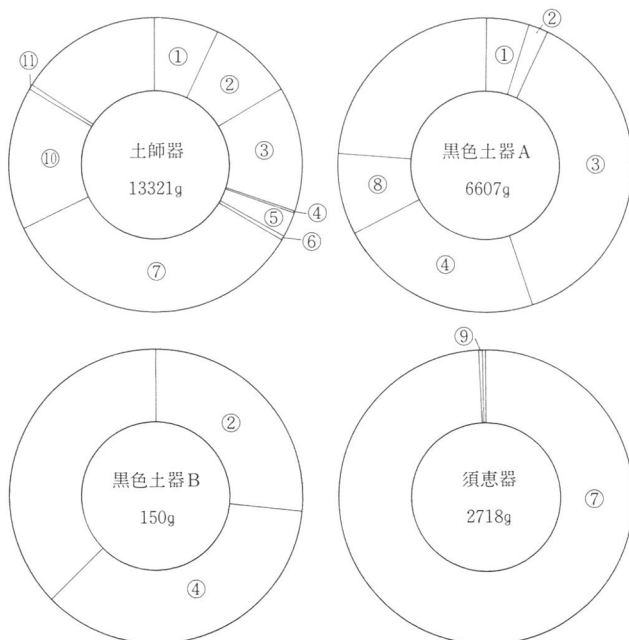
したがって広範囲な接合は、廃棄前にすで

に破片化していたためと考えられる。なお、これに対して狭域接合のものは、廃棄後に破損したものであろう。

#### ⑤ 出土遺物の廃棄状態

出土状況から廃棄以前にすでに破片となっていた個体のあることが予測されたが、その点については推定個体数と重量との関係からも窺うことができる。

土師器では杯A Iが20個体950g、A IIが23個体1,252g、B Iが21個体1,815g、



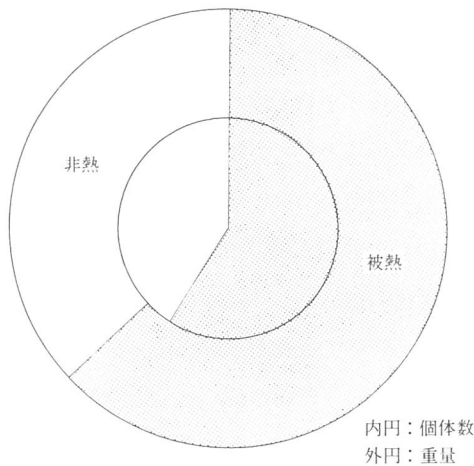
第71図 出土遺物重量比

そして皿が20個体356gである。黒色土器A類では杯A Iが3個体312g、A IIが2個体127g、B Iが25個体2,512g、B IIが15個体1,492gである。このように、杯A I、A IIに限らずB I、B IIでも1個体当たりの重量は100gを下回っている。

このことは、推定個体数の算出基準となった口縁部資料が接合作業を経てもなお破片のままであり、完形資料にならなかったことに起因している。

## ⑥ 2次焼成

遺構の覆土は22層に分層されたが、そのうち半数の11層から炭化物の出土がみられた。



第72図 土器被熱・非熱比

そして、これと対応するように出土遺物の中に、2次焼成を受けたものが少なからず認められた。

図示できた遺物のうち、土師器の杯A I・A II・B I・B II、皿、盤と黒色土器A類の杯A I・A II・B I・B II、鉢そして黒色土器B類の杯A II・B IIを対象に被熱の有無をみると、総個体数121点中71点(58.7%)、総重量6,872g中4,310g(62.7%)の土器に2次焼成が認められる。

## ⑦ 出土遺物の年代

遺物群の年代的な位置付けについては、黒色土器B類が少量ながら認められることがまずひとつの指標となろう。

ところで、10世紀中葉に位置付けられている大和川今池遺跡S D05(大阪府教育委員会1983)では、黒色土器B類は出土していない。このS D05出土の黒色土器A類は、器壁が薄く、内面に密なミガキが施され、また装飾暗文のみられるものもある。これに対して本遺跡02-0X出土の黒色土器A類は、器壁が比較的厚く、内面のミガキはやや粗である。また装飾暗文はみられない。こうしたことからS D05出土のものより後出的な傾向が窺われる。しかも両遺構から出土している「て」字状口縁土師器皿をみても、02-0X出土のもの(30~32)はやや形骸的である。

さらに、外面にユビオサエの痕を残したものが、S D05にはみられず、02-0Xでは40%ほど存在する点も新しい様相とみれよう。

むしろ、10世紀末～11世紀初頭に位置付けられる平井遺跡C-173-OO（大阪府埋蔵文化財協会1988）や大和川今池遺跡S K03（大阪府教育委員会1983）、大園遺跡S K701（大阪府教育委員会1982）出土の黒色土器と共通する点も認められる。こうしたことから、02-OX出土の遺物群を10世紀後半代に位置付けて大過ないであろう。

#### ⑧ 02-OXと出土遺物の性格について

推定土器個体数159点をはじめ土錘15点、鉄釘2点、鉄滓2点、石製品2点などを出土した02-OXであるが、出土状況からは遺構に廃棄される以前に土器がすでに破損していた可能性が窺われ、個体数と重量の関係からもその点が追認された。

しかも堆積土に炭化物の含有が認められる状況と一致して、土器の過半数に2次焼成が認められた。こうしたことを考え合わせると、これらの出土遺物は火災にあったのち廃棄されたものではないかと考えられてくる。

だが、それにしても推定個体数159点の土器量は多いといえる。土師器杯A I・A II、黒色土器（A・B類）杯A I・A II、土師器杯B I・B II・盤、黒色土器（A・B類）杯B I・B II、土師器皿、そして土師器甕と須恵器甕の推定個体数をみると43：7：23：42：20：13：3であり、2～4世帯ほどが所有する量の累積ではないかと推測される。

しかし一方で、蛸壺2点、土錘15点、砥石1点という量は、1世帯分ほどにあたろう。こうした点からすると、複数世帯分の土器が1世帯あるいは1箇所にとめられて保管されていたのではないかという状況が考えられてくる。

この02-OXの2m東方には掘立柱建物跡である04-OBが位置している。その柱穴内出土遺物から、04-OBは02-OXと同時期のものであることが知られる。また、両者より45m北西に位置する257-OBも同時期の掘立柱建物跡である。こうしたことからすると、本調査区および周辺は、10世紀後半代にはひとつの集落域にあっていることは明らかであろう。そして、その内に所在した土器保管の建物の被災によって保管土器が破損し、それらが集積されたのち、一括廃棄されたのではあるまいか。そしてさらに推測を重ねるなら、02-OXと04-OBとの位置関係から、04-OBがその保管場所であった可能性は充分にあり得ることであろう。

## 第2節 男里遺跡調査区の土地利用の変遷について

1992年度の調査で近世、中世の耕作面を確認し、地山面では時代不明瞭ながら植物痕を検出した。1993年度の調査においても中世の耕作面と、地山面での植物痕を認めたとともに、黒褐色粘土層（第Ⅳ層）上面で平安時代の建物跡と遺物廃棄遺構を検出した。なお、この面は中世確認面と同一である。

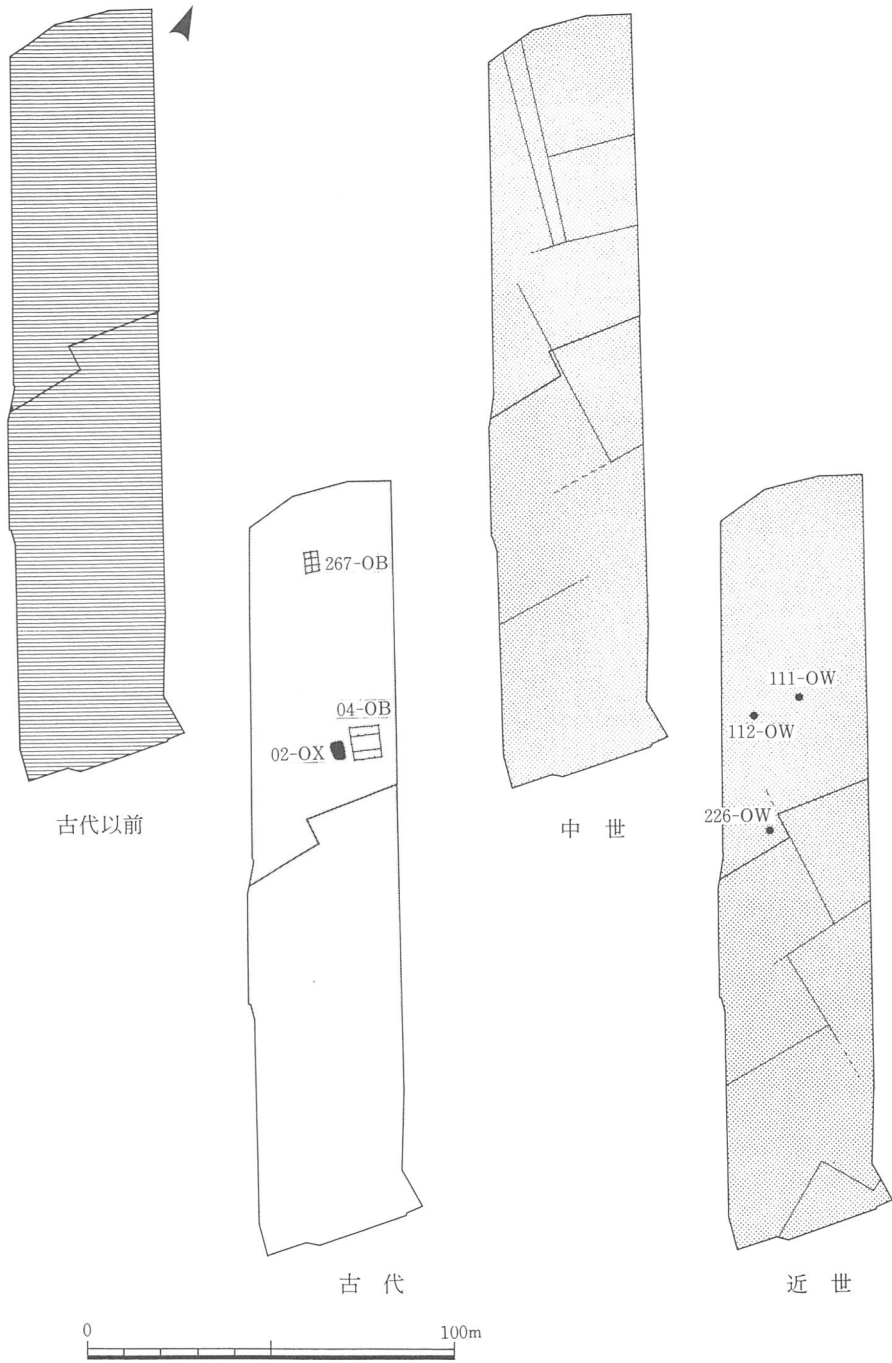
したがって、本調査区では近世、中世、古代における土地利用の在り方が明らかとなり、古代以前における当該地の状況も知ることができた。以下にその変遷を示し、まとめたい。

古代以前：地山面で確認される。この面では自然地形と植物跡が認められたのみであった。しかし、近在の泉南市教育委員会の調査では、黒褐色粘土層中より古墳時代後期の遺物の出土が確認されている。したがって、少なくともその頃までは、調査区内における土地利用は積極的にはなされていなかったものと推測される。

古代：黒褐色粘土層上面で確認。93年度調査において検出された2棟の掘立柱建物跡（04-OB・267-OB）や遺物廃棄遺構（02-OX）が当該期のものである。また掘立柱建物跡周辺の幾つかの小穴も該当しよう。したがって、93年度調査区を中心に当該地はこの時期には集落域にあっていたと考えられる。なお黒褐色粘土中から検出されたイネ、ソバ、アブラナの花粉はこの時期の耕作面の攪拌により混入したものではなかろうか。出土遺物から10世紀後半代に位置付けられる。

中世：黒褐色粘土上面で確認。検出遺構はおもに耕作痕であり、92年度および93年度調査区全域に広がっている。しかも、耕作痕を区切る溝状遺構も認められ、調査区内には幾つかの小区画に分かれた耕作域が存在していたといえる。また、花粉分析よりイネ、アブラナ、ソバ、マメの栽培の可能性が示されている。なお出土遺物より14世紀～15世紀前半に位置付けられる。

近世：灰黄色砂シルト上面で確認。検出されたものは主に耕作痕であり、92年度調査区において明瞭に捉えられている。また、93年度調査区では当該期の井戸が3基確認されている。この時代の耕作域も中世期と同じく幾つかの小区画に分かれていると考えられる。花粉分析より、イネ、ソバ、アブラナの栽培の可能性が示されている。なお出土遺物から18世紀～19世紀前半に位置付けられる。



第73図 男里遺跡調査区の土地利用変遷



引用・参考文献

- 泉佐野市教育委員会『船岡山遺跡B地点発掘調査報告書』 1985
- 泉佐野市教育委員会『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要X』 1990
- 泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡-92-9区の調査-』 1993
- 泉佐野市役所『泉佐野市史』復刻版 1980
- 大阪府教育委員会『大和川今池遺跡発掘調査概要』 1983
- 大阪府教育委員会『大園遺跡発掘調査概要・VII』 1982
- 角川日本地名大辞典編纂委員会『大阪府地名大辞典』 1983
- 新宿区内藤町遺跡調査会『内藤町遺跡』 1992
- 新宿区福祉部遺跡調査会『北新宿三丁目遺跡』 1993
- シンポジウム実行委員会『シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」』 1990
- 泉南市史編纂委員会『泉南市史』史料編 1982
- 泉南市史編纂委員会『泉南市史』通史編 1986
- 泉南市教育委員会『泉南市向井山遺跡発掘調査報告』 1972
- 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』 1978
- 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書II』 1981
- 泉南市教育委員会『海会寺』 1986
- 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書V』 1988
- 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書VIII』 1991
- 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』 1993
- 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『別所遺跡』 1985
- 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『滑瀬遺跡』 1987
- 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『平井遺跡』 1988
- 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『岡中西遺跡』 1988
- 財団法人大阪府埋蔵文化財協会『滑瀬遺跡II』 1989
- 東国土器研究会（編）『東国土器研究』3 1990
- 仲宿遺跡調査会『仲宿遺跡』 1991
- 橋本久和『中世土器研究序論』 1992
- 阪南市教育委員会『阪南市埋蔵文化財発掘調査概要VIII』 1993
- 阪南町史編さん委員会『阪南町史』上巻 1983

## 附 章

### 男里遺跡における花粉分析およびプラント・オパール分析

川崎地質株式会社（担当：渡辺正巳）

はじめに

本報告は男里遺跡内の第Ⅳ層での稲作の確認と、周辺の植生変遷を知るために、（財）大阪府埋蔵文化財協会が川崎地質株式会社に委託して実施した、花粉分析およびプラント・オパール分析の報告である。

分析試料について

第74図の①～⑥が平面的に、⑦が柱状で試料採取を行なった地点である。また⑦での試料採取層準を第75図の柱状図に示す。

分析方法および分析の結果

花粉分析方法は川崎地質株式会社（1990）に、プラント・オパール分析方法は藤原（1979）に従った。

花粉分析の結果を第75図に示す。試料中の花粉化石の含有量が少なく木本花粉がほとんど検出できなかったが、柱状採取の結果は後述のように有為な組成変化を示すことから、木本総数6個体以上の試料について木本花粉総数を基数とする百分率でダイアグラムに表した。また平面採取試



第74図 試掘採取地点

料の全てと、柱状採取の木本総数5個体以下の試料については検出種類を\*で示した。

プラント・オパール分析の結果を第75図に示す。イネ科についてのみ、最小限の分類群を識別した。また⑦の試料4・5は第Ⅳ層採取であることから図にもT-4・5と示した。  
花粉分帯（既存資料との比較と堆積時期の推定）

花粉分帯を行い、周辺地域の既存資料との比較、地層の堆積時期の推定を行なった。

Ⅲ帯（試料No. 7, 6）：アカガシ亜属、シノキ属などの暖温帯林要素が高い出現率を示す。シノキ属が出現する試料No. 7をb亜帯、出現しない試料No. 6をa亜帯とした。岸和田市の小田遺跡では、同様の花粉組成を示す層準の堆積時期が中世以前とされ（川崎地



質1990)、今回の調査ではこの層準は古代以前の堆積と推定されていることから、III帯が古代の植生を反映している可能性が高い。

II帯(試料No.3) : アカガシ亜属に加え、マツ属(複繊管束亜属)、ツガ属、コウヤマキ属が同程度出現する。草本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)、アブラナ科の出現率が高い。岸和田市の芝ノ垣外遺跡では、同様の花粉組成を示す層準の堆積時期が中世以降とされ(川崎地質1993)、今回の調査ではこの層準は近世の堆積と推定されていることから、II帯が近世の植生を反映している可能性が高い。

I帯(試料No.2, 1) : マツ属(複繊管束亜属)が他の木本花粉に比べ高い出現率を示し、草本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)、アブラナ科の出現率が高い。芝ノ垣外遺跡では同様の花粉組成を示す堆積時期が近世以降とされ(前出)、今回の調査でもこの層準は近世の堆積と推定されていることから、I帯が近世の植生を反映している可能性が高い。

耕作について  
IV層を対象にしたプラント・オパール分析では、5試料でイネのプラント・オパールが検出され、稲作が行なわれていた可能性が指摘できる。しかしその検出量は、この地点での稲作を断定するには十分な量ではなく、他の要因で地層内に混入した可能性もある。

また花粉分析では検出総数が少ないものの、6試料でイネ科(40ミクロン以上)が検出される。イネ科(40ミクロン以上)がイネに由来するとは断定できない(中村1974)が、一般的な出現傾向からイネとの関係が深いといえ、よって第IV層での稲作の可能性が、非常に低いものの指摘できる。またアブラナ科、ソバ属やマメ科(ソラマメ属)などの栽培と関係する種類も検出されている。したがって畑作の可能性も指摘できる。

以上のようにプラント・オパール分析、花粉分析から、第IV層が耕作土であった可能性が指摘できるが、第IV層を旧耕作土と確定するための十分な証拠が得られなかった。

#### 古植生変遷

花粉分帯をもとに、層位の比定時期ごとに古植生の推定を行なった。

古代以前(III帯) : アカガシ亜属、シイノキ属花粉などの照葉樹林要素が高い出現率を示し、平野～丘陵は照葉樹林で被われていたと考えられる。また山地にはコウヤマキやツガをとまなう中間温帯林が分布していたと考えられる。遺跡内では稲作やソバ栽培の可能性もある。またアブラナ科花粉が高率で出現し、藤田ほか(1991)の条件とも一致する。アブラナ科の高率出現は、多くの場合近世以降であるが、「延喜式」の記述にアブラナがあることから、ここでのアブラナ科もアブラナ栽培に由来すると考えられる。

中世：木本花粉がほとんど出現しなかったため、森林植生の推定はできないが、前述のように遺跡内での稲作やアブラナ、ソバ、マメの栽培の可能性がある。

近世（Ⅱ帯）：Ⅲ帯に比べアカガシ亜属花粉が減少することから、平野～丘陵の照葉樹林の縮小が考えられる。これに対してマツ属（複繊管束亜属）、ツガ属、コウヤマキ属花粉が増加しており、アカマツ、コウヤマキ、ツガをともなう中間温帯林の拡大が推定される。しかし、この中間温帯林要素の増加は、アカガシ亜属の減少にともなう相対的な変化と考えるのが妥当である。したがって中間温帯林の分布域は古代以前と同程度、あるいは縮小したと推定できる。また遺跡内では稲作やソバ、アブラナの栽培の可能性がある。

近世（Ⅰ帯）：マツ属（複繊管束亜属）花粉が高率を占めることから、丘陵部にはアカマツをともなう2次林の分布が考えられる。さらにモミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属花粉の出現から、和泉山地にはモミ、ツガ、コウヤマキ、スギをともなう中間温帯林が分布していたと考えられる。遺跡内では稲作やソバ、アブラナ栽培の可能性がある。

#### まとめ

①プラント・オパール分析、花粉分析、地層観察の総合的判断から、第Ⅳ層が耕作土壌であった可能性は指摘できるが、断定するまでには至らなかった。今後の継続的な調査が必要である。

②今回の分析結果と周辺地域での既存データとを比較し、花粉組成変遷および花粉帯の示す時期が既存データとほぼ一致することが明らかとなった。

#### 引用・参考文献

- 川崎地質株式会社（1990）『小田遺跡（その2）花粉化石等微化石及び火山灰分析』
- 川崎地質株式会社（1993）「芝ノ外垣の花粉・珪藻分析」『芝ノ垣外遺跡』
- 中村 純（1974）「イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として」『第四紀研究』13
- 藤田憲司・古谷正和・渡辺正巳（1991）「大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率について」『日本文化財科学会第8回大会発表要旨集』
- 藤原宏志（1979）「プラント・オパール分析方法の基礎研究(3)」『考古学と自然科学』12

図

版

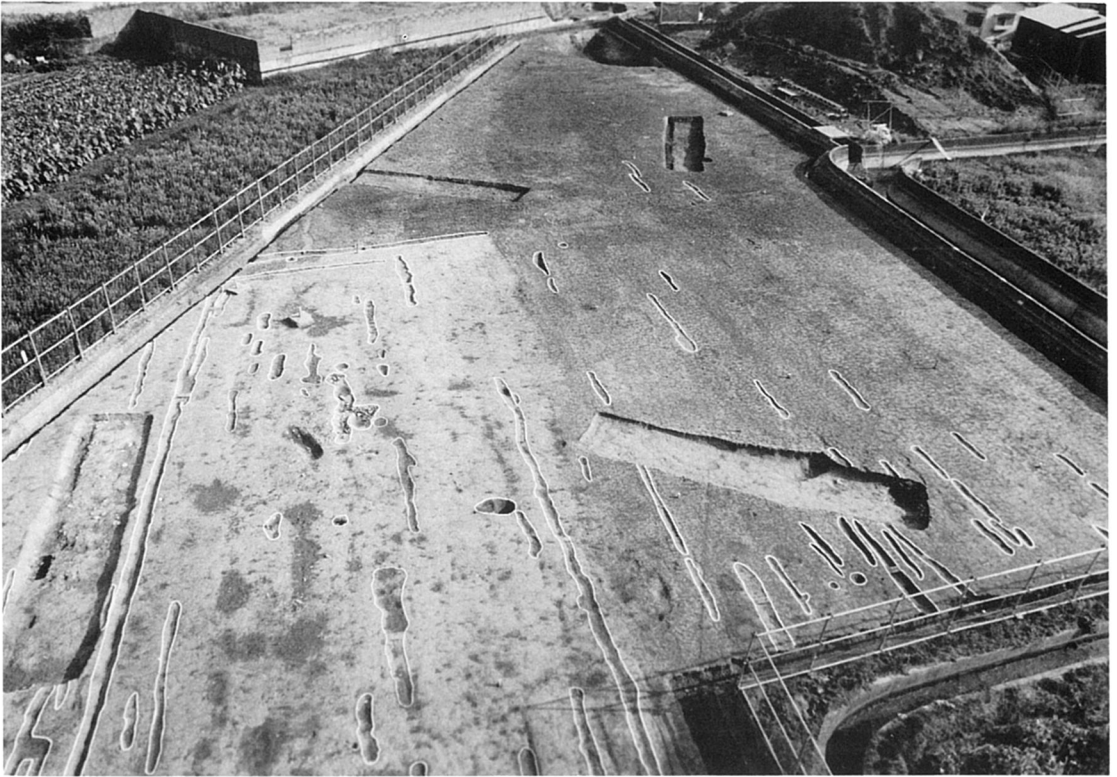




92年度 03・04-OZ (北から)



92年度 13・14-OZ 遠景 (北西から)



92年度 13・14-O Z (北西から)



92年度 15・16-O Z (北から)